

鹿兒島県史料

齊彬公史料

第三卷

題
字

鎌田要人
鹿兒島県知事

例 言

一本書は、東京大学史料編纂所蔵本「斉彬公史料」（二〇一冊）を底本とし、これに底本収録以外の斉彬文書を補遺として、これを「鹿児島県史料 斉彬公史料」全四巻として刊行するものである。時代の範囲は、文化八年から明治二十九年までである。第三巻は、安政五年分、すなわち同年正月から斉彬死去に至るまでの史料と、死後文久二年から明治二十九年までの贈位関係記録等を本編として、これに安政元年から同五年までの分と第一巻追加分の補遺史料を収めて刊行した。

一編集の体裁は、原則として原編者の体裁によった。

一原編者市来四郎の掲げた見出しはそのまま掲げた。

一原本もしくは写本・刊本など照合本が存在するときは、努めてそれと対比して校訂し、文末に「○○にて校訂」などと注記した。底本と照合本が著しく異なる場合には、その箇所に「〔○○文書〕・「○などと傍注にて併記し、照合史料名を示した。その際、特に照合頻度の高い左記の史料集については、次のような略記号を用いた。

照 照国公文書（島津家臨時編輯所編）

順 順聖公年譜稿（東京大学史料編纂所蔵本）

大 大日本古文書幕末外国関係文書

一刊行巻ごとに、見出しに一連番号を付した。一つの見出しで数種の文書や内容を含むときは、文首に小番号を付した。

一漢字は、固有名詞については原則として正字を用いることにし、それ以外は常用漢字新字体を使用した。特殊文

字のノ（しめ）はそのまま用いた。

一 仮名は、底本または原本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一 平出・擡頭・闕字および但書は、原則として底本の体裁によった。

一 原編者による傍注および注記（ ）などは、原則として底本の体裁によった。新に編纂者が注を付する場合は、〔 〕を附して原編者注と区別した。

一 人名および地名については適宜傍注を付した。

一 本文には適宜読点「、」を付し、人名・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点「・」を付した。

一 朱書は、その部分を「」で示し、「朱」と傍注を付した。

一 頭注および付箋は、「」で行間に示し、「頭注」「付箋」と注記した。ただし、後筆のものは削除した。

一 欠所部は□又は□を以て示し、解説困難な箇所原編者注本マ、と虫喰のある箇所は、本マ、・虫喰または〔○○カ〕・〔不明〕と傍注を付した。

一 文意の通じない字または箇所には、「ママ」または「衍カ」・「○○カ」と傍注を付した。

一 重複して掲げてある文書については、編纂者が注を付し、削除した。

一 出典を明記しない他史料集からの転載文書のうち、史料名の判明するものについては、見出しに「○○抄」と注を付して示した。

一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。この年代に該当しない収載文書については、見出しに「○○年」などと注を付した。

一 見返しに、宇和島伊達事務所蔵「安政五年七月四日伊達宗城宛島津斉彬書翰」（第七五七号文書）と鹿児島市川上矢吉氏所蔵「（安政二年カ）幕府へ島津斉彬家来上申書」（第五七八号文書）を掲げた。

齊彬公史料 第三卷 目次

例言

安政五年(戊午)

一	総覧	三
二	勅詠御拝戴事実、及ヒ御一門其他重役へ拝見允サレタル事実 正月元日	七
三	史談会速記録第 号鈔(参考) 明治二十七年四月二十日	八
四	孝明天皇御製(近衛家御簾中附從針医原田才輔寄贈)	一七
五	齊興公從三位御昇進布告 正月	一七
六	齊彬公福岡侯へ御封物伝達(黒田家紀事鈔)	一七
七	軍功家筋ノ者江知行高申受人名及ヒ達書 二月	一八
八	齊彬公堅山武兵衛ニ与ル書 二月十二日	二二
九	営中御扣席達書 安政四年三月	二二
一〇	和蘭人来港少年輩粗暴ノ挙動ヲ訓誡シ玉フ付事実 四月十八日	二二
一一	汽船觀光丸山川港ニ来ル、齊彬公臨覧始末(勝義邦紀事鈔)	二七
一二	水軍兵士創設及ヒ人名 五月二十六日	二八

- 一三 齊彬公伊達宗城公ニ与ル御書牘 五月二十八日……………二九
- 一四 齊彬公八重桜ノ御歌ニ付近衛家々人六條某ノ譚 明治二十九年一月二十五日……………三〇
- 一五 齊彬公嘉永六年癸亥ノ冬封内御巡見ノ前頃訓令 (嘉永六年十一月)……………三二
- 一六 堅山武兵衛へ与フ御書 (年代不明)……………三一
- 一七 山田壯右衛門へ与フ御書 (年代不明) 菊月二十九日……………三三
- 一八 全上 (年代不明)……………三三
- 一九 全上 (年代不明) 二月二十日……………三四
- 二〇 早川五郎兵衛へ与フ御書 (年代不明) 四月八日……………三四
- 二一 山崎拾へ与フ御書 (年代不明) 二十九日……………三五
- 二二 全上 (年代不明)……………三六
- 二三 早川五郎兵衛へ与フ御書 (年代不明)……………三六
- 二四 全上 (年代不明)……………三六
- 二五 全上 (年代不明)……………三六
- 二六 松平薩摩守様御書写 (越前家所蔵) 六月十一日……………三七
- 二七 参考 勝安芳阿部正弘侯論……………三七
- 二八 西郷隆盛カ先塋……………三八
- 二九 伊達公ノ御書翰……………三九
- 三〇 九條殿下諫奏ノ譚 (近衛家所蔵書鈔)……………三九

目 次

三二	参考 阿部正弘小伝 (明治三十年ノ春調査其筋へ進達ノ写)	四一
三三	水戸藩ノ挙動	四九
三三	齊彬公島津豊後へ与ル書 二月二十九日	五一
三四	櫻島洗出又ハ神瀨其外砂揚場等へ砦堡建築ノ御目論見	五二
三五	岩瀨伊賀守香港行取調向々エ達書 (琉球ニモ関ス)	五五
三六	長崎ニ於テ蘭人清英交戦ノ顛末具上 安政四年二月	五六
三七	参考 宮部鼎藏日記抄 三月二十七日〜四月四日	五八
三八	参考 阿部家々記鈔	六一
三九	佛蘭西条約調印人名 (条約書別冊ニアリ、茲ニ略ス) 九月三日	六一
四〇	梅田源次郎等捕縛セラル 九月七日	六二
四一	参考 橋本左内事蹟	六二
四二	西郷吉兵衛 (隆盛) 日下部・堀へ送ル書 (安政五戊午九月十日) 七日日本書徳川家蔵	六四
四三	参考 閣老阿部侯ト外国処分御親談之事實 (安政元年頃)	六五
四四	出水郷大野原及ヒ庄村海浜ニ新田開発ヲ命シ玉フ	六六
四五	考証 伊地知季安記事鈔	六六
四六	四書五經等出版セラレシ事實	六八
四七	参考 黒岩堅藏家記抄	六九
四八	新納駿河意見上申書 四月十三日	七〇

四九	勝義邦齊彬公ノ話及ヒ久光公御書翰	七一
五〇	京攝之風説 三月二十一日	七一
五一	洛中風説(原田才輔報告) 三月廿日	七二
五二	御所探訪余聞(原田才輔密報) 三月二十五日	七二
五三	宮堂上臨時参内 三月廿四日	七四
五四	水戸前中納言中山中納言へ内書送致事件探索 四月四日	七六
五五	此間關東ヨリ御返答之 勅答御文段之趣意	七六
五六	關東へ御沙汰書 三月十一日	七七
五七	堂上九十六名建言 三月十二日	七八
五八	非藏人三十六人建言 三月十三日	七八
五九	堂上諸卿へ賜金 四月十五日	七九
六〇	東坊城歎願事件之説 五月	八〇
六一	洛中之評判	八〇
六二	近衛忠熙・鷹司輔熙其他公卿建言 正月〜二月	八一
六三	松平薩摩守建言 正月二十四日	八八
六四	松平肥後守建言 安政四年十二月	九〇
六五	南部美濃守建言 正月三日	九一
六六	阿部因幡守建言 三月四日	九一

六七	黒田和泉守建言	正月三日	九一
六八	松平阿波守建言	安政四年十二月二十七日	九一
六九	佐竹右京大夫建言	安政四年十二月二十八日	九三
七〇	松平大和守建言弁扣	正月	九三
七一	松平攝津守建言	正月	九五
七二	水戸前中納言殿建言	六月九日	九五
七三	京都所司代(酒井若狹守)意見書取	正月	一〇一
七四	大道寺玄蕃意見	正月二十六日	一〇二
七五	松平阿波守密申	二月十一日	一〇二
七六	在京原田才輔密報中ノ要点	三月朔日	一〇三
七七	無名書第一(幕府補助論者ナラン)	三月十二日	一〇四
七八	全上第二	三月十五日	一〇四
七九	全上第三	三月十七日	一〇四
八〇	全上第四	三月十九日	一〇五
八一	全上第五	三月十七日	一〇六
八二	電信機及ヒ電気・地雷・水雷或ハ鋌山破裂法創設		一〇八
八三	齊彬公水戸中納言殿へ御書翰 <small>(是ニ添フ本書ハ逸ス)</small>	安政四年三月十五日	一〇九
八四	参考 非藏人日記	安政四年	一一〇

八五	大坂木津川安治川二口ノ守衛ヲ敵ニス	一一〇
八六	安政紀事抄 (金銀貨交換事件) 五月	一一一
八七	安政五年ハルリス渡来ノ事情 (伊達宗城公へ質問書 ^{明治廿三年七月})	一一一
八八	以友輔仁説 (安政四年丁巳兼三亭年十八)	一一一
八九	参考 伊地知季安紀事鈔	一一一
九〇	参考 安田助左衛門日記鈔 安政四年	一一一
九一	安政改元布令 安政元年十二月二十七日	一一四
九二	茶説	一一四
九三	医弊説 天保七年四月	一一四
九四	参考 漫言一則吉田正陰擗取素彦所藏	一一六
九五	愚見書付 安政六年二月頃・文久二年	一一六
九六	和蘭人琉球貿易ヲ懇請ス 安政四年二月	一一八
九七	齊彬公大廊下下之御部屋扣之儀承知之布達 安政四年三月	一一九
九八	水藩武田伊賀ト管中ニ於テ御対話 安政四年	一一九
九九	考証 土師庄十郎筆記 安政四年	一一九
一〇〇	藩庁及諸局ノ弊習ヲ匡シ玉フ 五月	一一九
一〇一	参考 鎌田出雲紀事抄 ^{當中老女小野島密書実ハ天璋院ノ親書}	一二〇
一〇二	学識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯正セラレント、折ニ触レテ諸士ノ品行・識量等聞キ糺	一二〇

	シ、自記セラレシ事実	一二七
一〇三	後醍院眞柱作文諸葛武侯論	一二七
一〇四	指宿二月田御入湯中ノ形況	一二八
一〇五	擊劍對抗仕合催サレシ事実 春	一二八
一〇六	吉井七郎右衛門へ琉球国ノ事情探訪ノ密命	一二八
一〇七	戊午ノ夏天下ノ形勢救フニ道ナキニ立到リタル趣西郷隆盛言上セシ事実、及ヒ英断為ス コトアラントス	一三〇
一〇八	西郷隆盛ニ天下ノ機事密命ノ事実	一三〇
一〇九	篤姫君將軍家結婚ノ際国産ノ大硯献呈ノ事実	一三一
一一〇	御近習ノ輩へ荻野流砲術ヲ学ハシメ玉ヒシ事実	一三二
一一一	高島四郎太夫 <small>茂御懇遇</small> 吉井七左衛門・相良常長 <small>旧名助太夫 後八兵衛</small> 等ニ入門命セラレシ事実	一三二
一一二	御懇交ノ大小侯及ヒ有名ナル人士交際セラレシ人名	一三三
一一三	藏書ノ印章春叢文庫ト彫刻セラレシ因由	一三三
一一四	四書五經及ヒ左傳等ノ諸書繙刻封内士民ニ恵与シ玉フ	一三四
一一五	堤長哲卿風船図並詩歌贈進セラレシ事実 嘉永四年五月	一三四
一一六	松山隆阿彌及ヒ大山綱良密仕セラレシ事実	一三五
一一七	灰液打紙製造	一三五
一一八	金銀鉞開掘奨励セラレシ事実	一三六

一一九	口之永良部島エ甘庶作式開発之事実	一三六
一二〇	鰯網並魚油製造開カレン事実	一三七
一二一	日州去川山柞灰製拵弘セラレン事実	一三七
一二二	鹿兒島神社其他大社エ黄金製ノ弊奉納セラレタル事実	一三八
一二三	江戸御在邸中鹿兒島ノ事情探偵セラレン事実	一三九
一二四	歐文ヲ学ヒ玉ヒシ事実	一三九
一二五	水藩武田伊賀ト営中ニ於テ国事ヲ談セラレン事実	一四〇
一二六	西郷隆盛洋警云々御諫言ニ対シ御弁解ノ譚	一四〇
一二七	病院創設御目論見ノ譚	一四一
一二八	山口不及 ^定 殿様御直咄覚之記	一四二
一二九	造演館揭示 明治十六年七月	一四九
一三〇	順聖公齊彬ノ遺事學海居士福地源一郎雅名	一五〇
一三一	田原陶吉記述鈔 <small>本紀ニ同説アリト雖モ他 事ニ連帶セルカ故記載ス</small>	一五四
一三二	考証 江夏千城親話筆記	一五五
一三三	池田正藏話筆記	一五九
一三四	島津忠寛君親話	一六二
一三五	綿火薬創製水戸公へ進呈シ玉フ 嘉永四年	一六五
一三六	齊彬公勝安房守ニ与フル御書簡 四月十二日	一六六

一三七	参証 世子哲丸公御嫡子御届 四月	一六七
一三八	士族給地高売買價格制限 安政四年閏五月	一六八
一三九	藩庫収納米制度	一七一
一四〇	給地高売買直成并米代ヲ差引計算 安政四年閏五月	一七二
一四一	齊彬公伊達宗城公ニ与フ書牘(伊達家所蔵) 六月十一日	一七四
一四二	柴山良助橋口傳藏等ニ与ル書(柴山氏所蔵) 七月十日	一七四
一四三	橋口彦四郎柴山 助へ与ル書(全上)	一七六
一四四	考証 黒岩賢藏家記抄	一七六
一四五	史談会速記録鈔第四十号 明治二十八年二月十二日	一七六
一四六	齊彬公福岡公へ御密簡 四月十一日	一七四
一四七	全上 安政元年四月十二日	一七五
一四八	全上 嘉永六年五月頃	一七五
一四九	福崎季連所蔵書画	一七五
一五〇	勝義邦記事鈔	一七五
一五一	齊彬公豎山武兵衛へ賜書 二月十二日	一七六
一五二	豎山武兵衛へ賜書 四月二十五日	一七六
一五三	水戸中納言へ賜書(水戸家所蔵烈公御写ノ本ニ依リテ廿四年九月九日写ス) 八月八日	一七七
一五四	参考 安田助左衛門日記鈔	一七八

一五五	参考 井伊家公用方秘録鈔	六月十五日・二十五日	二〇九
一五六	岩元六右衛門柴山良助へ与フル書牘(柴山氏藏)	四月三日	二〇九
一五七	白石日記抄(安政五年戊午)		二一〇
一五八	忠祿君		二一一
一五九	飯泉喜内履歴話(中路延年明治二十四年九月)		二一二
一六〇	福岡侯字和島侯往復書第一号(四通伊達家所藏)	十月二十九日	二一三
一六一	全上第二号	初秋三日	二一五
一六二	全上第三号	六月十七日	二一八
一六三	全上第四号	初秋二十六日	二一八
一六四	齊彬公水戸藩戸田忠太夫忠夫へ与ル御書(嘉永六癸丑十一月)		二二〇
一六五	福岡侯字和島侯へ与フル書簡(齊彬公御逝去ニ就テ)	四月廿五日	二二一
一六六	齊彬公伊達公へ御書翰	五月二十八日	二二三
一六七	近衛忠愨公及僧月照鎌田出雲へ御内書(速記録第 号参看)	八月十一日・二十一日	二二三
一六八	参考 寺島宗則自記抄		二二四
一六九	青蓮院法親王御謹慎達書		二二五
一七〇	堀田正信論		二二六
一七一	勝野豊作正道青蓮院宮ニ上ル書(安政五年八月)		二三〇
一七二	西郷吉兵衛、日下部・堀両氏ニ与ル書(安政五戊午九月十七日)		二三二

一七三	西郷吉兵衛国事ニ関シタル三件	一三三
一七四	飯泉喜内略歴中路延年筆記	一三三
一七五	僧月照事蹟黒田家々紀鈔	一三三
一七六	疑獄人名(近衛家蔵書写、前卷ニ記スモ伝写ノ誤アラム)	一三六
一七七	参考 白石正一郎日記抄	一四三
一七八	故岩山敬義君カ齊彬公ノ御近習奉職中職務上俱ニ事ヲ執リ或ハ交際ノ事実粗記憶スル処 ヲ録ス 明治二十六年六月	一四三
一七九	参考 三條實萬公事略	一四七
一八〇	鎌田出雲日記抄(江戸藩邸在勤中)	一四九
一八一	橋本左内武田伊賀ニ与ル書第一号	一五二
一八二	全上第二号 十二月初子	一五三
一八三	米国使節登營可否諮詢ニ対ル御意見書(別冊参照)	一五六
一八四	孟蘭盆祭上野増上寺猷燈幕令	一五六
一八五	梵鐘鑄換詔勅ニ対シ寺院由緒及ヒ寺院教調査	一五七
一八六	琉球通寶鑄造御目論見古例調査	一五九
一八七	佐賀侯来麿ノ説(道島正亮紀事鈔)	一五九
一八八	条約調印延期談判書	一六一
一八九	水戸前納言殿建白	一六一

一九〇	水戸中納言殿建白	五月	二六三
一九一	京都守護人体中山忠能外十五名建白	四月三日	二六三
一九二	青木春岱侍医トナル(七月四日幕府日記鈔)	二六四
一九三	太田備中守辞職セントス	七月十四日	二六四
一九四	参考 安政記事鈔(補闕及ヒ正誤)	二六五
一九五	参考 水藩及ヒ尾張・薩摩へ下賜勅書	八月八日	二六六
一九六	参考 間部詮勝上京延期(開國始末鈔)	八月二十日	二六八
一九七	参考 水戸侯・尾州侯登營(督府紀略鈔)	二六八
一九八	参考 維新史撮要	二六九
一九九	近衛家所蔵書第一	十月五日	二七一
二〇〇	全上第二	元日	二七一
二〇一	全上第三	二七一
二〇二	全上第四(薩州本田播磨守申状)	二七二
二〇三	全上第五(即宗院申状)	正徳四年十二月二十五日	二七二
二〇四	全上第六	四月五日・十一日	二七二
二〇五	全上第七	二七四
二〇六	全上第八	二七五
二〇七	全上第九(全上御結婚ニ関スル書類中ニアリ、何等ノ献立ナリシヤ知ルニ由ナキモ他日考証ノ為	二七五

	メ記シ置ス)	二七五
二〇八	全上第十篤君御方御由緒 (天璋院殿)	二七六
二〇九	伊能友歐略歴	二七八
二一〇	大政一変セサレハ外国ト交ヲナスコト能ハス 六月末頃	二八七
二一一	幕府海軍創設ノ布達 安政四年六月晦日	二八八
二一二	鉄鑄四文錢通用布令 安政四年閏五月	二八八
二一三	土族所有禄高売買価格制限令 四月	二八八
二一四	尾・水・越三侯退隠謹慎上奏書	二八九
二一五	近衛左大臣墨夷約条調印違勅ノ旨演達	二九二
二一六	日下部伊三次堀仲右衛門ニ与ル書 (水戸徳川家所蔵)	二九四
二一七	齊彬公伊達藍山公ニ与ル書 六月十一日	二九七
二一八	参考 安政紀事鈔 六月朔日	二九七
二一九	京都大火 (非藏人日記鈔) 六月四日	二九七
二二〇	参考 福井・土州・宇和島三侯、一橋公ヲ儲嗣センコトヲ密奏ス 六月四日	二九七
二二一	参考 小笠原長門守ヲ京都町奉行ニ任ス 六月五日	二九七
二二二	井伊直弼間部下總守ニ与ル書 (公用方秘録鈔) 六月十二日	二九八
二二三	参考 皇女降誕 (非藏人日記抄) 六月十四日	二九八
二二四	主上宸翰ヲ伊勢・加茂・石清水ノ三社ニ納国家安泰ヲ祈リ玉フ 六月十七日	二九九

二二五	参考 英・佛二国艦隊来港予報(公用方秘録抄)	六月十八日	二九九
二二六	藤島山城寛宥達書(非藏人日記鈔)	六月十八日	二九九
二二七	井伊直弼松平伊賀守カ行爲隠言	六月十八日	二九九
二二八	井上・岩瀬米国使節ニ応接及ヒ幕議	六月十六日	三〇〇
二二九	井伊直弼井上・岩瀬カ復命ヲ聞ク(公用方秘録鈔)	六月十九日	三〇〇
二三〇	条約締結ノ始末奏聞案(公用方秘録鈔)	六月二十一日	三〇二
二三一	諸大名諸役人物登城之形況(公用方秘録鈔)	六月二十二日	三〇三
二二三	七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覽玉フ		三〇七
二二三	御不例御危篤ノ布告	七月二十日	三〇八
二三四	御遺言之ヶ条		三〇九
二三五	御内葬並御葬式		三一〇
二三六	御遺言ノ趣山田壯右衛門筆記(本書新納駿河秘藏ス)	七月十六日	三一〇
二三七	御病症御診断書(本書黒田長溥公ヨリ廻送セラレ伊達家所蔵)	七月十六日	三一二
二三八	参考 伊地知季安記事抄		三二三
二二九	齊彬公御逝去天璋院殿御忌服布達(幕令ノ部ニモアリ)	九月二日	三一五
二四〇	伊勢国皇大神宮社官御師太夫カ祭文		三一五
二四一	御上下年月日		三一七
二四二	黒田長溥公御凶報ニ御驚ナカリシ譚		三一八

二四三	男女御子順次	……………	三一九
二四四	男女御兄弟順次	……………	三二一
二四五	福岡侯宇和島侯へ与ル書 初秋二十六日	……………	三二一
二四六	黒田長溥公伊達宗城公へ御書翰(伊達家所蔵)	……………	三二二
二四七	黒田長溥公伊達宗城公へ御書翰(九月十三日)	……………	三二二
二四八	参考 江夏千城記事抄	……………	三二四
二四九	黒田長溥公市來廣貫へ御親話(明治十八年春)	……………	三二七
二五〇	参考 在京某氏(原田才輔) 在江戸某へ寄書	……………	三二八
二五一	齊彬公御簾中御逝去布告 九月十日	……………	三二九
二五二	齊彬公薨去後ノ形況	……………	三三〇
二五三	江戸風説記	……………	三三〇
二五四	当時江戸流布ノ説	……………	三三一
二五五	三條實萬公ヨリ齊彬公へ送ラレシ御下書ノ写安政五年七月(此御書齊彬公御逝去後ニ到達 セシナラン、原書三條家ニアリ) 七月六日	……………	三三二
二五六	順聖公御三回忌懐旧詩歌 文久二年	……………	三三四
二五七	間部下總守上京照会	……………	三四〇
二五八	無名通信(東久世伯云、此書清川八郎ニヤアラン)	……………	三四二
二五九	内藤豊後守伺書(伏見奉行職) 七月二十六日	……………	三四五

二六〇	無名書牘 六月十一日	三四六
二六一	裏辻少将書牘	三四六
二六二	大日本国有志中ノ書(人名ナシ、東久世伯云、有馬新七ナラン) 八月	三四七
二六三	鎌田出雲京都御警衛御受書(原書近衛家書藏)	三四九
二六四	松平大隅守御請書(近衛家所藏) 九月十三日	三五〇
二六五	松平大隅守近衛家へ上申書(近衛家所藏) 九月十五日	三五一
二六六	鎌田出雲カ事蹟 市來四郎演説速記録鈔	三五二
二六七	鎌田出雲略履歴	三五三
二六八	琉球ニ於テ蒸氣船御注文ニ付市來廣貫へ御直書 正月二十日	三七四
二六九	蒸氣軍艦代物之取調上申書(石室秘稿鈔)	三七六
二七〇	参考 早川五郎兵衛へ賜書 <small>本書早川五郎兵衛ハ誤也 原書大久保利武氏所有</small> 安政四年八月二十九日	三七七
二七一	琉球ニ於テ汽船購求談判ノ要略及ヒ佛人恵与品 二月十七日〜七月二十六日	三七八
二七二	琉球国ニ於テ蒸氣船其他買入ノ談判、在番奉行高橋縫殿届書 七月五日	三八〇
二七三	蒸氣船買入事件、市來廣貫届書 七月三日	三八二
二七四	撰政・三司官等へ御内用向達ノ手扣 七月三日	三八二
二七五	琉球官吏蒸氣船詔文約条書 七月二十六日	三八三
二七六	市來届書 八月九日	三八七
二七七	蒸氣船御詔文御停止ノ趣島津下總・新納駿河ヨリ琉球在番奉行へノ達書 八月	三八八

二七八	町田主馬市來へ達書 八月二十六日	三八九
二七九	山田壯右衛門市來へ書簡 八月二十五日	三九一
二八〇	山田・豎山私翰 八月二十五日	三九一
二八一	江夏十郎市來へ私書 八月十五日	三九二
二八二	高橋縫殿届書 九月十七日	三九三
二八三	蒸気船御詠文其外諸事御取煩ノ儀疏役々御届書 九月七日	三九五
二八四	安政五年戊午九月二日御討音到来及ヒ御密用停止ノ達並ニ変約顛末	三九六
二八五	御密用ノ一切停止變約歸斃復命之事實	三九九
二八六	篤姫君將軍家定公へ御結婚ニ就テ御拝領 六月二十五日	四〇〇
二八七	今和泉郷池田村ノ池水灌漑ニ着手シ玉フ	四〇一
二八八	城地移転ノ御目論見	四〇二
二八九	考証 吉井友實手記(本書旧米澤藩土宮島誠一郎所有)	四〇三
二九〇	在京原田才輔内報 二月	四〇五
二九一	伊勢神宮勅使発遣詔書(在京原田才輔報告) 六月十七日	四〇五
二九二	石清水八幡宮勅使 中山殿 六月二十三日	四〇六
二九三	鴨社勅使 正親町三條殿 六月二十三日	四〇七
二九四	神宮其他奉幣費不足(原田才輔内報)	四〇八
二九五	穎娃・山川・指宿三ヶ郷人員調(安政五年ノ調、指宿御温泉中)	四〇九

二九六	齊彬公學識アル者ヲ度外ニ措クノ弊ヲ矯正	四二二
二九七	擊劍對抗仕合ヲ催サル	四二二
二九八	近衛家和歌掛日記鈔 <small>自嘉永六年 至安政五年</small>	四二二
二九九	幕府英國ヨリ汽船ヲ贖フ	四二〇
三〇〇	幕府英國ヨリ汽船ヲ贖フ	四二〇
三〇一	洋医術ヲ允ス	四二〇
三〇二	諸国人別改	四二〇
三〇三	三月	四二〇
三〇四	各外城土戸口調査午七月	四二二
三〇五	参考 土州侯三條家へ密書昨夢紀事抄 真夏五日	四二二
三〇六	米艦処分諸大名惣登場	四二二
三〇七	四月二十五日	四二二
三〇八	勅答及ヒ御問条ヲ諸侯ニ示ス	四二三
三〇九	四月二十五日	四二三
三一〇	齊彬公福井侯ニ与ル御書翰	四二五
三一〇	四月三日	四二五
三一〇	同日再度ノ御書翰	四二六
三一〇	四月三日	四二六
三一〇	中山・正親町外五卿建言	四二七
三一〇	三月七日	四二七
三一〇	水野土佐守養君尽力ノ概况	四二八
三一〇	三月二十四日	四二八
三一〇	外国処分勅諭	四二九
三一〇	三月二十五日	四二九
三一〇	外国処分ノ勅旨	四二九
三一〇	三月二十五日	四二九
三一〇	両伝奏堀田正睦ニ外夷処分ノ叡旨ヲ達ス	四二九
三一〇	三月二十六日	四二九
三一〇	川路左衛門尉・岩瀬肥後守上京	四二九
三一〇	正月九日	四二九

三二四	堀田正睦上京 正月十日	四三〇
三二五	松平久之丞・木村圖書ヲ長崎ニ遣ス 二月五日	四三〇
三二六	物産繁殖ノ令 二月二十日	四三一
三二七	府内米価高直各藩ニ廻米ヲ令ス 二月二十四日	四三一
三二八	米国使節再ヒ出府 三月六日	四三一
三二九	函館奉行ヘ達書 三月八日	四三一
三三〇	和蘭甲比丹出府 三月十一日	四三一
三三一	幕府貸付金口入世話人ノ弊ヲ匡ス 三月二十一日	四三一
三三二	哲丸公嫡子成ノ達書 三月二十七日	四三二
三三三	高島喜兵衛辭職	四三三
三三四	和蘭甲比丹拜謁式及ヒ献品 四月朔日	四三三
三三五	琉球人ヘ銀貨付与ノ達文 四月六日	四三四
三三六	米国軍艦近日渡来ノ旨布告 四月七日	四三四
三三七	尾・水二侯及ヒ溜問詰諸侯ヲ登營セシメ勅答書ヲ示ス 四月二十五日	四三五
三三八	上文ニ対シ近衛左大臣口達ノ覚 八月七日	四三五
三三九	水戸中納言勅詔書 八月八日	四三五
三三〇	中山忠能公墨夷処分上申 二月二十日	四三七
三三一	正親町三條實愛上書 二月二十四日	四三九

三三二	八條隆祐上書	四四一
三三三	中院通富上書	四四一
三三四	橋本實麗上書	四四二
三三五	野宮定功上書 二月二十五日	四四三
三三六	参考 日下部伊三次伝	四四三
三三七	参考 訥齋日下部先生墓碑面	四五六
三三八	市來廣貫琉球渡海奉命日記鈔 七月三日・五日	四七二
三三九	琉球大島及ヒ山川港へ外国貿易場御開キ并大坂兵庫ノ兩所開港猶予ノ策略中山王へ御密論 (石室秘稿鈔) 安政四年八月十九日	四七二
三四〇	中山王へ密命、英・佛・米ノ三国ニ書生ヲ出サンムトノ御趣意 (石室秘稿鈔) 前同日	四七五
三四一	琉球渡唐商人共へ御内示、清国へ古製ノ大小砲銃等売込マシムヘキ旨御内命付琉球商人ニ名ヲ籍リ渡唐スヘシトノ御内命前同日 (石室秘稿鈔)	四七六
三四二	齊彬公中山王へ臺灣島ノ内ニ渡唐船碇泊場開カシムヘシトノ密諭前同日 (石室秘稿鈔)	四七六
三四三	清国福建琉球館取弘メ及渡唐船ヲ増シ商法一層盛大ナラシムヘシトノ御内諭前同日	四七七
三四四	市來廣貫密命ヲ奉シ琉球ニ於テ汽船購求談判心得ノ密書御下附 安政四年八月二十二日	四七八
三四五	中山王へ御密命佛朗西国ヨリ蒸氣船及ヒ小銃製造器械等御購求ノ御趣意 (石室秘稿鈔)	四七八
	安政四年八月二十三日	四七八
三四六	撰政・三司官へ御密用示達或へ在留ノ佛人へ談判ノ始末具申及佛人贈品 安政四年	四八〇

三四七	三司官座喜味親方退役ノ顛末	安政四年十一月	四八三
三四八	和蘭船長崎ヨリ来琉御附人在番奉行ヘノ書状持参ノ事実及ヒ戊午ノ春井上庄太郎其他守衛人員数十名大島ヘ差渡サレタル顛末		四八三
三四九	英人清国廣東攻撃ノ顛末	安政四年二月	四八三
三五〇	江田平太郎参府御供命セラル	三月	四八三
三五一	金価高騰布令	十二月	四八三
三五二	造士館学風矯正御訓示	安政四年十月ノ十一月	四八四
三五三	柴山愛次郎実兄良助ヘ贈ル書翰	安政四年九月二十八日	四八四
三五四	柴山愛次郎兄良助ニ海防急務对策建言ノ事情報告	安政四年二月二十九日	四八四
三五五	蒸気船雛形製造及ヒ大砲铸造意見建言(市來)	安政四年六月二十七日	四八四
三五六	参考 非蔵人日記抄	安政四年九月三十日	四八四
三五七	天璋院殿改称布告	九月	四八六
三五八	徳川宰相上様ト称スヘキ旨布達	九月	四八六
三五九	勝麟太郎等汽船ニ搭シ来麿		四八七
三六〇	久光公勝麟太郎ヘ与ル書簡	八月二十八日	四八七
三六一	勝義邦齊彬公ノ為人ヲ談ス	明治二十年十二月	四八八
三六二	参考 安田助左衛門日記抄(齊彬公御逝去ノ報及ヒ又次郎殿御相統)	七月二十日	四八八
三六三	幕府大奥某密書姓名不明(岩瀬)		四八八

三六四	西郷隆盛僧月照ト投海ノ始末	十月	四九〇
三六五	疑獄弁難記者姓名不明	七月	四九〇
三六六	無名建言	五月二十八日	四九二
三六七	堀田備中守帰府京師事情概要		四九三
三六八	継嗣事件營中ノ概況		四九四
三六九	井伊家公用方秘録抄	四月二十六日	四九四
三七〇	水野筑後守建言	四月	四九四
三七一	天璋院殿継嗣	四月	四九五
三七二	福井侯營中ニ於テ井伊直弼ト談話	五月二日	四九六
三七三	井伊直弼大老ニ任ス	五月五日	四九六
三七四	堀田正陸福井侯ニ水戸公ノ建白ヲ改メシメント請フ	五月八日	四九七
三七五	薬師寺筑前守水戸・越前等ノ諸侯ヲ井伊直弼ニ讒構ス	五月九日〜十二日	四九七
三七六	福井侯將軍ニ直諫セント堀田正陸ニ謀ル	五月十五日	四九八
三七七	井伊家人へ送ル無名書	五月十七日	四九八
三七八	井伊直弼所司代ノ交迭ヲ謀ル	五月二十三日	四九八
三七九	所司代本多美濃守帰府御暇参内	五月二十八日	四九九
三八〇	齊彬公伊達宗城公へ与ル書 (伊達家所藏)	五月二十八日	四九九
三八一	齊彬公島津豊後ニ与フ書	五月二十九日	四九九

三八二	安田助左衛門日記抄	五月	四九九
三八三	水戸国老歎願書	五月	五〇〇
三八四	参考 伊地知貞馨自記抄	五〇〇
三八五	水軍創設費用布告(第 卷水軍兵士創命ノ条參看)	六月九日	五〇三
三八六	齊彬公七月八日大砲操練ヲ天保山ニ覽玉フ	五〇三
三八七	江夏干城自記鈔	五〇三
三八八	中山王使参府猶予達書	八月	五〇四
三八九	徳川慶福公家茂公ト改称布告	八月	五〇四
三九〇	江戸在勤鎌田正純ニ帰国ヲ命ス	八月	五〇四
三九一	御知政中獄中空虚犯罪人寡カリシ事実	五〇五
三九二	西郷隆盛齊彬公ニ天下ノ形勢救フニ道ナキヲ申ス	五〇五
三九三	国政ノ成就ハ衣食ニ窮民ナキニアリ(送話)	五〇五
三九四	参考 薩摩順聖公齊彬ノ遺事鈔	五〇六
三九五	折ニ触レ御微行民情視察セラレシ事実(送事)	五〇九
三九六	大ニ水田ヲ開墾シ玉フ	五〇九
三九七	諸郷士ノ格式ヲ復旧セラレムトス	夏	五一〇
三九八	櫻島洗出又ハ神瀬其他砂揚場等へ砦堡建築目論見	五一一
三九九	参考 安政紀事鈔齊彬公兵ヲ率ヒテ上京セントス	七月十七日	五一一

四〇〇	久光公新納駿河へ与フル書 七月二十二日	五二二
四〇一	將軍家定公薨去謹慎布告 八月	五一三
四〇二	番頭喜入主水ニ江戸在勤ヲ命ス 八月	五一三
四〇三	琉球人へ可相尋条々	五一三
四〇四	都日誌上	五四四
四〇五	都日誌下	五六〇
四〇六	有馬新七建言 十二月八日	五八三
四〇七	有馬新七・山縣半藏三條前内府公ニ上ル封事 十一月二十八日	五八六
四〇八	安政四年巳十二月江戸邸ニ於テ建言 安政四年十一月二十九日	五八八
四〇九	舊幕府(新刊雜誌)ヲ讀ム	五八九
四一〇	遊見小草	五九〇
四一一	重野安繹演說筆記第一(名家談叢)	五九一
四一二	全上第二	五九二
四一三	全上第三	五九六
四一四	全上第四	五九九
四一五	全上第五	六〇五
四一六	全上第六	六〇七
四一七	全上第七	六一〇

四一八	全上第八	六二〇
四一九	参考 明からず(補註及正誤)	六二六
四二〇	清水寺忍向阿闍梨略伝	六三三
四二一	清水寺成就院信海阿闍梨小伝	六四六
四二二	月照上人薩摩落ノ顛末	六四七
四二三	島津齊彬公国事鞅掌ニ関スル事实附二十四節(史談会速記録第二十六輯抄)	明治二十七年 六五二
四二四	征韓論ヨリ胚胎シ日清戦争トナリシ事歴(史談会速記録第二十五輯附録)	明治二十七年九月 六六六
四二五	島津齊彬公国事鞅掌ニ関スル事实附二十節(史談会速記録第三十二輯抄)	明治二十八年四月 六九〇
四二六	参考 伊達宗城公御手留鈔 弘化四年五月二十七日〜安政六年三月朔日	七〇三
四二七	参考 伊達家々記鈔 正月七日〜二月二十二日	七三三
四二八	南部家(八戸藩)家記抄 六月四日〜七月十日	七三三
四二九	日置流ノ弓術ヲ学ヒ玉フ、付同流由来概略	七四一
四三〇	高麗流ノ馬術ヲ学ヒ玉フ、及ヒ御母公御薫陶ノ御詠歌	七四四
四三一	齊彬蝦夷地開墾目論見島津登・關勇助等へ取調御内命	七四六
四三二	博覽強記神儒仏洋説共ニ記臆セラレシ譚	七四八

四三三	人心ノ不和ハ政治ノ要ナリトノ御言	七四八
四三四	民富メハ君富ムノ言ハ国主タル者一日モ忘ルヘカラサル格言ナリト国老等ニ訓示シ玉フ	七四八
四三五	君タル人ハ愛憎ナキヲ要トスルノ御言	七四九
四三六	人ハ一能一芸ナキ者ナシトノ御言	七四九
四三七	下ノ關ヲ藩有トシタルハ幕府ノ拙策ナリシトノ御言	七五〇
	<small>川畑魯 水譚</small>	
四三八	秀吉信長ニ、家康秀吉ニ対シタル忍耐ハ大慮ナリトノ御言	七五〇
四三九	水戸侯・越前侯ノ御話	七五一
四四〇	「ナポレオン」・「ワシントン」カ御話	七五二
四四一	正成・義貞ノ御話	七五三
四四二	既往ノ事ヲ鑑テ前途考慮云々ノ御話	七五三
	<small>安政四年夏</small>	
四四三	勇断ナキ人ハ事ヲ為スコト能ハストノ御言	七五四
四四四	一癖アル者ニアラサレハ用ニ立タストノ御言	七五四
四四五	義弘公ハ軍事ハ勿論經濟ニ御心ヲ用ヒラル、厚カリシトノ御言	七五四
四四六	十四五年ノ後ハ三ヶ国ヲ富国トナサントノ御言	七五五
四四七	天下ノ政治一変セサレハ外国ト交際スルコト能ハストノ御言	七五五
四四八	国政ノ要ハ衣食住ニ窮民ナキニアリトノ御言	七五六
四四九	富田東作譚記鈔	七五六
四五〇	武州徳丸ヶ原ニ於テ高島カ洋式砲術閣老見置ノ始末、吉井・相良等言上ニ就テ譚	天保

	十二年八月……………	七五八
四五二	洋式砲術ハ幕府御直勤格式ノ者外伝授禁停ノ敕命アリシ時ノ御譚及ヒ既ニ伝授セシ人名	七五八
四五二	理化ノ二術ハ経済ノ根本ナリトノ御譚……………	七六〇
四五三	旧記古文書類之御譚……………	七六〇
四五四	大集院・福昌寺ノ両寺ヘ一切経ノ内ニアル馬ノ仕付方及ヒ療病ノ説取調命セラレシ譚……………	七六一
四五五	福昌寺ニ須彌壇創設セシ玉フ……………	七六二
四五六	博覽強記神儒仏洋説共ニ記憶セラレシ譚……………	七六二
四五七	西郷隆盛御密仕起因ノ譚……………	七六二
四五八	伊勢・小笠原流礼式改メラレントス……………	七六三
四五九	佐久間修理砲學圖編及ヒ礮卦ト名付タル書進呈ス 嘉永四年……………	七六三
四六〇	鎌田出雲ヲ小野寺庸齋カ門ニ入ラシメ軍制ヲ諮問シ玉フ……………	七六四
四六一	藤森・鹽屋・安井等ニ軍国ノ政要及ヒ海防策諮詢シ玉フ……………	七六四
四六二	幕吏其他各藩人物ノ人名ヲ自記シ玉フ……………	七六五
四六三	大政一變大小吏ノ風俗方正必要ナリトノ御譚……………	七六五
四六四	故關老水野侯外国処分變更云々ノ御譚……………	七六五
四六五	廣島侯相統事件西郷隆盛ヘ尽力内命シ玉フ……………	七六六
四六六	佐賀侯ト甲冑用不用ノ御談話……………	七六六
四六七	下情上達ハ政事ノ要タリトノ御譚……………	七六六

四六八	對問	七六八
四六九	産物販路拡張及ヒ佐賀候ト交易取結ノ事實 <small>山本藤助家記抄</small>	七七八
四七〇	寺島宗則記述	七七九
四七一	福陵新報 <small>明治廿一年八月十一日第二百八十四号</small>	七八四
文久二年(辛酉) ~ 明治二十九年(丙申)		
四七二	照國公御贈位 文久二年十一月十一日	七八七
四七三	御贈官位御礼御献納品ニ対シ女房文 文久三年五月十五日	七九二
四七四	御贈官位告祭文 文久三年二月二日	七九三
四七五	照國公御贈官位並社号及ヒ社殿創建之事實 文久二・三年	七九三
四七六	元治元年甲子八月七年祭久光公御祭文	七九三
四七七	明治二年御贈官位記	七九四
四七八	八田知紀・後題院眞柱カ久光公ニ奉リシ和歌 文久二年	七九四
四七九	後題院眞柱長歌 文久二年	七九五
四八〇	勅使岩倉 <small>具視</small> 卿ヲ以テ照國神社江御劍御下納 明治三年十二月二十三日	七九六
四八一	御巡行之際勅使御社参之事實 明治五年六月二十日	七九九
四八二	官幣社被列ノ願文及ヒ事實 明治十三年八月	七九九
四八三	丁丑九月社殿焼燼ノ事實 明治十年九月八日	八〇三

四八四	再ヒ御劍御下納	明治十三年二月五日	八〇三
四八五	臨時祭ノ為メ忠義公御下向大祭執行ノ事実	明治十六年十二月	八〇四
四八六	照國神社例祭日達書	明治十六年七月五日	八〇六
四八七	造士館再建之願	明治十七年十一月	八〇七
四八八	御肖像複写ノ事実	明治十六年	八〇八
四八九	贈従一位島津公紀念塔募疏 <small>戸塚文海記述</small>	明治十五年十月	八一〇
四九〇	仮殿改造弘告	明治二十九年八月	八一二
四九一	齊彬公御贈官位	文久二年十一月十一日・文久三年五月十五日・同二月二日	八二四
四九二	照國公御贈官位并社号賜之及ヒ社殿創建之事実	文久二・三年、明治二年	八一四
四九三	勅使岩倉 <small>具視</small> 卿ヲ以テ照國神社へ御劍ヲ下納シ玉フ	明治三年十二月二十三日	八一五
四九四	御巡行之際勅使御社参之事実	明治五年六月二十日	八一五
四九五	官幣社被列ノ願文付事実	明治十三年八月	八一五
四九六	丁丑九月 日社殿焼燼ノ事実	明治十年九月八日	八一五
四九七	臨時祭ノ為メ 忠義公御下向大祭執行ノ事実	明治十六年十二月	八一五
四九八	照國神社例祭日達書	明治十六年七月五日	八一五
四九九	造士館再建之願	明治十七年十一月	八一五
五〇〇	御肖像複写ノ事実	明治十六年	八一五
五〇一	贈従一位島津公紀念塔募疏 <small>戸塚文海記述</small>	明治十五年十月	八一五

補遺

五〇二	名越盛光へ書翰	(天保九年頃カ)二月十日	八一六
五〇三	清国阿片戦争始末に関する聞書	天保十三年	八一六
五〇四	徳川齊昭へ書翰	弘化三年七月二日	八三八
五〇五	島津忠寛へ書翰	嘉永四年十一月二十九日	八三九
五〇六	多紀元堅へ書翰	(嘉永五年カ)正月二十日	八三九
五〇七	島津忠寛へ書翰	(嘉永五年カ)正月二十九日	八四〇
五〇八	池田慶政へ書翰	(嘉永五年カ)二月三日	八四〇
五〇九	池田慶政へ書翰	(嘉永五年カ)二月三日	八四一
五一〇	池田慶政へ書翰	(嘉永五年カ)五月二十九日	八四一
五一一	池田慶政へ書翰	(嘉永五年カ)七月二十九日	八四一
五一二	池田慶政へ書翰	嘉永五年七月二十九日	八四二
五二三	多紀元堅へ書翰	嘉永五年八月三日	八四二
五二四	多紀元堅へ書翰	嘉永五年八月三日	八四三
五二五	池田慶政へ書翰	嘉永五年十月十六日	八四三
五二六	池田慶政へ書翰	嘉永五年十二月二日	八四三
五二七	池田慶政へ書翰	嘉永五年十二月三日	八四四
五二八	池田慶政へ書翰	嘉永五年十二月五日	八四四

五二九	池田慶政へ書翰	嘉永五年十二月十九日	八四四
五二〇	近衛忠熙へ書翰	嘉永六年正月十一日	八四四
五二一	池田慶政へ書翰	(嘉永六年カ)二月八日	八四六
五二二	池田慶政へ書翰	(嘉永六年カ)三月七日	八四六
五二三	池田慶政へ書翰	(嘉永六年カ)三月十七日	八四六
五二四	多紀元堅へ書翰	嘉永六年七月二十六日	八四七
五二五	戸塚訥海へ書翰	嘉永六年九月二十九日	八四七
五二六	島津忠寛へ書翰	(嘉永六年十月カ)二十九日	八五〇
五二七	多紀元堅へ書翰	(嘉永六年カ)十二月朔日	八五〇
五二八	島津久寶へ書翰	(嘉永六年冬カ)	八五〇
五二九	吉書	安政元年正月十一日	八五二
五三〇	幕府へ届(米船琉球へ渡来の件)	安政元年正月十九日	八五二
五三一	島津忠寛へ書翰	安政元年正月二十一日	八五三
五三二	多紀元堅へ書翰	安政元年正月二十九日	八五三
五三三	砂場場の呼称について家老達	安政元年正月	八五四
五三四	砲術館稽古精励について家老達	安政元年二月	八五四
五三五	諸事集会等の件について家老達	安政元年二月	八五四
五三六	虎壽丸縁組一件	安政元年二月〜三月	八五四

五三七	幕府へ届(琉球へ諸外国船渡来の件)	安政元年三月五日	八五九
五三八	松平慶永へ書翰	安政元年三月十二日	八六一
五三九	三原經禮へ書翰	安政元年四月四日	八六一
五四〇	新納久仰へ書翰	安政元年四月四日	八六二
五四一	徳川慶恕へ書翰	安政元年四月十一日	八六四
五四二	徳川齊昭へ書翰	安政元年四月十二日	八六五
五四三	黒田齊溥へ書翰	安政元年四月十二日	八六五
五四四	徳川慶恕へ書翰	安政元年四月十三日	八六五
五四五	松平慶永へ書翰	安政元年四月十六日	八六六
五四六	徳川齊昭へ書翰	安政元年四月十六日	八六六
五四七	鈴木基行へ書翰	安政元年四月二十七日	八六七
五四八	島津久光へ書翰	安政元年四月二十九日	八六七
五四九	新納久仰へ書翰	安政元年四月二十九日	八六九
五五〇	下田・箱館開港の件に関する幕令について家老達	安政元年四月	八六九
五五一	近衛忠熈へ書翰	安政元年五月九日	八七〇
五五二	將軍代替ニ付誓詞一件	安政元年五月十日く二十九日	八七二
五五三	島津久光へ書翰	安政元年五月二十九日	八七四
五五四	江夏直義へ書翰	安政元年五月二十九日	八七五

五五五	新納久仰へ書翰	安政元年五月二十九日	八七七
五五六	多紀元堅へ書翰	(安政元年カ)六月十四日	八七九
五五七	伊達宗城へ書翰	(安政元年カ)六月二十五日	八七九
五五八	下町出火の件に関して家老達	安政元年六月	八八〇
五五九	防火用地の買入等について家老達	安政元年六月	八八二
五六〇	幕府へ届(諸外国船琉球へ渡来の件)	安政元年七月八日	八八二
五六一	幕府へ届(英人が琉球へ残せる唐人の件)	安政元年七月八日	八八三
五六二	伊達宗城へ書翰	安政元年七月二十四日	八八三
五六三	新納久仰へ書翰	安政元年七月二十五日	八八四
五六四	伊達宗城へ書翰	(安政元年カ)七月二十五日	八八六
五六五	伊達宗城へ書翰	(安政元年カ)七月二十五日	八八七
五六六	新納久仰へ書翰	安政元年七月二十九日	八八七
五六七	三原經禮へ書翰	安政元年七月二十九日	八八九
五六八	櫻田屋敷上番詰等について家老達	安政元年七月	八九一
五六九	長崎奉行へ琉球国米国と和親条約締結の件について家老届	安政元年閏七月十六日	八九一
五七〇	幕府へ届(唐船漂着の件)	安政元年八月三日	八九二
五七一	幕府へ届(米船琉球へ渡来の件)	安政元年八月二十日	八九三
五七二	幕府へ届(琉米条約締結の件)	安政元年八月二十日	八九三

五七三	士風正矯並に役掛の件について新納久仰へ家老達	安政元年八月二十三日	八九四
五七四	日本惣船印の件に関する幕令について家老達	安政元年八月	八九五
五七五	武家諸法度発布一件	安政元年九月	八九五
五七六	近衛忠熈へ書翰	安政元年十月十六日	九〇一
五七七	安政改元の件について家老達	安政元年十二月二十七日	九〇二
五七八	幕府へ島津齊彬家来上申書（琉球国救助の件）	（安政二年九）	九〇二
五七九	松平慶永へ書翰	安政二年正月二十六日	九〇三
五八〇	縮緬羽二重等の着用について家老達	安政二年正月	九〇四
五八一	諸役人取替沙汰等について家老達	安政二年三月	九〇四
五八二	衣服着用の件について家老達	安政二年四月	九〇四
五八三	梵鐘鑄換等の件に関する幕令について家老達	安政二年四月	九〇五
五八四	江夏直義へ書翰	安政二年六月朔日	九〇五
五八五	松平頼學・松平義比へ回達	安政二年八月十五日	九〇六
五八六	山内豊信へ回達	安政二年八月十五日	九〇六
五八七	新納久仰へ書翰	安政二年八月二十一日	九〇六
五八八	諸役場御用筆墨について家老達	安政二年八月	九〇七
五八九	徳川齊昭へ書翰	安政二年九月二十一日	九〇七
五九〇	江夏直義へ書翰	安政二年九月二十九日	九〇八

五九一	犬追物古伝書等格護について家老達	安政二年十二月二十八日	九〇九
五九二	上屋敷等取広めの件について家老達	安政二年十二月	九一一
五九三	大乘院鎮國殿参詣について家老達	安政二年十二月	九一二
五九四	質素節儉の件に關して家老達	安政二年十二月	九一二
五九五	島津久豊墓所について家老達	安政三年正月二十一日	九一二
五九六	名越盛光へ書翰	安政三年正月二十九日	九一四
五九七	琉球国大里王子・三司官へ琉米条約取計振の件について家老達	安政三年正月	九一六
五九八	年頭・七夕等着用衣服について家老達	安政三年二月	九二〇
五九九	諸役人等着用衣服について家老達	安政三年二月	九二〇
六〇〇	震災救恤のため江戸城等修復の課役献金を免ずる幕令の藩内布達	安政三年二月	九二一
六〇一	松平慶永へ書翰	安政三年三月六日	九二一
六〇二	近衛忠熙へ書翰(使者口上による)	安政三年三月十四日	九二二
六〇三	書役小役人願に付音物沙汰并に勤方拜命の節集会等の厳禁について家老達	安政三年三月二十九日	九二三
六〇四	諸郷・私領・町家の者等願筋に付音物沙汰の厳禁について家老達	安政三年三月二十九日	九二三
六〇五	諸役場御用取扱方並に賄賂沙汰の厳禁について家老達	安政三年三月二十九日	九二四
六〇六	吉野馬追等の見物について家老達	安政三年三月	九二五

六〇七	諸役人勤務心得等について家老達	安政三年三月	九二五
六〇八	島津久寶へ篤姫養女成並に縁組の件について島津齊彬側役達	安政三年四月(朔日カ)	九二六
六〇九	近衛忠熙へ書翰(使者口上による)	安政三年四月八日	九二八
六一〇	近衛忠熙へ書翰(使者口上による)	安政三年四月中旬	九二九
六一一	近衛忠熙へ書翰(使者口上による)	安政三年四月中旬	九三〇
六一二	篤姫養女成並に縁組の件について家老達	安政三年四月二十六日	九三一
六一三	徳川齊昭へ書翰	安政三年四月二十七日	九三一
六一四	諸役場吟味用書類の取扱い等について家老達	安政三年四月	九三一
六一五	家老へ逗留佛人住家の件について琉球在勤の家来上申書	安政三年五月朔日	九三二
六一六	幕府へ届(佛船琉球渡来の件)	安政三年五月十四日	九三六
六一七	家老へ逗留佛人の件について琉球在勤の家来届	安政三年五月二十四日	九三六
六一八	家老へ逗留佛人住家の件について琉球在勤の家来上申書	安政三年五月	九三七
六一九	諸役場役人等採用について家老達	安政三年五月	九三九
六二〇	諸役場への内願沙汰等禁止の件について家老達	安政三年五月	九三九
六二一	町人共内意訴訟申出の禁止等の件について家老達	安政三年五月	九四〇
六二二	諸役人出勤の件について家老達	安政三年五月	九四〇
六二三	礼讓等の件について大目付達	安政三年五月	九四一
六二四	高木主水正蒞谷拝領屋敷等の購入に関して家老達	安政三年五月	九四一

六二五	江戸澁谷屋敷拡張に關して家老達	安政三年五月	九四一
六二六	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年六月二十九日	九四二
六二七	大元丸見分受取の件について幕府へ島津齊彬家来届	安政三年六月三十日	九四三
六二八	学問武芸試業の件について家老達並に親書論達	安政三年六月	九四三
六二九	願事に付諸役場への音物沙汰嚴禁について家老達	安政三年六月	九四四
六三〇	着出立の節土産別沙汰の嚴禁について家老達	安政三年六月	九四五
六三一	在府家老へ清国騒乱の件について在國家老書翰	安政三年七月二日	九四六
六三二	在府家老へ琉球人在唐中の次第について在國家老書翰	安政三年七月二日	九四八
六三三	在府家老へ琉球逗留佛人等の件について在國家老届	安政三年七月二日	九五二
六三四	徳川齊昭へ書翰	安政三年七月四日	九五三
六三五	島津久福役掛の件について家老達	安政三年七月二十三日	九五三
六三六	官規士風の矯正について親書論達	安政三年七月二十五日	九五三
六三七	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年七月二十六日	九五四
六三八	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年七月二十九日	九五五
六三九	領國中政務に關する家老達	安政三年七月	九五六
六四〇	篤姫の生母養女成一件	安政三年七月、八月	九五六
六四一	近衛忠熙へ篤姫入輿の件について島津齊彬使者口達	安政三年七月	九五八
六四二	篤姫近衛家養女成に關して家老達	安政三年七月	九五九

六四三	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年八月五日	九五九
六四四	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年八月五日	九五九
六四五	川上久連役掛の件について家老達	安政三年八月十五日	九六〇
六四六	篤姫生母の件について家老達	安政三年八月	九六〇
六四七	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年九月十八日	九六一
六四八	島津久徴役掛の件について家老達	安政三年九月二十七日	九六一
六四九	近衛家諸大夫へ篤姫入輿の件について家老書翰	安政三年九月二十九日	九六一
六五〇	某氏へ書翰	(安政三年九月) 十月十二日	九六二
六五一	篤姫御広敷入日限の件について家老達	安政三年十月	九六三
六五二	松平慶永へ書翰	(安政三年十一月九)	九六三
六五三	篤姫縁組婚礼の件に関して家老達	安政三年十二月十四日	九六四
六五四	島津久徴外三名役掛の件について家老達	安政三年十二月	九六五
六五五	生子殺しの禁止について家老達	安政三年十二月	九六六
六五六	鎌田正純役掛の件について家老達	安政四年正月(上旬九)	九六六
六五七	島津久包・川上龍衛役掛の件について家老達	安政四年正月十三日	九六六
六五八	藏方心付の件に関して家老達	安政四年正月	九六七
六五九	政務改革年限延期について家老達	安政四年正月	九六七
六六〇	松平慶永へ書翰	安政四年二月二十八日	九六七

六六一	島津貴敦役掛の件について家老達	安政四年二月	九六八
六六二	式日等の衣服着用について家老達	安政四年二月二十九日	九六八
六六三	松平慶永へ書翰	安政四年三月四日	九六九
六六四	幕府へ届(琉球へ佛船渡来の件)	安政四年三月五日	九六九
六六五	古金銀貨引替に関する幕令について家老通達	安政四年三月十四日	九七〇
六六六	松平慶永へ書翰	安政四年三月十五日	九七〇
六六七	松平慶永へ書翰	安政四年三月十五日	九七一
六六八	島津齊彬の江戸城内席詰の件について家老達	安政四年三月(十五日)	九七二
六六九	松平慶永へ書翰	安政四年三月二十九日	九七三
六七〇	松平慶永へ書翰	安政四年四月二日	九七五
六七一	徳川齊昭へ書翰	安政四年四月二日	九七六
六七二	新納久仰へ書翰	安政四年四月二十五日	九七六
六七三	島津齊興参府に關して家老達	安政四年四月	九七七
六七四	早川兼彝・三原經禮へ書翰	安政四年五月八日	九七七
六七五	早川兼彝へ書翰	安政四年五月八日	九七八
六七六	齊彬在国中の諸御礼出座刻限について若年寄達	安政四年五月	九七九
六七七	齊彬女子典姫について広敷用人届外一通	安政四年五月	九七九
六七八	大目付以上へ内諭	安政四年閏五月九日	九八〇

六七九	池田慶徳へ書翰	安政四年六月二十九日	九八〇
六八〇	故土佐藩主山内豊潤室智鏡院外三名へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八一
六八一	戸田氏彬へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八一
六八二	松平武聰へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八二
六八三	前桑名藩主松平定和室柔正院外三名へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八二
六八四	松平慶永へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八二
六八五	松平定安へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八三
六八六	伊達慶邦へ書翰	安政四年夏(六月頃カ)	九八三
六八七	戸塚静海へ書翰	安政四年七月二十三日	九八三
六八八	松平慶永へ書翰	安政四年七月二十九日	九八四
六八九	島津久寶へ書翰	安政四年八月二十五日	九八五
六九〇	島津久光へ書翰	(安政四年カ) 八月二十六日	九八九
六九一	仙波永贇へ書翰	安政四年八月二十九日	九八九
六九二	鎌田正純へ書翰	安政四年八月二十九日	九九〇
六九三	島津久寶へ書翰	安政四年九月二十五日	九九一
六九四	徳川齊彬へ書翰	安政四年九月二十九日	九九二
六九五	造士館・演武館の学風矯正の件について島津久徴へ論書	安政四年(十月初頃カ)	九九三
六九六	早川兼彝へ書翰	安政四年十月七日	九九四

六九七	島津久寶へ書翰	安政四年十月二十七日	九九五
六九八	鎌田正純へ書翰	安政四年十月二十九日	九九五
六九九	鎌田正純へ書翰	(安政四年カ)十月二十九日	九九六
七〇〇	早川兼彥へ書翰	安政四年十一月二十九日	九九六
七〇一	島津久寶へ書翰	安政四年十二月十一日	九九七
七〇二	島津齊興従三位昇進の件について在國家老衆へ江戸詰家老書翰	安政四年十二月十六日	九九八
七〇三	堀田正睦へ書翰	安政四年十二月二十五日	九九九
七〇四	伊達宗城へ書翰	(安政四年カ)	一〇〇〇
七〇五	松平慶永へ書翰	安政五年正月三日	一〇〇一
七〇六	島津齊興従三位昇進の件について家老達	安政五年正月三日	一〇〇二
七〇七	近衛忠熈へ書翰	安政五年正月六日	一〇〇二
七〇八	三條實萬へ書翰	安政五年正月六日	一〇〇三
七〇九	松平慶永へ書翰	安政五年正月六日	一〇〇三
七一〇	島津久寶へ書翰	安政五年正月六日	一〇〇四
七一一	吉書	安政五年正月十一日	一〇〇五
七一二	島津齊興従三位昇進に関する幕令について家老達	安政五年正月	一〇〇五
七一三	島津齊興の呼称について家老達	安政五年正月	一〇〇五
七一四	熨斗目着用の件について家老達	安政五年正月	一〇〇六

- 七二五 特旨により桂小吉郎へ代銀拝借を命ずる家老達 安政五年二月三日……………一〇〇六
- 七二六 伊達宗城へ書翰 安政五年二月二十九日……………一〇〇六
- 七二七 豎山利武へ書翰 安政五年二月二十九日……………一〇〇七
- 七二八 豎山利武へ書翰 安政五年二月頃九……………一〇〇八
- 七二九 諸役人諸郷廻勤の節酒食饗応など嚴禁について家老達 安政五年二月……………一〇〇九
- 七二〇 伊達宗城へ書翰 安政五年四月三日……………一〇〇九
- 七二一 伊達宗城へ書翰 安政五年四月三日……………一〇一一
- 七二二 松平慶永へ書翰(付別紙) 安政五年四月三日……………一〇一二
- 七二三 松平慶永へ書翰(付別紙) 安政五年四月三日……………一〇一四
- 七二四 早川兼舜へ書翰 安政五年四月五日……………一〇一五
- 七二五 豎山利武へ書翰 安政五年四月九日……………一〇二〇
- 七二六 早川兼舜へ書翰 安政五年四月九日……………一〇二一
- 七二七 島津久寶へ書翰 安政五年四月九日……………一〇二二
- 七二八 島津久寶へ書翰 安政五年四月九日……………一〇二二
- 七二九 豎山利武へ書翰 安政五年四月十日……………一〇二三
- 七三〇 島津久光へ書翰 安政五年四月十二日……………一〇二三
- 七三一 早川兼舜へ書翰 安政五年四月十八日……………一〇二四
- 七三二 島津齊彬男兒哲丸の嫡子願の件に関し江田平藏へ家老達 安政五年四月二十四日……………一〇二五

七三三	島津久光へ書翰	安政五年四月二十七日	一〇二五
七三四	早川兼舜へ書翰	安政五年四月二十八日	一〇二五
七三五	島津齊彬男児哲丸の呼称について家老達	安政五年四月	一〇二七
七三六	大砲台場築造のため江戸田町別邸海岸埋立願の件について家老達	安政五年四月	一〇二七
七三七	島津齊彬女兒寧姫御前様養いの件について家老達	安政五年四月	一〇二七
七三八	島津齊興湯治養生のため暇願の件について幕府老中申渡	安政五年五月七日	一〇二七
七三九	島津久光へ書翰	安政五年五月二十六日	一〇二八
七四〇	水軍兵士御小姓組へ家部立ならびに切米支給の件について家老達	安政五年五月二十六日	一〇二八
七四一	早川兼舜へ書翰	安政五年五月二十八日	一〇二九
七四二	早川兼舜へ書翰	安政五年五月二十九日	一〇三〇
七四三	幕府の島津齊興湯治暇願聞き届けの件に関して家老達	安政五年五月二十九日	一〇三〇
七四四	松平慶永へ書翰	安政五年(五月末乃至六月初頃カ)	一〇三一
七四五	島津齊興湯治暇につき江戸発駕時期内定の件について家老達	安政五年五月	一〇三二
七四六	近衛忠熈へ書翰	安政五年六月五日	一〇三二
七四七	近衛忠熈へ書翰	(安政五年カ)六月五日	一〇三五
七四八	早川兼舜へ書翰	安政五年六月九日	一〇三五
七四九	松平慶永へ書翰	安政五年六月九日	一〇三六

- 七五〇 水軍方への支給高について御勝手方達 安政五年六月十日……………一〇三八
- 七五一 近衛忠熈へ書翰 安政五年六月十一日……………一〇三九
- 七五二 徳川慶福の將軍養子ならびに称号、住居に関する幕令について家老達 安政五年六月二十五日……………一〇四〇
- 七五三 当秋の給地高所務米買上中止について家老達 安政五年六月……………一〇四〇
- 七五四 外国御用取扱い役人の件に関する幕令について家老達 安政五年六月……………一〇四一
- 七五五 島津齊興湯治暇による帰国につき新納久仰下向方御用掛拜命に関する家老達 安政五年六月……………一〇四一
- 七五六 島津久光へ書翰 安政五年七月三日……………一〇四一
- 七五七 伊達宗城へ書翰 安政五年七月四日……………一〇四一
- 七五八 徳川齊昭へ書翰 (年代不明 正月二十六日)……………一〇四四
- 七五九 戸塚静海へ書翰 (ローマ字書翰) (年代不明 二月三日)……………一〇四四
- 七六〇 川路聖謨へ書翰 (年代不明 三月九日)……………一〇四五
- 七六一 徳川齊昭へ書翰 (年代不明 七月三日)……………一〇四五
- 七六二 徳川齊昭へ書翰 (年代不明 七月五日)……………一〇四五
- 七六三 徳川齊昭へ書翰 (年代不明 九月八日)……………一〇四六
- 七六四 徳川齊昭へ書翰 (年代不明 十一月二十九日)……………一〇四六
- 七六五 新納久仰へ書翰 (年月日不明)……………一〇四七

解 題

七六六	某氏へ書翰 (年月日不明)	一〇四七
七六七	江夏直義へ覚書 (年月日不明)	一〇四八

一〇四九

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政五年

安政五年戊午○清曆咸豐八年
○西曆千八百五十八年

神武天皇御即位紀元二千五百十八年

孝明天皇統仁第百二十代御即位弘化四年丁未九月二十八年御宝算

將軍家茂公第十襲職本年十月一年六十

藩主齊彬公第二十八(世脱カ)當時知政嘉永四年辛亥二月八年庚ハ五十九

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球國受封(人皇八十二代後鳥羽

天皇壽永五年即子文治三年) 六百七十三年

関白 九條尚忠公

左大臣 近衛忠熈公

右大臣 鷹司輔瀨公

内大臣 三條實萬公

同 一條忠香公

大老 井伊掃部頭直弼

老中

堀田備中守(佐倉藩主)正篤六月依事罷免

久世大和守(奥宿藩主)廣周十月依事罷免

松平伊賀守(上田藩主)忠優六月依事罷免

松平和泉守(西尾藩主)乘全(村上藩主)

内藤紀伊守(龍野藩主)信親

脇坂淡路守(掛川藩主)安宅十一月依病罷免

太田備中守(鮎江藩主)資始

間部下總守(掛川藩主)詮勝

若年寄

本多豊後守(飯山藩主)助賢

本多越中守(泉藩主)忠徳

本庄伊勢守(高富藩主)道貫七月依事罷免

遠藤但馬守(三上藩主)胤統

酒井右京亮忠毗〔敦賀藩志〕

本郷丹後守泰固〔川成島藩志〕七月免事罷免

牧野遠江守康哉〔小諸藩志〕

稻葉安藝守太和〔垣力〕〔山上藩志〕

安藤對馬守信行〔龜城平藩志〕

所司代

本多中務大輔忠民〔岡崎藩志〕六月罷免

酒井修理大夫忠義〔小笠原藩志〕

京都町奉行

淺野中務少輔長祚〔六月小普請御奉行三転ス〕

岡部備後守豊常

小笠原長門守長常

伏見奉行

内藤豊後守正繩〔谷村田藩志〕

国老

○島津豊後久寶

○川上筑後久封

新納駿河久仰

〔島津大藏久徴〕

○島津伯耆久福 ○樺山伊織久成

○島津 登久包

〔喜入攝津久高〕

○島津左衛門久徴

〔川上式部久美〕

〔川上但馬久運〕

〔小松帶刀清廉〕

〔桂右衛門久武〕

〔町田内膳久憲〕

〔岩下佐次右衛門方平〕

〔諏訪伊勢武盛〔一時島津ノ称号ヲ許ス〕〕

〔新納刑部久脩〕

〔川上龍衛久齡〕

〔ママ〕以上三名前代ヨリ勤続ノモノハ〇印ヲ付ス

目次

総覽

勅詠御拜戴事實及ヒ御一門其他重役へ拜見允サレタル事

実

史談速記録第〔第二十一卷〕号鈔〔参考〕

孝明天皇御製〔近衛家御簾中附從針医原田才輔寄贈〕

齊興公從三位御昇進布告

齊彬公福岡侯へ御封物伝達(黒田家紀事鈔)

軍功家筋ノ者江知行高申受人名及ヒ達書

齊彬公堅山武兵衛ニ与ル御書

營中御扣席達書

和蘭人來港少年輩粗暴ノ挙動ヲ訓誡シ玉フ

汽船觀光丸山川港ニ來ル齊彬公臨覽始末(勝義邦紀事鈔)

水軍兵士創設及ヒ人名

齊彬公伊達宗城公ニ与ル御書牘

齊彬公八重桜ノ御歌ニ付近衛家々人六條某ノ譚

齊彬公封内御巡見ノ前頃訓令

堅山武兵衛へ与フ御書

山田壯右衛門へ与フ御書

全上

全上

早川五郎兵衛へ与フ御書

山崎捨〔捨〕へ与フ御書

全上

早川五郎兵衛へ与フ御書

全上

全上

松平薩摩守様御書写

参考 勝安芳阿部正弘侯論

西郷隆盛カ先塋

伊達公御書翰

九條殿下諫奏譚

参考 阿部正弘小伝

水戸藩ノ挙動

〔脱カ〕齊彬公島津豊後へ与ル書

〔脱カ〕櫻島洗出又ハ神瀬其外砂揚場等へ砦堡建築ノ御目論見

一 安政五年 総覽

安政五年戊午 公御年五十歳

正月

元日

五社御参拜、御一門四家及ヒ三重役勅詠拜見、

二日

本身分其他諸士登城、年首ノ祝賀ヲ受ケ玉フ、

先規ノ如シ、

三日

諸士登城、年首ノ祝賀ヲ受ケ玉フ、先規ノ如シ、

六日

砲術館開場式、例年ノ如シ、

七日

二ノ丸操練、御親臨指揮シ玉フ、

八日

寄合以上ノ操練ヲ二ノ丸演武場ニ覽玉フ、

九日

三重役ヲ召サレ、大奥ニ於テ宴ヲ開カル、

十一日

諸役人転遷昇級及ヒ地頭所操替等例規ノ如シ、御小納

戸早川務(兼照)ヲ御小納戸頭取トシ、江戸御留守居ヲ

兼ネシム、

十五日

年首ニ就テ祝賀ヲ受ケ玉フ、

三月

日

是ヨリ先キ、(安政元年)甲寅正月御記録奉行伊地知小十郎等ニ再

調査ヲ命セラレタル忠久公以来ノ御文書、凡數百条(忠

久公ノ分)ヲ御小納戸頭取兼御用取次山田壯右衛門(爲

正)ヲ以テ御覽ニ供ス(後葉第^(ママ) 参看)

六日

指宿二月田ノ温泉ニ入浴シ玉フ(後卷第^(ママ) 二記ス)

(十六日なり)

同日山川港ニ幕府ノ汽船觀光丸来ル、幕吏及ヒ和蘭人

来鷹(後葉第^(ママ) 参看)

二十三
日 哲丸公世子ノ御届書ヲ提出セシメ玉フ(後卷第^(ママ) 二記

ス)

四月

九日

二月田ノ温泉ヨリ御帰城、

二十五日

国老新納駿河(久仰)哲丸公世子御届出ノ旨ヲ布告ス

(後卷第^(ママ) 二記ス)

五月

日

幕府ノ汽船再ヒ山川港及ヒ鹿兒島海ニ来ル、公親シク

俱シテ、磯邸ニ宴ヲ張り慰勞シ玉フ、

此日乗組和蘭人ヲ集成館ニ招キ、機械ヲ見セシメ玉フ、

六月

三日

江戸邸在勤若年寄兼御家老鎌田出雲ニ帰国ヲ命セラル、

七月

薨去ノ旨布告ス、御一門其他惣登城、宰相様・哲丸様・御前様御機嫌窺フヘキ旨布告ス、諸士モ惣登城、

八日

天保山ニ於テ洋式大小砲操練ヲ覧玉フ、御不例押シテ

諸郷・私領並琉球ヘモ達ス、同御近親様佐土原ヘ足輕飛脚ヲ以テ為御知書ヲ発ス、皆御家老連名ナリ、

御出馬(後巻第(ママ)ニ記ス)

国老島津伯耆(久福)馳テ江戸ニ赴キ訃ヲ報シ、且島津

此日ヨリ下痢症ニ罹ラセ玉フ、

又次郎殿(忠徳)ヲ養子トシ、哲丸公順養子等ノコトヲ齊與公ニ報シ、然シテ幕府ニ申請セシム(後巻第(ママ)ニ詳記ス)

九日

琉球王子御対面式ヲ行ハル、此日ヨリ一層御不例、御式畢ルヤ御就尊(後巻第(ママ)ニ詳記ス)

十八日

十五日

晝薨去、十六日御発表(後巻第(ママ)ニ詳記ス)

諡号ヲ奉リ、尋テ布告ス、

十六日

御臨終久光公ヲ召ス、并ニ御遺言、

這日御葬式期日ヲ布告ス、

順聖公御逝去ニ付御用掛被仰付旨、国老新納駿河之ヲ

福昌寺内御葬穴地撰定、御家老・若年寄・寺社奉行各一名、御側役・御納戸奉行・御記録奉行二名、御小納戸二名、御作事二名其他石工頭・大工頭等数名ニシテ

布告ス、

其撰定畢リ、此夜中ヨリ木石工事ニ着手ス、

御葬式御出棺之節、国老新納駿河・若年寄・大目附、

二十三日

城内ヨリ福昌寺ヘ扈從ス(御城下諸士老若扈從ス)

又次郎君登城、尊骸ニ謁シ、御遺命拝謝ノ式ヲ行フ、

極々御太切ノ旨布告、

国老島津左衛門(久徳)・新納駿河(久仰)・御側役堅山

御一門家其他惣登城ヲ促ス、

武兵衛(利武)侍座、駿河忠徳君ニ向テ御遺命ヲ宣伝ス、

而シテ即日諸士其他封内ニ布告ス(後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

此日靈柩ヲ福昌寺ニ遷シ、這夜御内葬(後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

記ス)

八月

五日

御葬式ヲ福昌寺ニ行ハル、島津周防君(忠教久光旧名)

哲丸公ニ代テ祭主タリ(後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

將軍家定公薨去、

二十日

鎌田出雲書ヲ近衛公ニ奉ル(後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

二十六日

島津伯耆(久福)江戸邸ニ着、即日高輪邸ニ抵リ、齊興

公ニ訃ヲ報ス、

日

青蓮院宮鎌田出雲カ書ニ対スル御書、

是ヨリ先キ(三月)齊興公御湯治ノ為メ、御下国ノ御暇

ヲ賜フ、

日

御訃音江戸邸ニ達ス、

御逝去ノ御届、

御台様御悲歎、

御親交諸侯御歎惜、

京師驩駭及ヒ疑獄、

水・尾・越藩主譴責御知ラセ、

當時天下ノ人心恟々、

晦日

奥平大膳大夫(昌服)ヲ以テ、齊彬公御逝去及ヒ島津又

次郎君(忠徳)ニ相統セシメ哲丸公ヲ順養子トセムノ遺

言ヲ、閣老間部下總守(詮勝)ニ申禀ス、訃報ノ御届ハ

九月

朔日

内藤紀伊守(信親)御先手大久保喜右衛門之ヲ執達ス、

忠徳君忌服ヲ受ケ、而テ出府アルヘキ旨ヲ達セラル、

奥平侯代テ拜命ス(後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

御前様御悲歎御発病ノ事情、

四日

御夫人恒姫君公ノ訃音ニ接シ直ニ病ヲ発シ、大漸遂ニ

十日芝邸ニ逝シ玉フ、芳樹院殿涼月英容大姉ト諡シ、

大圓寺ニ葬ル、徳川民部齊敦卿女恒子ト称ス、年五十

四歳(御履歴及ヒ御言行後卷第^{〔44〕}ニ詳記ス)

十一月

十一日

齊興公江戸高輪邸ヲ発シ、御帰国ノ途ニ就キ玉フ、

十三日

齊興公伏見駅ニ於テ書ヲ近衛公ニ奉リ、西郷隆盛ニ拜

謁ヲ乞ヒ玉フ(後巻第(七)ニ詳記ス)

十四日

島津伯耆(久福)帰麿、幕命ヲ報ス、

日

青蓮院宮齊興公ノ書ニ対セラレタル御書柬(翰)、此日国老

新納駿河(久仰)島津又次郎君(忠徳)ヲ重富邸ニ迎ヘ

テ城中ニ入ラシム(後巻忠義・久光二公史料ニ詳記ス)

十五日

新納駿河其他御側役等又次郎君ト福昌寺ニ詣リ、御遣

言ノ如ク御届済ノ旨告祭式ヲ執行ス、此日ヲ以テ公ト

称フ、

二 勅詠御拝戴事実、及ヒ御一門其他重役へ拜

見允サレタル事実

(願注)宸翰甲第 母・第 身参看、近衛家日記及ヒ同家表両日記参看、忠熈
安政五年戊午正月元日、御一門四家及ヒ御家老・若年

公親話記参看
寄等へ

勅詠及ヒ宸翰拝見允サレタル事実ハ、総覽ニ記シタル

カ如シ、此ノ

勅詠御機紙

及ヒ宸翰御拝戴ハ安政二年 月 日近衛忠熈

公御取伝ナリシト(近衛家奥表両日記参証)、而シテ御納

戸奉行有馬次郎右衛門へ上京命セラレ(御在府中)、近衛

殿ニ於テ拝受セリ(拝受ノ手續ハ近衛家奥表両日記参看)、

同月廿五日京都ヲ発シ、直チニ江戸ニ至リ捧ケタリシ

ニ、二公ハ御正服拝戴セラレ、後御掛物ニ仕立テラレ、

安政四年ノ春御帰国ノ際御携ヘアリシトナム、此日年

首御儀式畢テ後、奥御座牡丹ノ間御床ニ御掲ケ御拝遊

ハサレ、畢テ御一門四家及ヒ御家老・若年寄・大目付

等ニ拝見允サレタリト、其時ノ御言ニ此内ヨリ各へ拜

見致サセムト存シタレトモ、時機ナカリシ、誠ニ難有

ハ勿論、家ノ荣誉一身ノ面目無之事ナリ、厚キ 勅意

ノ趣モアレト他日可申聞トノ御言ナリシトツ、御家老

島津登(久包)廣貫(市米四郎)へ親話、

御製

ものゝふもこゝろあわして秋津洲の
国もうこかすともにおさめむ

是レ則チ人皇一百二十二代

孝明天皇統仁ノ御製ニシテ、我カニ公ヘ特旨ヲ以テ下シ賜リシ者ナリ、叡慮ノ存スル処最ト尊キノミナラス、當時幕威赫々タリト雖トモ、外夷ノ処分ニ当ヲ失シ、天朝ノ宸怒ニ触レ、從テ人心激乱兆稍ク顯ハレタルモ、各藩侯ニ於テ天意ニ添ヒ奉ラムトスルハ、僅々四五侯ニ過キス、剩ヘ諸藩主カ朝廷ニ近接シ奉ルコトモ得サリシ故、朝廷ハ畏クモ御孤立トモ云フヘキ御有様ナリキ、然ルニ我カ公密ニ奏聞セラル、旨アリシニ、叡感斜ナラス此御製及ヒ宸翰ヲ下シ賜ハリシトナン、

○斯ノ御製ハ掛物ニ仕建ラレ、今ニ秘藏、宸翰ハ見ル所ナシ、遺憾言ヲ俟タス、廣貫此事ヲ久光公ニ問フ旨アリシニ、公宣ク、予モ甚タ遺憾トスル処ナリ、宸翰ノ存セサル所_{(以ハ、先公御臨終山田壯右衛門(爲正)及ヒ侍女須摩ナル者ニ仰セラル、ニ、御事切レノ上ハ御座右ノ御文庫及ヒ江戸邸御手許藏ニアル御文函ハ速ニ焼捨トノ御言ナリシト、故ニ御逝去ノ次日(七月十六日)二ノ丸浩然亭ノ山中ニ於テ焼キタリト、後日御遺言書ト俱ニ予ニ届ケ出タリ、尙ニ遺憾ナルハ這ノ御書類ナリ、定メテ宸翰其他貴重ノ御書類}

アリシナラム、○此宸翰或ハ近衛殿・三條殿(實萬)等ノ御書翰モ俱ニ此文庫ニ納メ置レシナラム、文久二年ノ春、京都ニ於テ近衛殿ニ宸翰ノ御主意ヲ尋ネシニ、時世ヲ御憂ヒ、且ツ當時ノ暴政ヲ御歎キ、且ツ御危ミ、御依頼ヲ初トシテ将来ノ見込言上、御上京御尽力御頼思召ス等ノ事柄ナリシト語ラレタリ、随分御長文ナリシト、其他同殿又ハ三條殿ヲ以テ御内翰モ數度賜ヒタリトノ言ナリキ、實ニ遺憾ノコトナリシトノ御言ナリキ、○是ヨリ先キ、公ハ久光公ヲ召サレ(安政四年ノ秋)御製及ヒ宸翰拝見ヲ允サレ、而シテ宸翰中御上京促サレタルニ就テ尊慮ノ趣、或ハ福岡・佐賀ヘ打合ノ趣拝承シ、予カ意見モ聞シ召サレムトノ御言モアリシト云々、明治十八年十二月廣貫親シク拝聴セリ、

三 史談会速記録第_(等二十一冊)号鈔(参考)

吉木竹次郎速記

明治廿七年四月廿日午後一時一同着席

市來四郎君臨席

市來君(四郎) 去十四日ノ史談会(上野山内櫻雲)デ各

様御拝見ニナリマシタ副会長東久世伯ノ御染筆デアリ

マシタ 孝明天皇ノ御詠ヲ、島津齊興・齊彬父子ニ賜
ヒマシタコトノ御話ヲ申シマス、賜ヒマシタ次第ガ分
ラナクテ、アノ俣ニ印刷デモナリマシテハ手続モ分ラ
ス、漠然タル事デゴザリマスカラ、賜ハリマシタ年月
或ハ賜ヒマシタ事実ト御手続等ヲ御話申シテ、先日ノ
速記録ト共ニ皆様ノ御覧ニナリタイト考ヘマス、今日
ハ其御話ヲ致シマス、改メテ御話ノ順序トシテ勅詠并
ニ近衛公ノ御副書ヲ朗読致シマス、

詠寄国祝

和歌

武士もこゝろあはして秋つすの

国はうこかすともにおさめむ

齊興朝臣・齊彬朝臣カ国政ニアツキ心サシヲ、叡感
浅カラスツネ々仰コト、モアリシニ、コタヒ武士
モ心アハシテノ 御製ヲ御懐紙ニ 宸筆染ラレテ伝
ヘヨト、アツキ 仰アリシヲカシコミテ、
武士の心も君かめくみもて、けにいやましに国やお
さめむ ト、ツタナキ筆言葉モ後ノシルシニモナラ
ムトカキ添テ、伝ヘ侍ルモノ也、

安政二とせの春

右大臣忠熈

さつま

宰相との

中将との

扱御覧デゴザリマスル御製ヲ、島津齊興・同齊彬父子

(宋書にて頭注)二月十八日江戸にて拝領セララル

ニ賜ハリマシタハ、安政二年三月ノコト、見ヘマスガ

日ハ分リマセヌ、安政元年ノ春齊彬ハ参府致シマシタ、

其途次伏見駅滞在中、例ノ如ク近衛家ニ参殿致シマシ

タサウデス、其時堂上方御参集ノ御方々ハ三條實萬公・

中山忠能公ノ御兩人ト見ヘマス、其時分御三方ガ御寄

リニナリマシタ御訳合ハ、何事デゴザリマシタカ能ク

伝ハリマセヌ、高貴ノ御方々ノ御寄合デ、何カ国事上

ノ御談シガゴザリマシタト考ヘラレマス、其前頃ヨリ

齊彬ヘ極密ニ何乎御沙汰モアラセラレタト見ヘマス、

夫レニ対シ奉リテノコトデモゴザリマシタカト考ヘラ

レマス、一説ニ其時齊彬ハ何カ意見ヲ密奏致シマシタ

ト申スコトデゴザリマス、御上ニモ当時御苦心ノ折デ

モゴザリマスシ、意見書ノ趣、余程 叡感アラセラレ

タト申スコトデゴザリマス、然シテ齊彬ハ江戸ニ出マ

シテ後、近衛家ヨリ御密書ガ参リマシテ、 宸翰ト勅

詠ヲ下サレタカラ誰レソ拝受ノ為メ人ヲ遣ハセ、ト云フ忠源公カラ仰遣ハサレタサウデゴザリマス、其処デ齊彬ハ納戸奉行有馬次郎右衛門ト申ス者ヲ上京致サセマシテ、御製ト 宸翰ヲ拝受致シマシタト見ヘマス、是ハ同年ノ五月二月デゴザリマス、次郎右衛門ハ上京致シテ 宸翰ト 勅詠ヲ拝受シマシテ、直ニ江戸ニ帰りマシタト書イテゴザリマス、其時齊彬ハ正服シテ拝戴致シマシタサウデス、而シテ後 勅詠ハ懸物ニ仕立テ、子々孫々貴重ニセネバナラスト申シタサウテス、則チ先日各様御拝見ニナリマシタハ其写シデゴザリマス、御本書ハ立派ナ懸物ニ致シテゴザリマス、近衛様ノ御書類ハ別仕立ニナリテゴザリマス、夫レヲ今度東久世様が御写ニハ 御製ノ末ニ寄セラレマシタモノデゴザリマス、其 宸翰ハ伝ハリマセス、如何ノ御主意デゴザリマシタカ、齊彬ガ其前ニ奉呈致シマシタ事柄モドウイフ事柄カ分リマセス、併シ 宸翰ノ御事柄ニ就キマシテハ私が編輯ニ就キマシテ、故久光ニ質問致シタ事ガゴザリマス、久光ノ話ニ近衛殿ヨリ齊彬公ニ仰セ聞ラレマシタハ、時勢ニ就テ 宸襟ヲ悩マセラレ、我々ニ於テモ実ニ寢食モ安セスコトデアル、兎角大小名

ガ帝室ニ心ヲ真実ニ寄せ奉ル者ガナクテハナラス、今日ノ光景デハ恐多クモ玉体モ御弱リアソバサル、ニ立到ラムヲ恐レ奉レリトイフコトヲ、近衛殿ト三條實萬公ガ御話ニナリマシタサウデス、其時齊彬ハ涙ヲ流シテ暫ク御答モ出来ナカツタソウデス、サウシテ感慨ニ堪ヘラレス何カ言上致シタサウデス、其趣モ伝ハリマセス、此事ハ齊彬ヨリ久光ガ直キニ聞カレタト私ヘ話サレマシタ、其時ノコトヲ伺ヒマスルニ、朝廷ハ御微弱ナル御有様デゴザリマシタラウト恐祭シ奉ルデゴザリマス、其処デ久光ノ申サレマスルニハ、 宸翰ハ拝見致シタケレドモ能ク記憶シナイガ、彦根其他ニ京都ノ御警衛ヲ命セラレタケレドモ、是レハ名実相反シタル御警衛デ、真ニ御警衛ト申ス主意デナク、宮堂上方ナドヲ束縛シ御動キ出来ナイ様ノ密旨ニ出ルコトデ、堂上方ニモサウイフ事情ヲ御覚リノ方ハ大ニ御憂憤ナサレ、齊彬ヘ近衛・三條ノ両公ヨリ臨機御守衛ヲ出シテ貰ヒタイトノ御事、モウ一ケ条ハ外国処分ノコトデアツタト申サレマシタ、当時幕府ノ勢ハ酷ヒ時デ、極ク秘密ニナサレネバナラヌ事デ、其時分朝廷ハ攘夷御一凶デ居ラセラレル様デアリマシタカラ、果シテ其処

分上ノコト、モ 宸翰ニ御記シデアツタ、或ハ幕政ヲ
 一洗セネバナラストイフ御コト、或ハ一橋公ヲ將軍ノ
 繼嗣トシヤウト云フコトハ、越前公御始メ尾州・土州・(松平慶永)
(徳川慶勝・山内豊
信・伊達宗城・綿須實齊・鍋島齊正)
 宇和島・徳島・佐賀侯ナドモ皆齊彬ト御同論デ御尽力
 ナサレタハ、書類ニモ委シク見ヘタ通りデゴザリマス、
 右ノ諸公ト御相談致シマシテ齊彬ハ近衛・三條公ニ就
 テ内勅下ラムコトヲ内願致シマスルシ、土州侯ハ三條
 公ト御近縁ナルヲ以テ、三條公ニ就テ御願ナサレタル
 事蹟モ伝ハリテ居リマス、此等ノコトモ意見書中ニア
 ツタト覚ヘルト久光ノ話デゴザリマシタ、当時ノ形勢
 ヲ以テ考ヘマスルニ、果シテサウイフ事デアツタラウ
 ト恐察シ奉リマス、
 其処デ此 宸翰ノコトニ就テ申上ケ置カネバナラスハ
 宸翰ハ紛失致シテ 御製ノミ残ツテ居リマスルハ、皆
 人怪ム所デゴザリマス、私モ何処ニカ押込シテハナイ
 カト思ヒマシテ、右通久光ニ尋ネマシタ、久光ノ申サ
 レマスルニハ、拙者ニ於テモ甚遺憾ナルハ此事デアル、
 齊彬公ガ臨終ニ小納戸役山田壯右衛門ト云フ者ト妾ノ
 すま其二人ニ向ツテ遺言致シタ箇条ガゴザリマス、其
 内ニ常ニ座右ニ置マシタ文庫ガアル、此レハ大事ナ書

付デアルカラ目ヲ塞ギタラバ直グニ焼捨ヨ、次ニハ江
 戸屋敷ノ納戸蔵ニ文庫ヲ入レテ置イタ、是レモ其假焼
 棄ヨ、人ノ見ナイ様ニナクテハ済マスト御遺言ナサレ
 タ、拙者ハ臨終夜半時分ニ駈テ登城シタ、拙者ガ出ル
 ヲ待兼ラレテ御遺言トイフハ、朝廷ヨリ仰下サレタ御
 一条ハ追々承知ノ通デアルカラ志ヲ継カナクテハナラ
 ス、又次郎(即チ今ノ忠義デゴザリマス)ヲ婿養子ニシテ
 哲丸(前年ノ九月生レタノデゴザリマス、安政六年ノ正月没
 シマシタ)ヲ順養子ニセヨトイフニケ条ノ御遺言デアツ
 タ、其外山田ト妾ハ愁傷ノ紛レデゴザリマシタカラ、
 レマシタ、山田ト妾ハ愁傷ノ紛レデゴザリマシタカラ、
 此書類ノ入レテアル文庫ヲ焼棄ルニモ久光ニ告ゲズシ
 テ焼イタサウデゴザリマス、是レガ遺憾ナコトデゴザ
 リマス、其文庫ノ中ニ 宸翰モ定テ納メテアツタラウ
 ト思フト久光申サレマシタ、ソレヲ焼イタハ七月十六
 日ノ昼頃デ、城内ノ浩然亭トイフ茶屋ノ様ナモノガゴ
 ザリマシタ、其辺ハ山デゴザリマス、其処デ焼イタトイ
 フハ見テ居タ人モゴザリマス、ソコデ 宸翰ハ無ク
 御製丈ケ残リタデゴザリマス、之ヲ焼イタニ就イテ私
 ノ考ヘマスルニハ、其文庫ハ随分大キナモノデアツタ

サウデゴザリマス、然ルニ御承知ノ通り嘉永二三年間ハ内証ガゴザリマス、夫レニハ福岡・宇和島・越前・奥平〔信高〕・南部〔信賢〕ノ諸家様ガ殊ノ外御配慮下サレテ、当時ノ閣老阿部侯又ハ筒井紀伊守等ニ御内談下サレ、無事ニ治リマシテ齊彬ガ家督モ滞リナク済マシタデゴザリマス、偏ニ右諸家方ノ御尽力デゴザリマス、其函ノ中ニハ右事件ノ機密ナ書類モアツタラウト考ヘマス、其処デ山田ト妾ハ齊彬ノ死ンダ後ニハ妨ゲニナラウカラトイフ考デ、久光ニモ告ゲズシテ遺言通り直ニ焼タデアラウト考ヘマス、サモナケレバ久光ニ告ゲズシテ焼ク訳ガゴザリマセヌ、サウイフ訳モゴザリマシタカラ、宸翰モ果シテ其文函中ニアツタデアラウト考ヘマス、ソコデ御製丈ケガ残リタデゴザリマス、久光ノ話ニモ夫レダケガ伝ツテ居リマス、此勅詠ヲ戴キマシタハ安政二年デゴザリマス、齊彬ハ同元年ニ参府致シテ安政四年マデハ天璋院殿ノ関係、或ハ世上騒シイ事デゴザリマスカラ特旨ヲ以テ滞府ヲ命ゼラレテ、四年ノ閏五月帰国致シマシタ、其時途次伏見ニ滞在致シテ近衛殿へ出マシタサウデス、其時モ三條公ヤ中山公モ御参集ナサレテ、中デ三條公ト中山公ハ御参内ナサツタ

ト申スコトデゴザリマス、此時モ何カ御内勅ゴザリマシタサウデス、ドウイフ事デアツタカハ伝ハリマセヌ〔御所御拜ノ条参照〕、近衛殿ニ出マスル前日デゴザリマス、則チ閏五月十三日カ十四日ト思ヒマスガ、其時供致シタ留守添役土師庄十郎ト申ス者ノ直話デゴザリマス、日ハ両日中何日カ忘レタト申シマシタ、近衛殿ニ参殿ノ前日伏見ヨリ嵐山ノ花見ニ参ツタサウデス、其帰路九門内ヲ拝観致シ、南門前ニテ遙拝致シマシタハ其時デゴザリマス、其翌日ニ近衛家へ参殿ハ正式ニ所司代ニ届出テ、参殿致シタサウデス、今御話シ申シタ通り三條・中山二公ハ中デ御参内ニナツタデゴザリマス、右土師ガ話ニハ其時宸翰ヲ下サレタト申シマシタ、何等ノ御事柄乎ハ土師モ存ジマセヌ、サウシテ安政五年ノ正月元日一門其他家老・若年寄・大目付ノ三役ヲ奥ノ書院様ノ座鋪櫻ノ間ト申ス座ニ集メマシテ、此御詠及ビ宸翰又ハ近衛殿ノ御書ヲ拝見致サセマシタサウデス、其次第ハ若年寄ノ島津登ト申ス者、私ノ懇意ナ人デゴザリマシテ、直話デゴザリマス、右登ノ申シマスルニ、其日何事ノ御用カト一門其他出マシタトコロガ、床ノ間ニ屏風ガ立廻シテアツタサウデス、

程ナク齊彬ハ正服(上下ノ服)ヲ着ケテ出マシテ、自ラ其屏風ヲ開キマシテ掲ゲタル御製ノ懸物ヲ拝シマシテ、夫レカラ一門家老共ニ向テ申聞マスルニ、此内ヨリ各ハ拝見致サセヤウト思ツテ居ツタケレトモ、色々考ヘル旨アツテ是レマデ遷引致シタ、是レハ即チ今上天皇ノ極密ニ下サレタ御詠デアアル、各謹デ拝見セヨト申サレマシタ、各慎シテ拝見致シタサウデス、夫レカラ続イテ床ノ上ニ供ヘテアル函ヲ自ラ開ヒテ、恭シク戴ヒテ申シマスルニハ、是ハ宸翰デアアル、慎ンデ拝見致シ決シテ他人ニ口外致シテハナラス、我家ニ斯ノ如キ宸翰ヲ頂戴致シタ事ハ未曾有ノコトデアアル、殊ニ時勢柄至テ重イ事デアアル、各ニ之ヲ拝見致セルハ尚ホ他日話スル事ガアル、今日ハ年首デハアリ各々ニ拝見ヲ允ス、ト申サレタサウデス、其時久光始メ一門四家ノ者、家老等拝見致シタデゴザリマス、拝見致シタ島津登ハ、私至テ懇意デゴザリマシタケレドモ、宸翰ノ趣ハドウ云フコト、ハ話聞セマセス、是レダケノ続キデゴザイマス、久光ニハ其前ニ内々拝見致サセタサウデス、今伝ハル所ハコレダケノ事デゴザリマス、

然ルニ是迄御互書類ニ依テ調べマスルニ就テハ、簡様ナ証拠ガ出テ参リマス、是レハ賜ハリマシタ宸翰ニ就テ、三條實萬公齊彬ト御交リ上ヨリシテ証拠ガ拳ツテ参リマスカラ、之ヲ朗読致シマス、是レハ三條家ニ御伝ニナツテ居ル齊彬ヘノ御手紙ノ御控ト見ヘマス、

三條實萬公齊彬公へ贈ラレシ御書翰

安政五戊午年七月六日

この文書は、本文第二五五号文書(後出)と同文重複により略す。

是ガ則チ前オ話申シマシタ証拠デゴザリマス、当時ノ情况今ニシテ恐察奉ルニ、維新ノ大業ハ先帝御苦心ノ結果ト申スニ外ナシト存シマス、御互史料ヲ取調マスルニハ、当時ノ光景ト先帝叡慮ノ御程ヲ察シ奉リ、筆ヲ執ラネバナラスコト、存ジマス、此コトハ是レマデ御詠ト右御話シ申シマシタコトノミ伝ハリマシタケレドモ、此ノ三條公ノ御書翰ヲ発見致シテ証拠ガ揚リタル訳デアリマス、当時幕威赫々、宮堂上方ハ稍束縛シ奉レル際、国家ノ為メニ斯クマデ言路御洞開アラセラレタル御事蹟ハ、最トモ畏シコキ御事ニテ、実ニ人君ノ要ヲ得セラレタルハ申マデモナク、一視同仁ノ聖旨御互ニ落涙ノ外ゴザリマセス、茲ヲ以テ志士

人々奮興致シテ、維新ノ大業僅々五六年ノ間ニ揚リタルモノト考ヘマスル、

佐田君（白茅）文庫ヲ焼カレタ山田ト云フハ何役デゴザリマス、

市來君 小納戸頭取役デゴザリマス、福岡様ナドニハ御幼年ノ時ヨリ御召使デゴザリマス、

佐田君 久光公ニモ御聞ニ入レテカラニ焼クベキ所デア

レドモ、一断デヤラレタモノデアリマスカ、
〔頭注〕史談会連記録第五十二号參看、宸翰甲第号參看、近衛家奥表兩日記參看、
市來君 左様デゴザリマス、其処デ此御詠ヲ拝見致サセ

タハ齊彬カ死ヌル年ノ正月元日デゴザリマス、其前安

政二年ニ賜ハリマシテカラ、思フ旨アリシト見ヘ、軍

備一向ニ着手致シマシテ操練ナト勉強致サレ、或ハ西

郷ナドヲ召使ヒマシテ、越前様ナド、国事運動只管ニ

致シマシタト見ヘマス、井伊侯ガ専權ヲ見マシタカラ、
〔直稱〕

西郷ハ馳セ下ツテ最早天下救フニ道ナキニ到リマシタ

ト申出マシタハ、安政五年ノ四月デゴザリマス、是レ

ハ西郷ガ岩下・吉井ナド限りニ申シタ話デゴザリマス、

西郷ハ右通最早救フノ道ハゴザリマセスト申シマシタ

トコロガ、齊彬申サレマスルニハ、サウデアラウ、最

早決心致シタ、幕府ノ所為、内暴横ニ流レテ人心ヲ挑発

スルモ外夷ニ対シテハ卑屈極レル仕方デハ、到底外国ノ圧抑ヲ甘ニスルニ到ルモ知ルベカラス、志アルモノ

ハ奮テ竭力セネバナラス時ニ迫レリ、就テハ第一天下人心ノ方向ヲ定ムルニ在リ、其処ニ決断致シタ、夫レ

デ此内ヨリ操練ニモ随分力ヲ入レル訳デアル、此秋ハ押出シテ事ヲ揚ゲザレバナラスト考ヘル、因テ予テ同

志ノ藩々モアルカラ夫レ等ト手ヲ引キ合ヒテ尽力シヤウト思フ、兎ニ角人心ノ方向ヲ一定スルガ急務デアル、

其用意ハ略ボ致シテ置イタト申サレタサウデス、而シテ福岡ヘ手紙ヲ持ツテ行ケト云ツタサウデス、西郷ハ

親書ヲ提ヘテ福岡ニ参リ、申付ノ趣言上致シタサウデス、其次第八能ク伝ハリマセスケレドモ、齊彬ガ没後、
〔黒田齊博〕

長溥公ヨリ伊達公ヘノ御書面ニ齊彬ノ死ンダ事ヲ御歎息ノ書面ガ幾通モゴザリマス、其中ニ京都御召云々ト

ゴザリマス、夫レ等ヲ以テ見マスルト又一ノ証拠ニナツテ参リマス、サウイフ次第デ前年ノ 宸翰ノ趣ト是

レガ二三ノ証拠デゴザリマス、人々ノ話グラキデハ疑ノ立ツ廉モゴザリマシタケレドモ、實萬公ノ御手紙ト

申シ、長溥公ノ伊達公ヘ御遣ハシノ御手紙ノ趣ナドヲ以テ見マスレバ、決シテ疑フベキ事デナイト考ヘマス、

夫レハ西郷ガ京都へ兵ヲ引イテ出テ朝廷ヲ守護シ奉ル云々ノ事ヲ岩下・吉井ニ密告シタハ此事デゴザイマス、夫レカラ今度東久世様ニ御文ヲ願ツテ置キマシタ、夫レハ先帝ノ御苦心アソバシマシタ御事ヨリシテ御製ノ御意味ヲ広ク解釈シマスルトナカク御意味ガ拡大デゴザリマスルト考ヘマス、則チ「武士も心あはして」トイフハ、島津一家ヲ指サレタト小サナ事ニ解シテハナリマセヌ、四千万同胞ト見ナクテハナラス、コレガ眼目デゴザリマス、然ルニ秋津洲ノ國ヲ共ニ治メヤウトノ御言ハ、今日ノ立憲政治ヲ暗ニ御貫キ遊ハシタモノデアラウト解シマシテ宜シカラウト存シマス、当時ノ形勢ノ実情ハ書ヒタモノニハ沢山ゴザリマスケレドモ、隔靴搔痒トモ云フベキデゴザリマスカラ分リ兼ねル事實モアラウト存シマス、安政五年頃マデハ幕威モ赫々タルコトデ、井伊大老ナドガ擅ニ威圧手段デアツタハ多言ヲ要シマセヌ、殊ニ京都ニ対シ奉リテハ、実ニ今日ニテハ話ニナラス仕方デゴザリマシタハ御存ノ前デ多言ヲ待マセヌ、中ニモ彦根其外ノ各藩ニ守護ヲ命ジマシタハ、外国へ対シテノ守護トイフ名ヲ以テ其実ハ朝廷ヲ監守束縛スルノデゴザリマス、実ハ変レド

モ其形勢コソ北條・足利ノ所為同様デアラウト考ヘマス、左様ニ六カシイ間ニ齋彬如キ一介ノ武家デスラ深ク眷顧ヲ垂サセラレ、恐多クモ密ニ御声息ヲ賜ヒマシタハ、一口ニ申スト弘ク耳目ヲ全般ニ注カセラレ、独リ近侍嬖寵ノ言ヲ偏信遊サル、様ノコトデナク、所謂公議輿論ヲ採扱在セラレタルノ実跡ニシテ、誠ニ言路洞開デゴザリマス、夫レダケ賢キ勸諭デゴザリマシタカラ、天下ノ志士モ感戴吾ヲ忘レ、身ヲ殺シ、族ヲ滅スモ厭ハス、其志ヲ堅フシテ僅々五六年ニシテ維新ノ大業モ成就シタト考ヘマス、故ニ維新ノ大業ハ先帝ノ御苦心ト、言路洞開ト、特ニ一視同仁ノ厚キ勸諭ニ基シタト考ヘマス、和漢洋古今言路壅塞程政務ノ大害ハゴザリマセヌ、又一視同仁ノ格言ニ背テ偏任偏信程(二心)國家ノ害毒ハコサリマセヌ、偏任偏信ハ巳ノ良知良能ヲ昧マシ、賢者モ愚人ト変ルモノニテ、其結果ハ政治家ニテ云ヘハ人心離反ノ基ナルハ言ヲ待マセヌ、人心離反ハ國家不祥ノ本源ナルハ言ヲ俟チマセヌ、勅詠中「武士も心合はして秋津州の」ト仰セラレシ「武士も心合はして」ハ、即チ今日ニ於テ言ヘハ和衷協同ノ意義ナラント信シマス、「國は動かす俱に治めむ」ト

仰セラレシハ取モ直サス国基ヲ鞏固ニシ、国權ヲ張振シテ、帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルノ意義ト恐ナカラ御符合ノ御意味ナラント察シ奉リマス、當時上下ノ隔離太シク、朝廷ハ在レトモ無キモノ、如ク思ヒ、天下万衆只徳川幕府アルヲ知リテ朝廷ヲ顧ミス、為メニ大義名分モ地ヲ弘ヒ、為メニ人心モ一致セス、一旦米艦浦賀ニ入りマスレバ三百大名モ只途方ニ暮ル、有様ニテ、上下殆ント解体ノ有様ナリシト申シマス、斯クテハ外国ニ対シテ其跋扈ヲ制スル氣力モナカラント思ヒマス、故ニ 勅詠中「武士も心合はして」ハ即チ諸大名始メ一般和衷協同シテ此日本帝國ヲ擁護シ、弥々根礎ヲ堅固ニシテ、近頃申シマスル開國進取トカ自主の外交トカ申ス様ナル意味ニテ、君主ト俱ニ永遠隆昌ヲ期セントノ深遠無慮^(皇力)ノ御思召モ孕リシト考ヘマス、実ニ當時ノ情弊ヲ戒飭在セラレタル度々ノ御深慮ヲ察シ奉リマスレバ、恐入ルノ外アリマセズ、又今日ノ時勢ニ引ビテモ的々当ルノ心持致シマス、仮令人ハ一致協和ナドハ入ラス、兵威アレバ之ヲ庄伏スルナド、申モ全ク事体ヲ知ラヌ癡言デアリマス、彼ノ幾百ノ軍艦、幾十万ノ兵員アリ^(下カ)リ雖モ治國ノ^(具脱心)ニハナリマセズ、唯大

切ナルハ君民上下ノ和不和ニ外ナキハ多弁ヲ以ヒマセズ、先帝ハ最トモ此等ノ要旨ヲ踐セ玉ヒシ故、七百年來牢固ノ霸業ヲ一變シテ王政帰一今日ノ盛運ヲ開カセ玉ヒ、匹夫ノ身モ聖恩ニ浴スル世トナリマシタハ、実ニ難有御聖旨ナルハ 御製ヲ拜見シテ感戴イタシマス、余計ノ冗言ナレトモ感佩ニ堪ヘスシテ陳ヘマシタコトデ、諸君モ必ラス御同感ナラント存シマス、

又過日故山陵奉行戸田忠至侯ノ御旧臣新恒藏君ノ御話中ニモ、 叙慮ハ斯クアラセラル、ト伺ヒ奉リテハ一筋ニ命ヲ捧クル心持イタシタト申サレマシタ通、 御製ヲ伺ヒマシテハ黙々ニモ居ラレス心持イタシマス、 其際新君ノ話中、當時密ニ漏レ聞カレテ感戴セラレタル 御製ナリト話サレシニハ、
烏羽玉の夜すから冬の寒きにも

つれて思ふは国民のこと

誠ニ難有御聖旨デゴザリマス、只感泣イタスノ外ナク、斯ク臣民ヲ思召サレタルコトヲ伺ヒマシテハ、益々相互ノ処此ノ歴史調ノ事ヲ励ミ、永ク此等ノ御聖徳ヲ表彰シ奉ルコソ又奉答ノ一端乎ト考ヘマス、尔來申迄モナキコトナレドモ御互必至ノ勉強イタシ度コト、希望

イタシマス、余事ナカラ愚存一寸申添へテ置キマス（一同立札）

右通御承知被遊候条、此旨御役人限奉承知候様可申渡候、

正月

駿河新納

四 孝明天皇御製（近衛家御簾中附従針医原田才

輔寄贈）

皆人の心のかきりつくしてし後こそたのめ伊勢の神風朝な夕な民やすかれと思ふみの心にかゝることくにのふね

六 齊彬公福岡侯へ御封物伝達（黒田家紀事鈔）

安政五年戊午正月用状ノ内ニ

夷しらよ舟こきもとせ伊勢の海神の御国と知りてあるかも

一筆令啓達候、侍従様（下野守慶賢）ヨリ 松平薩摩守様ヨリ御自筆御書御封物二（国事機密ニ係レル者ナラム）御添被進候付、載注文差越之候、長崎飛脚便同所迄達方取計可被申候、

あちきなや又あちきなや葦原のたのむかひなき武藏のゝ原

正月廿六日

江戸御用人中

五 齊興公従三位御昇進布告

〔頭註〕〔近衛家奥表日記参照〕

松平大隅守

御国

御用人中

其方儀官位共結構被 仰付候事ニ付、此上昇進ノ儀ハ御沙汰ニ難被及候得共、在職中年来ノ勤勞、其上廣大院様御統柄ト申、且ハ当時ノ御縁辺旁出格ノ 思召ヲ以従三位昇進被 仰付候事ニ候条、以後ノ家格ニハ被心得間敷候、此旨可申聞旨 御沙汰候、

国許ヨリノ返事 御紙面之趣承知仕御書御封物共相達、去廿二日之便長崎へ差越、達方之儀御下知申入タル儀ニ御座候、

二月晦

黒田内

松原

七 軍功家筋ノ者江知行高申受人名及ヒ達書

安政五年戊午二月祖先軍功或ハ戦死者ノ子孫ニシテ、貧困

ナル者ニ知行高申受被 仰付タル人名、左ノ如シ、

一高拾五石

桂 小 吉 郎 右衛門
旧名

一高貳拾石

畠 山 主 計

一高拾五石宛

相 良 治 部

比 志 島 靜 馬

菱 刈 奎 之 助

諏 訪 數 馬 甚六
旧名

新 納 衛 守

町 田 主 馬

平 田 靱 負

仁 禮 小 吉

本 田 主 計

平 田 正 十 郎

大 島 盛 太 夫

以上寄合

猿 渡 嘉 左 衛 門

瀬戸口八郎左衛門

毛利覺右衛門

有馬藤四郎

伊集院半五右衛門

木脇伊左衛門

佐多彦五郎

蒲生十郎左衛門

木脇次郎右衛門

園田清左衛門

伊勢平右衛門

赤塚源太左衛門

市來八左衛門

本田六右衛門

市來太郎左衛門

諏訪奎右衛門

土持孫兵衛

酒匂太郎左衛門

喜入休兵衛

柏原矢太右衛門

伊地知權左衛門

阿多喜兵衛
村田爲左衛門
久保七兵衛
吉井源七郎
細田直次郎
二階堂與右衛門
大河平源太左衛門
樋口休八
木村平之丞
伊集院九郎右衛門
伊地知八四郎
奈良原助七
丸田彌七左衛門
敷根越右衛門
白尾藤五右衛門
逆瀬川玄高
米良養玄
加世田次兵衛
松本市左衛門
大田六郎

和田乘助
黒葛原三次
牧源兵衛
相良吉右衛門
三原加司右衛門
平田藤五郎
宅間與八左衛門
小島甚兵衛
永田傳右衛門
松井新次郎
志和屋左太夫
床次善兵衛
新納善悦
有川喜左衛門
四本半九郎
比志島源太郎
伊集院嘉盛
奈良原清左衛門
新納喜十郎
村岡半左衛門

武 元 庵
新納藤右衛門
田尻小吉郎
吉井十之進
赤塚吉右衛門
染川源七郎
油田源左衛門
桐野源右衛門
平田平六
有川休右衛門
山田十介
渡邊作右衛門
愛甲藏記
伊地知十左衛門
田代宗次郎
時任源左衛門
新納太右衛門
平山新助
伊集院四郎
町田清右衛門

向井十郎太夫
村田藤兵衛
與倉仙左衛門
是枝八太郎
市來源右衛門
村田齊心
町田源七
川上伊左衛門
松崎仁右衛門
三原藤四郎
町田甚兵衛
本田半兵衛
大山六右衛門
藤崎若次郎
別府新兵衛
鎌田與左衛門
野村才右衛門
入佐助八
有馬助之進
四本甚五左衛門

鮫島次左衛門

日高與一左衛門

貴島源右衛門

山田猪三太

脇元太郎左衛門

西郷休兵衛

鎌田正之助

野田勘兵衛

甲斐右八郎

相良角兵衛

猿渡孝次郎

野崎休兵衛

大寺彦熊

伊地知助左衛門

新納權左衛門

伊集院半助

邊牟木喜之助

上床直太郎

吉田七郎

平田休右衛門

中原圓乘院

右は先祖代抽忠勤、殉死戦死等致候家筋之者候処、数代押移当時致難洩居候段被 聞召上候、依之別段之御取訊被為 在、給地御蔵入高之内ヨリ右之通代金上納申受被 仰付候、左候テ代金之儀ハ来ル戊午迄五年賦上納被仰付候条、弥忠勤相励御軍役手当等行届候様、尚又厚心掛可致精勤旨可申渡候、

二月廿八日

下總

合計百三十五人、其高式千余石ニ及ヒタリ、何レモ生計困窮ノ人々ナレハ、思モヨラサル仁恤ヲ蒙リ一同感泣セリト云フ、○給地御蔵入高トハ、御目見以上ノ諸士所有高ヲ以テ、拝借金等返上ノ為メ寺社方・御納戸・御厩・宗門方等ノ諸局へ差出、或ハ諸犯罪者没収等ノ高数万石ニ及ヒタリ、之ヲ給地高御蔵入ト通称ス、○申受代価老石拾五貫宛ニ定ラレタリ、当時売買老石代式拾五六貫文乃至三拾貫文ノ相場ナリ、然ルニ下直ナルノミナラス年賦上納等寛大ナル処分ニテ、実ニ恩恤之至ナリ、○右百三十余名ノ輩、多クハ日々ノ活計ニ困メル者半バ以上ニ居レリ、○給地御蔵入高払下ケノ残額多数ナルカ故、諸郷又ハ私領等古昔忠勤ノ家筋貧窮ニ迫レル者ニ同様仁恤ヲ布カル、ノ尊意ニテ、新納賤

河奉命取調中ナリシカ御逝去、其事果タサ、リキ、

計候、以上、

豎山武兵衛へ

用事

八 齊彬公豎山武兵衛ニ与ル書

一 守衛人数平方引取ノ事ニ付、様子見計アメリカ等ノ都合次第可取計候(嘉永六年癸丑以來江戸邸常備兵ヲ云フ)

一 淡路守(佐土原侯島津忠寛)事、イツ比出立ニ付当地へ

何月比参候心得ニ候哉、早々承候テ可申遣候、

一 高輪(齊興公)御下向ノ御模様ハ如何ノ御様子ニ候哉、

是又休之丞(御側役永江休之丞)へ承り候テ可申遣候、

一 弥井上事大島渡申付(井上新右衛門大島へ渡海、和蘭交易

創初ニ関ス、其際市來ハ琉球ニ在テ佛英蘭貿易及ヒ軍艦買入レ

等井上ト照会ニ従事ス、事実速記録第(マ)号ニ記ス)、供(御

参府御供)藤九郎(伊集院)申付、留守ノ処外ニ無之候

間、伊集院周八ヲ小納戸可申付哉ト存居、シカシ今日

迄ハイマタ治定不致候事、先ハ要用迄申入候、後使万

々、

(安政五年)

二月十二日

猶々、堀田(備中守)へ表向此度封書差出候(外国事

件御建言別項参看)、是ハ表ヨリ相廻シ申候、先日ノ

封書(外国ニ係ル)上京ニ候ハ、早々差出ノ儀可取

九 營中御扣席達書

松平薩摩守

朔望其外登

城之節、向後大廊下下ノ休息所ニ罷在候様可被達候、
尤年始五節句等ハ先是迄ノ通可被心得候、此段モ可被

達置候、

大目付ニ

朔望大廊下下ノ休息所へ、年始五節句等ハ是迄ノ通ト

ノミ御書付、跡ノ大目付エトハ口裏ニ有リ、

如斯御扣席出格ノ待遇トナリシハ、御結婚アリシニ由レリ、

幕政ノ最モ重スルハ、座席ノ高下順次ニアリシハ成人知ル

カ如シ、

一〇 和蘭人來港少年輩粗暴ノ挙動ヲ訓誡シ玉

フ付事実

安政五年戊午四月、幕府ノ蒸汽軍艦(丸)航海伝習ノ為メ鹿

兒島港ニ渡來セリ、其際壯年血氣ノ輩粗暴ノ挙動ヲ後日訓

誠セラレタル御親書、左ノ如シ、

口達之覚

先日公義御用蒸汽船、為伝習役々並和蘭人乗組山川ヨリ城下江乘廻シ上陸有之候処、見物人甚シク、中ニモ諸士之面々役向之制止ヲモ聞入レス、無礼不法ノ所業モ有之候由、就テハ兼テ士風之沙汰申達候モケ様ノ節ノ為メニ候処、如何相心得候哉、甚不可然、第一公辺役人江対シ不相濟、殊ニ此度伝習乗廻之儀ハ、兼テ触達モ有之、蘭人ニモ為伝習従公辺御召寄ニ相成リ、御扶持ヲモ被下罷在者ニテ、蘭人ナカラ公辺役人モ同然ノ訳異本同様トアリニ候、且亦蘭人ハ万国へ通船致候間、当国之諸士礼義モ不弁、無礼至極ト申シ触候得ハ、第一日本之恥辱、我等ニハ命令不行届之姿ニテ、実ニ面目ヲ失ヒ申ス事ニテ、京都・關東へ対シ恐入事ニ候、先日山川番所へ休息致候処、前之濱へ通行ノ下輩ノ蘭人迄モ冠リヲ取り敬シテ罷通候様子、礼節ヲ守リ行キ届キタル事ニ存候、左様ニ事ヲ弁へ候コソ誠ノ士ニテ、先日ノ如キ所業ハ、大小ヲ帶シ候計リニテ、凡下ノ族(士籍以下農工商ノ通唱)同然ノ事ニ候、兼テ郷中ノ申台セ等如何相心得候哉、不審千万ニ存候、殊ニ荷付馬ヲ追ヒ

放チ、又ハ年少ノ者共へ悪事申進候族モ有之、且亦通船ノ節石礫ナト打チ付候者モ有之候段モ相聞得、一休士分ノ面々ハ凡下ノ混雜等制止可致身分ニ候処、却テ右様ノ所業言語ヲ絶候事ニテ、夫程不勘弁ノ者多カルベシトハ存セサリシニ、誠ニ沙汰ノ限り、第一武士タル者ノ所行ニハツレタル事ト存候、先頃モ申達候通、士道トハ仁義礼智信之五常ヲ守リ 礼義ヲ重ンシ、忠孝ヲ心掛クヘクノ処、不法ノ振舞致シ、又ハ申進候面々ノ心中、如何ナル所存ニ候哉、第一国ノ恥辱、我等ノ恥辱ニ相成候、夫等ヲ弁へサル段五常ノ道ニ相叶間敷候、公辺ニテモ此節ハ海防第一御心配ノ時節故、伝習ヲ名トシテ手当ノ様子(海防ノ整否檢察ヲ云フ)、又ハ政事ノ善悪見聞ノ為メ不時ニ乗廻シ被 仰付候半モ難計、仮令左ナクトモ、帰府之上現事見聞ノ成行言上ハ差知レタル事ニ候処、右様不行儀之事言上候テハ公辺へ不都合、且ハ世上ノ聞得何ント相心得候哉、偕亦蘭人へ城下ノ要害等為致見聞候事不可然ト存候者モ定メテ可有之候へ共、兼テ堀田備中守ヨリ差凶ニテ乘廻候段、奉行ヨリ通達モ有之罷越候ヲ差止候訳ニモ至ラス、仮令ヒ差止候トモ 公辺役人承知モ致スマシク

其上万事押隠シ候様ニテハ、第一嫌疑モ難計候故、心

四月十五
日

能ク承知ノ返答申達候、尤モ蘭人ハ御扶持迄モ被下置候モノ共ニテ、差支無之故、公込役人付添乗廻候訳ニテ、左程可悪者共トハ不被存候、今様ノ訳勘弁モ無之、無礼無法之振舞ヲ勇氣ト相考候哉、孔子之南方之強乎、北方之強乎君子之強乎トノ言等、能々勘弁可有之候、若又此節申達候内ニ我等ノ心得宜シカラスト存候面々モ有之候ハ、其訳早々書面ヲ以テ可申出候、様子ニヨリ直ニ論判ニ及フヘク候、且又此度御目附乗組、又々乗廻ルヘキ様子ニモ相聞得候、就テハ先日ノ恥辱モ雪キ度候間、万一乗廻リ候ハ、諸士一同前文ノ旨ヲ相守リ、見物ニ差越候共、役人・蘭人等上陸通行ノ節ハ別テ行義正シク、先日ノ無礼ニ引替格別ニ存候様無之候テハ、国ノ恥辱、我等ノ恥辱致方無之候、然シ国之為メヲ存セス我等ノ為ヲモ願ミサル所存ノ者ハ勝手次第タルヘク候、昔ヨリ敵国ノ使節等差越候節ハ、尚又礼義ヲ專トシ、信義ヲ專ラニ心掛候事ト承及ヒ候、旁以後心得違無之様、早々支配組中之面々江可申達候、以後如何之所行有之候ハ、当人ハ勿論親子兄弟迄モ急度可及曲事候、以上、

日本ニ蒸汽軍艦ヲ置キタルハ觀光丸ヲ權輿トス、此ノ軍艦ハ、和蘭國ノ製ニシテ「スウビンク」ト云フ、去ル安政元年甲寅七月使節乗艦長崎ニ渡來セルヲ、幕府ヨリ所望セラレ、翌年五月同港へ乘來リ獻呈シタル者ナリ、長三十五間余、三百五十馬力、大砲八門ヲ備ヘタリ、而シテ幕府ニ於テ觀光丸ト改稱セラレタリ（嘉永六年癸丑ノ秋幕府ヨリ小蒸汽船一艘誂ニナリタリ、長六間余ノ鉄製川蒸汽船ヲ持渡リ、長崎港内ニ於テ運用ノ伝習ヲナセリ、之ヲ日本ニ蒸汽船ヲ備ヘタル開基トス）、而シテ運用航海ノ教師ニ和蘭人數名ヲ備ヒ、幕役數十名日本海各所ヲ乘廻リ伝習ス、故ニ閣老堀田備中守ヨリ予テ沿海ノ諸藩へ触達セラレ、鹿兒島へ廻航ノ時分ハ、木村圖書頭・勝鯨太郎（後安房守ト云、御目附職ニテ乘頭タリ）・松本良順（長崎病院院長）・澤太郎左衛門・赤松太三郎（海軍大輔赤松則良ナリ）・竹之内卯吉郎其他數十名乗組タリ、○初メ山川港ニ碇泊シタル時ハ、指宿御入傷中ナリシ故、御乗込 御見物アラセラレタリト（廻航ノ日限通知アリテ指宿へ御湯治ニ先以御光越アリタリト云フ、○前ニ御乗り切りニテ御光越云々は時ナリ）、而シテ鹿兒島へ廻航、集成館又ハ火薬製造所或ハ各

所砲台ノ拜見ヲ允サレ、或ハ湾内防禦ノ要衝等ノ意見上言
 スヘキ旨、木村・勝等ニ依頼セラレタリト、然ルニ下町石
 燈籠通りノ海岸ヨリ幕役和蘭人一同上陸ノ際、見物ノ少年
 士等相暴ノ放言、刺ヘ瓦礫ヲ抛チ、或ハ荷付馬ヲ追ヒ放チ、
 通行ヲ妨ケタリ、馬ハ見物ノ男女老幼立錐ノ地ナキ程ノ中
 ヲ縦横駈廻リシ故、見物人ノ動揺ト瓦礫ヲ擲ツ混雜ノ為メ
 騒擾甚シク、制止ノ役員モ手ニ余レリト、少年輩ハ瓦礫ヲ
 擲ツノミナラス、途上ニ立塞リ暴言罵詈甚シキヲ極メタリ、
 斯ク暴動セシハ少年輩カ企タルニアラス、三四ノ暴論連（
 攘夷論者）カ煽動セシニ依レリト云フ、煽動セシ者ハ何レ
 モ相応ノ年齢ノモノニテ、所謂郷中先生トカ云フヘキ粗暴
 連ナリシト云フ、其輩攘夷論ト云フ程ノ氣力アルモノニモ
 アラス、通例ノ文盲武断連ナリ、如此暴業ノ次第 聞召サ
 レ、御憤激且御歎息ノ余リニ這ノ御親書ヲ以テ将来ヲ訓誡
 セラレタル者ナリ、御家老中ニハ少年輩又ハ煽動者ノ姓名
 モ探知シ、至当ノ所刑ヲ伺ヒシニ、 仰ニ素ヨリ可罪者ナ
 レトモ、其心中ニ於テハ悪心アルニ非ラス、全ク至愚ト血
 氣ニ出タルモノナレハ、此回迄ハ訓誡シ後日ヲ謹マシムヘ
 シ、万一此後ケ様ノ所為アラハ悪心トモ云フヘキナレトモ、
 今回ハ罪スルコト勿レトノ御言ナリシト、最トアリカタキ

御言ナリキ、茲ヲ以テ家老中ハ這ノ御親書ニ添書シテ、一
 般ニ拝読セシメタリ、少年輩ハ素ヨリ煽動者ハ御親書ヲ拜
 見シテ驚縮悔悟、声ヲ吞ンテ所刑ヲ俟チタリシニ、豈料ラ
 シ、寛大ノ 御言ヲ聞ヒテ感銘敬服セリ、而シテ戊午五月重
 テ渡来ノ節ハ格別ニ謹慎セシ故、御満足御褒詞ヲ下サレタ
 リ、同月十八日ヲ以テ島津左衛門ヨリ布達セリ、○當時一
 般ノ風習ニ夷国人ト云ヘハ何トナク憎ミ、悉ク覬覦掠奪ノ
 禍心アル者ト唱ヘ、或ハ夷人ト謂ヘハ禽獸視シタリ、畢竟
 彼ノ情態ヲ弁識セサル蒙愚ノ然ラシムルニ因レル者ナリ、
 御親書中山川番所ヘ休息致候処、前ノ濱ヘ通行ノ蘭人冠リ
 ヲ取り敬シテ罷通り云々、指宿御湯治中山川港ヘ御越シ、幕
 役又ハ蘭人ヘモ 御対顔ノ折、水夫等迄モ礼式シタルヲ斯
 ク記サレタル者ナリ（大河平源太左衛門番所詰横目役ニテ
 親シク其形況ヲ実見シタル親話ナリ）、亦兼テ郷中ノ申合
 等如何相心得候哉云々、郷中トハ御城下上下十八九ニ区分
 シ、其一区ヲ郷中ト通唱ス（小番・新番ノ御小姓与三士ノ団
 体ナリ）、七八歳ヨリ二十三歳乃至二十四五歳頃迄文武
 ノ修練或ハ礼義廉恥ヲ訓育スル交際ヲ郷中ノ交リト唱フ、
 各郷ノ規則大同小異ナリ、此規則御知政進御覽アリシ故、
 通曉セラレタリ、○郷中ノ交際ヲ初メタルハ安永・天明ノ

頃ナリシト（古老ノ説）、交際ノ要目ハ互ニ文武ヲ研磨シ、礼義廉恥ヲ督責シ、教育上ニ於テ良法ナルカ如シト雖トモ、種々ノ弊ヲ生シ名実相協ハサルコト多シ、第一ニハ一区内ノ交際ニ止リ喧嘩争論ノ基トナリ、或ハ狹隘固陋ノ媒トモ謂フヘシ、而シテ戊辰ノ役前後各区学校ヲ建設セラレシニ至リテ墜絶、遂ニ今時ノ形勢ニ変シタリ、○凡下ノ混雜云々（凡下トハ農工商ノ三民ヲ云フ）、○惡事申進メ云々ハ則チ年齢ノ若ク煽動セシコトヲ指シテノ御文意ナリ、元來少年ノ輩ハ一種ノ惡風アリ、粗暴ヲ以テ英トシ、雄トシ、君子ノ強ナルハ却テ蔑視スルノ習風ナルヲ指サレタリ、○和蘭人ハ所謂「ハントウエーン」等ノ輩ニテ、専ラ海岸守備ノ要件神瀬砲台其他攻守ノ法御質問見込言上スヘキ旨懇命ヲ下サレタル際ニ、如此粗暴無礼ノ挙動ヲナシタルカ故、御立腹アリシハ至当ノ事ナルニ、所刑セラレズ訓誡ニ止メ玉ヒシハ、其至愚昧ノ情ヲ憫亮セラレタル寛大至仁ノ御措置ト謂フベシ、而シテ安政五年戊午五月（十三日カ）日許ナラス、一説十五日）重テ同船前ノ濱ヘ渡來、上陸ヲ許サレ、磯御邸ヘ被召寄、集成館其他拜見、或ハ大小砲製造等種々質問ヲ命セラレ、後チ望嶽樓ニ於テ饗宴ヲ賜ハリタリ、其接待ニハ御家老新納駿河・若年寄島津登等ノ数名ニテ、幕役又ハ

和蘭人モ御待遇ノ厚ニ感シタリト云フ、此回ハ以前ニ引替ヘ見物人ノ騷擾モナク嚴肅ナリシ故、後日左ノ褒詞ヲ下サレタリ、○此時公ハ御馬ニ召サレ、磯ノ別邸ニ臨マセ玉ヒ、幕吏及ヒ和蘭人ヲモ召サル、ノ御催ナリシ、公御通路新橋ノ広場ニ前刻ヨリ幕吏ト和蘭人トハ上陸扣居、公ノ鹵簿後ニ随テ磯邸ニ入り、御庭内望嶽樓ニ入ラシメ、程ナク公御対顔、種々御会釈或ハ御饗応アリ、此時陪席ニハ久光公ヲ初メ固老新納駿河、若年寄島津登及ヒ御側役豎山武兵衛、御小納戸山田壯右衛門・井上庄太郎、侍医坪井芳洲等ノ輩ナリシト、其間ニ集成館内ヲモ巡視、館員ヲシテ製造其他ノコトヲ質問セシメ玉ヘリ、

此節公義蒸汽船前ノ濱ヘ廻船ニ付、先達テ御書取ヲ以テ被 仰出候御沙汰之趣、諸士一統屹ト相守、別テ御満足被思召上候、就テハ此度ニ限り候儀ニ無之、平日之行儀第一之事ニ候間、尚以テ文武ヲ相励ミ、御趣意ヲ貫キ候様御沙汰被為 在、誠以難有次第ニ候条、一統謹テ奉承知、弥以テ御趣意相守候様可心掛候、此旨向々ヘ不洩様早々可致通達候、

五月十八日

左 衛 門

一 汽船觀光丸山川港ニ来ル、齋彬公臨覽始末

(勝義邦紀事鈔)

安政五年、余和蘭海軍教師ノ許可ヲ得テ、遠洋ニ航シ演操ヲ聴サル、此年九州ヲ巡航シ、薩州山川港ニ入ル、時ニ侯同温泉ニ浴ス、余ノ至ルヲ聞キ、単騎来接、其喜色アリ、懇切優渥、余其知遇ノ辱サニ感ス、又再ヒ鹿兒島ニ到ルヲ約ス、侯曰、自今後大ニ国事ニ関係アルモノハ、書翰ヲ以テ足下ト談セム、他人ヲシテシラシムルナカレ、足下ノ為ニ猜忌ヲ避ク也ト、嗣後屢手書ヲ辱ス、要皆国家ノ大事其世変ヲ察シ、時勢ヲ審ニスルモノ、旁其本藩ノ守衛臣属ノ举措懇々切々示教益厚シ、鹿兒島港ノ砲台得失兵制ノ利害ノ如キ、是ヲ蘭師ニ問ヒ侯ニ告ク、侯是ヲ納レ、其規画以テ参考ニ備フ、侯天質温和、容貌整秀、臨テ親ムヘク、其威望凜乎犯スヘカラス、度量遠大無執一ノ見、殆ト一世ヲ籠罩スルノ概アリ、方今ヲ願往事ヲ追想スレハ、鹿兒島県士英才輩出スルモノ、此侯ノ薰陶培養ノ致ス所、豈凡情ヲ以テ忖度シ易カラムヤ、惜天其歳ヲ不仮、其偉蹟半途ニシテ廃弛ス、可謂 皇国ノ一大不幸也、

安政五年、余蒸汽威臨艦ヲ航シテ再鹿兒島ニ到ル、是

国主齋彬ノ内約有ルヲ以テナリ、公直ニ艦内ニ来ラレ

余ニ対シテ曰ク、弊藩ニテ大祿ヲ食ム者凡廿数家、大

低世間ニ出サルナリ、障無キカ如クハ悉ク艦内ニ呼ビ

一見其識ヲ博メシメム如何ト、余甚可トス、爰ニ到テ

陸統艦内ニ来ル、公マタ其中一員ヲ余ニ示シテ云、是

島津周防(久光)ト称スル者、実ハ我カ弟也、彼若年ヨリ学ヲ

好ム、到于今ハ博聞強記我カ及ハサル所、亦其志操方

正敵格是モマタ我ニ勝レリト、談笑和易国主ノ威敵ヲ

以テ忘レタル如ク、歛心其面上ニ溢ル、和蘭教師等大

ニ其懇篤意外ニ出ルヲ歛賞シ、敬服シテ措カス、悉ク

艦内一見ヲ終ヘタリ、公マタ上陸、馬上ヲ以テ教師已

下ヲ率ヒ、磯ノ別邸ニ到リ、壮士ノ銃隊操練及ヒ造ル

所ノ器械雛形ヲ示シ、其可否ヲ問ハシム、其中宴ヲ張

リ逍遙散步終日ニ及フ、嗣後公近習密事ヲ命スル甲河

三郎(江夏十郎ノ誤)ヲ出崎セシメ、余ニ蒸汽船ノ種類

且其新造之年月・代価、其他大炮新式等ノ事ヲ内密和

蘭教師ニ問ハシメ、新造注文ノ拳アラムトス、是等ノ

質問緒ニ附クノ後表向申立其乞ニ及ハムトナリ、是ヨ

リ後数日甲河氏来訪、面色死者ノ如ク大息永敷告テ云、
 鹿兒島ヨリ急報昨夜到レリ、我公急疾危篤且タニアリ
 ト、再報今明両日ニアラム、若シ不幸ニシテ公世ヲ去
 ラハ百事瓦解、大志何レノ日欽達セム哉、嗚呼天ナル
 哉ト、余モマタ此告ヲ聞テ慨歎数刻、余一伝習生ヲ以
 テ凶ラスモ公カ殊遇ヲ辱クシ、無包藏邦家ノ安危武備
 ノ緊要ヲ談セラレ、大ニ其示教ヲ蒙レリ、之ヲ思ヘハ
 心肝摧破スルカコトシ、後訃音ニ接スルニ及ヒ慨然思
 ヘラク、今哉公世ヲ去ル、其区画遠謀邦家ノ為ニ心思
 ヲ尽サレシモノ一朝水泡ニ属セム欤、余幸ニシテ島津
 周防君ヲ知ル、終ニ一書ヲ贈リ肺腑ヲ吐露シ、希クハ君
 カ力ヲ以テ先公ノ区画ヲ維持更張アラレムコトヲト、
 勸告ハ其後数月ニシテ君返翰ヲ投セラル、此翰即チ是
 ナリ(同行人名重立タルハ木村攝津守舟・勝鱗太郎舟・海松本
 良順・澤太郎左衛門・肥田濱五郎・赤松大三郎良則・小笠原堅藏
 等ノ人々ナリシト云フ)

明治二十年十二月友實吉井君弊舎ヲ訪ハル、前左府
 公薨逝且昔年ノ時事ヲ話シ益哀悼ス、談偶公ノ返翰
 今ニ蔵スルノ一事ニ及フ、君一見ヲ乞フ、旧篋中ヲ

探リ、返翰且当時ノ転末附記数紙ヲ得タリ、捧読一
 過、今又後ニ一言ヲ記ス、

賢達ノ心裏ヲ知ル者ハ唯賢達而已、三十数年前順聖公
 ノ一言、公ヲ謂テ博聞強記又方正嚴格ト、此一言左府
 公ノ終身ヲ明察シ尽セリ、今ニシテ熟慮スルニ一糸ヲ
 差ヘス、豈他人ノ称誉千万言ヲ累ハスニ足ラムヤ、

勝 安芳誌

一二 水軍兵士創設及ヒ人名

御切米四石宛(切米トハ一家永世ニ給与ノ通唱)

小番

福島清兵衛

島津壬生組

御小姓与

森瀧右衛門

外ニ数十名、略ス

右水軍兵家部被仰付、家格ノ儀ハ是迄ノ通ニテ、右之
 通代々御切米被成下候、

一御切米四石宛

小番

藤八郎三男

平田新次郎

外數十名、略ス

右御小姓組へ家部立、水軍兵士被仰付、右之通代々御切米被成下候、

一御切米四石宛

島津壬生組

御小姓与

平右衛門二男

伊藤相左衛門

外數十名、略ス

右水軍兵士御小姓与家部立被仰付、右之通代々御切米被成下候、

右之通被仰付候条、諸帳面等如何可被申渡旨、駿河

殿御差函ニテ候、以上、

安政五年午五月廿六日

川上右近印

以上物計式百名、從來御船手付士ノ例ニ因リ、家禄現米四石ヲ給シ、別ニ給分旅費仕給ノ制度ナリキ、之ヲ水軍創設

ノ嚆矢トス(繪人名逸ス)

一三 齊彬公伊達宗城公ニ与ル御書讀

〔包紙ハ書〕
一遠江守様貴□ 薩摩守」

小暑之候御座候処、弥御安康恐寿之至奉存候、然其其御地垂奴之事、色々御建白之事と奉存候、

叔慮も恐入御尤ニは御座候得共、後來必勝之見込無御座候間、乍残念仮約条之方ニ申上候、草案越前江遣候間、御披見可被下候、福井御差留誠ニ大悦之事ニ御座候、仮約条御取結之上、是迄之如く姑息之事にては、

夫迄之事ニ御座候間、折角御建議第一と奉存候、扱亦尾州・阿州案外之所存、人欲無限事、実ニ可歎事ニ御座候、外寇よりも可懼事にて、少しも早く西城御治定專一と奉存候、天下之為被尺御精力候様奉存候、本印御不承知之事岡部江

上意之儀、御内心難量存候間、御用心第一と奉存候、大奥様子相分候ハ、又々可申上候、

一崎陽江も亜船参り候由、未々細事は存知不申候、

一蒸気船木村圖書乗組候て、又々参り申候、有益は不少候得共、度々は困り候間、最早当年は不参様ニと相頼

置申候、城下之海岸台場等之義は、委しく承り置申候、

一唐国之義、当正月以来又々賊勢盛ニ相成候由琉人申出候、廣東も英人と和約ニ相成候と申事ながら、細事は分り兼申候、又々六百万両差出候哉之風聞之段申出候、英船二艘唐方江奪取り候と申風聞も有之よし、細事分り兼申候、福省辺殊之外米高直、諸事不通用之様子ニ御座候、可恐事ニ御座候、

一琉人も追々上国仕候、当年は雨多く、鬱々敷事ニ御座候、十八日より今廿八日迄降続申候、先は要用旁可申上如斯ニ御座候、恐惶謹言、

五月廿八日

齊彬拜

天下仰望藍山賢公閣下

(伊達宗候雅名)

猶々、御自愛專一奉存候、甚々略義恐入候得共、暑中御安否伺度奉存候、

土州之義、其後如何ニ御座候哉、伺度奉存候、以上、

(宇和島伊達事務所所蔵史料にて校訂)

〔別紙〕

書添申上候、閣老之様子は如何之事ニて御座候哉、毎々御逢も有之候事と奉存候、昨年之様子とは万事相替候と奉存候間、様子内々御知せ可被下候、堀田長くは如何と存候、是又相伺度候、変化無極世態ニて可恐事

ニ御座候、猶後便可申上候、謹言、

五月廿八日

書添

(宇和島伊達事務所所蔵史料にて補足)

一四 齊彬公八重桜ノ御歌ニ付近衛家々人六條

某ノ譚

近衛家々人六條某ノ話ニ、齊彬公ノ「八重桜」ノ御歌ニ付、去日一寸ノ御話ニ八重桜トハ御菓子ノ名トモ聞ユ、乃チ忠瀨公ヨリ御菓子ヲ賜ハリシニ由リ、此御歌ヲ詠シテ御贈ニ成ラセラレタルナラントモ云ヒ、又ハ現ニ鹿兒島御城跡、或ハ現磯御邸内ニ大和奈良種ノ桜木植付アルモアリ、又正シク記録ニモ記セシハ高尾ノ紅葉木ヲ御送りニナリテ、旧城跡ハ勿論谷山郷慈眼寺ト云ヘル寺刹内ニモ植付ケラレ、今現ニ繁茂セシモアレハ、之ト同シク桜ノ生木ヲ御贈リ給ヒシニハアラスヤトノ伝モアリ、旁不判然ナレハ何カ御家ニ御伝ハナキヤトノ御尋ニヨリ、去日忠瀨老公ニ御歌ヲ詠シテ御心覚ハ在ラセラレサルヤト伺ヒシニ、老公ハ只今御衰耄ニテ確ト御記憶モ在ラセラレサルモ、曾テ八重桜ト

名付ケタル堅菓子ノ一種アリ、老公

先帝ヨリ拝領在ラセラレタルコトアリテ、之ヲ齋彬公ニ御贈ニナラセラレタルコトハ、確ニ御記憶アルトノコトナリシ故ニ、多分右ノ御菓子ヲ御贈ノ際ニ御詠ジアリテ御差上ケニナリシナランカトモ思フカ、又奈良云々トアレハ、或ハ生木ノ事ナリシヤモ知レス、楓木ヲ御贈付ノ例モアレハ、桜木モ贈リシコトモアルヤニ覺ユトノ御話ナリ、思フニ多分生木ノ事ナルヤモ知リ難シ、尚ホ当時ノ御記憶日記類未タ京都ニ預ケ置クモノモ多ケレハ、彼地ニ申送リテ調ヲ託シ置キヌ、分リ次第ニ申上ケントノ物語ナリキ、

明治二十九年一月二十五日、星岡茶寮公爵支会席上
ニ於テ物語ヲ記シヌ、

寺師宗徳

又六條某ノ知人ニテ京都住居ノ者、齋彬公ノ御歌ヲ所持セリト、左ハ其写ナリトテ示サル、

齋彬公御詠

花

雲井より野山をかけて色も香も

さかりのとけき花の白妙

消やらぬ雪とや見まし吉野山

さきものこらぬ花のさかりは

郭公

しのひこし比は過ぬと郭公

なく音ひまなき五月雨の空

月

幾千里みかく光もひときにはに

名にあふ秋と月や澄むらむ

天津空雲ものこらぬ秋かせに

ひとりみちたる月のさやけさ

雪

松竹のけちめもみえすつむ雪は

としゆたかなる光とそみる

幾重にかひかり重てつもるらむ

きみかみそのゝ雪の白妙

恋

もの思ふ袖のけしきをとひ顔に

またふりつもる夜半の村雨

一すちに猶や頼まむひたち帯の

かたとはかりの契なりとも

以上九首ノ短尺ハ、明治二十八年八月近衛家々人六條某ヨリ御貴受ケ、磯島津家ノ家蔵ヲナセリ、

一五 齊彬公嘉永六年癸亥ノ冬封内御巡見ノ前

頃訓令〔嘉永六年十一月〕

○この文書は、「鹿兒島県史料 齊彬公史料」第一巻の第四九〇号文書〔嘉永六年十一月島津斉彬諭達書〕と同文重複により略し、末部の原編者市来四郎の注記のみを掲げる

以上、嘉永六年ノ部、又ハ大河平孫八郎カ家記代々之守等ニ詳記ス、

一六 豎山武兵衛ヘ与フ御書〔年代不明〕

島ヒヨ鳥之儀

宰相様仰ニテ琉球ヘ度々御注文有之候ヘトモ、一度モ不参、然ル処長崎ヘハ近年ハ度々持越候ニ付、御注文相成候処、不残

公辺ニ御用相成、御取入不相叶、右ノ通長崎ヘ唐船ヨリ持渡、琉球ヨリ不相渡ハ、形状并名不相分故ト存、此度長崎ヘ申遣唐人ヘ尋候処、〔鴨カ〕縞鶴ノ儀ハ、元来蛮国ヨリ持渡、専ラ山西・四川・福建之地畜ヒ候ヲ求メ持渡候ヨリ、唐国ニテハ寒雀ト唱、又福建ノ土語ニテ

ワンカーデン」ト唱候ヨシ唐人申出候間、別紙画図相添差遣候条、於福建相尋候ハ、無相違可有之候間、此段琉役ヘ可申渡、多年 宰相様御好ミノ品故、是故三〔非カ〕四羽持渡候様可申付事、

一 御内々

公辺ヨリ御調文ノ唐織有之候、未タ見本出来兼候間、来春ノ下リ船ヨリ見本切可遣候間、不問違様御注文可申遣候、

一 唐本類モ来年ノ船ヨリ追々御注文ニ相成候間、取入相調候様可致事、

一 西国米ト砂糖外ヘ遣候間、少シ計リ見合拾ヘ可渡、委細拾承知ニテ御座候、

一 銅之事場所何ト申処カ、
一 未開之山野ニテ手ヲ付ケ候得ハ、田地ニ可相成処之有無、

一 砂糖ノ場并ニ麦等作場沢山有之候哉、

一 人数島ニ合テ多キカ少キカ、

一 其外未タ可開産物等有之哉之事、

〔石室綴稿中〕齊彬公行状、「齊彬公行復」文書〔鹿兒島県立図書館所蔵〕にて校訂

一七 山田壯右衛門へ与フ御書〔年代不明〕

〔頭註〕鹿兒島ヨリニテ、嘉永六年九月カ安政四年九月カナルベシ
愈無事珍重ニ候、此方相替候事無之候、当月廿一日ニ

ハ御日待有之、一夜百首誦申候、清書出来候ハ、可遣候間、北村へ不残右ノ儀申聞、見セ候テ直シ可遣候、

一此度干着・アヂ・小鯛・サバ右ノ通り相廻候条、例年

遣候新之丞・榮格・久庵・宗耕又ハ拾之方ニテ遣候、

我へモ所々御座候間、拾へモ申置候テ方々へ遣候様可

致候、尤此度直ニ不遣候トモ、何ソ遣シ宜敷ト存候節

ニ、御国ヨリ廻リ候趣ニテ可遣候、尤拾へモ委細申遣

置候間、申出候ハ、申談シ可相渡候、小鯛ノ分ハ磯ノ

前ニテ釣ニテ取り候品ニ御座候、南部へ此度遣候品モ

釣候テ取りシ看ユへ、其段可申候、

一南部何ソ望ミ候品モ御座候ハ、注文御座候様可申候、

一番ト書付御座候モ、箱物ノ品ハ黒ノコロフク一疋ニ

御座候、是ハ拾へ不見立様ニ、ヨキ都合ノ節相渡候様

可致候、矢市郎ヨリハ只御藏へ格護ト申遣候、

一其外之品々不残藏へ入置、帳面ニイタシ、何月届候ト

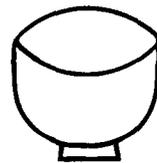
申候事書付可置候、色々ノ品ニ御座候、

一鍋島へハ此度別段ニ返事不遣候、

一水戸殿へハ返事計遣候、

一勘右衛門モ申付候テモ、又ハ硝子屋刀メニ申付候トモ
イタシ、切子ノ猪口
〔西本亀次郎カ〕
〔カカ〕

此位ノ品十ヲ揃ナリ、



早便ヨリ可差遣候、先ハ用事迄早々申入候也、

菊月廿九日

壯右衛門へ

一八 全上〔年代不明〕

其方今日市兵衛町へ御用ト申候テ御イトマイタシ、霞
〔八戸藩主、南部信順〕
〔大福〕

へ参リ候テ、兼テノ一条弥今日ニ御座候ヤ、鳥渡何度
〔岡藩主、黒田齊徳〕
〔大福〕

旨可申候、先刻奥ヨリ手紙上ケ候処、御留守トノ事カ
〔老中阿部正弘〕
〔大福〕

夫辰ノ口へ参候事ト存候、夫ナラ最早御帰宅モ可有、

夫トモ又外へ廻勤モ難計候間、若廻勤先キ委敷相知レ

居候ハ、夫へ参リテ承リ候様ニ可致候テ、愈今日ト

ノ事ニ候ハ、少シモ早キカタヨロシク、明日ハ法事

ユへ宜敷ト可申候、大カタ最早帰宅トハ存候へトモ、

若廻勤先ニ候ハ、兼テノ一条今日ニ候ヤト計リ書付

ニテ伺候テ宜敷御座候、先ハ早々申入候也、

一九 全上〔年代不明〕

弥清福勤勉カ歡ニ候、扱今朝久世へ罷出、過日御噂之芝小ノ島ヨリ局迄程能ク被申出候、島津左衛門トカ島難有狩候、又近衛家之御手本一条咄シ候処、何モ差支無之儀ト申候、浪人ヨリ咄シ出候処、只今是レハ六ヶ敷ト存シ申候、乍然同列中へ咄合、小石川へ内分当リ廿二日朝迄自分へ返答致候ト被申候、夫ヨリ大名小路ヨリ汐留奥平へ参リ、用人へ迄咄シ等致候ハ、九ツ半過帰宅致候、先都合申入候、前文次第兩人へ申通可給、明日迄余ハ申入候、以上、

二月廿日

尚以、外用主呼寄セ候間、要へ同人以下へ今朝都合申置候、其方出立後岩元太右衛門出候へトモ、何用方大宮主ニ候ハ、芝シモ間敷、尤不肖自分ニ御座候故、時々罷出候ト申置、委細承知ト申候、以上、
用向申入

壯右衛門へ

幾島

右近衛殿ヨリ御附被仰付候事ニテ、老女被仰付候ヤ、

若年寄被仰付候ヤ、未タ治定不仕候、其内京地ヨリ申参次第可申上候、

關野

先ツ若年寄・御中ロフ頭ノ内申付候テ、御供可申付ト存候、

福

右ハ御中老頭申付、御供可申付哉ト存候、

キ〔ウカ〕
ノ

右御中ロフ可申付、此モノ御櫛番モイタシ申候、

利〔之カ〕
元

右御中ロフ申付、御供可申付哉ト存候、

先比モ内々申上置候通、關野・福儀ハ出生ノ比ヨリ罷在候モノニテ、君様ニモ是非被召連度候様子、シカシ一体田舎モノニモ有之、御役ニハ立不申事ト存候へトモ、前文ノ訳ニハ無抛申上候、尤加入同様ト思召候テ、御側ニ被差置候様仕度存候事、

二〇 早川五郎兵衛へ与フ御書〔年代不明〕

未不同之時候、先以無障清福勤居候事、目出度存申候、此間参リ愈大慶致候、其砌内々咄シ候今里之儀、翌日

宮寺直記山崎へ遣、大崎之処今以水野土佐ヨリ返答無之候哉、只今迄延候間多分断ト存申候、左候テ無理ニ外方へ触レ、望人尋候テハ甚不宜候、如何ト申遣候へハ、山崎答ニ折角ト骨折候へトモ、水野土佐断ニ候、

尚角之丞委敷頼置候ト申候由、直記申候ニハ、トテモ急々望人有之間敷、可相成ハ当年今里モ其候、大崎モ同様、明年之自分着候上今里引請申度、其考ニ頼候所候ト申候へハ承知仕候、其通取計可申ト申聞、大キニ安心致候節咄シ候通り、当年マタ両方餌入レ候テハ大迷惑、其外入用モ不少察可給候、明年着候上考、今里ハ引キ請申度存居候、其元前文次第舍居、若芝大君御咄シ被為候ハ、程能ク申上候様頼入候、跡ニテ直記・山崎へ申候ニハ為念自分事申候様申付候、若今里御土藏澁谷へ引キ候存寄候テ、万一崩シ候テハ不宜、此方入用ハ無之候へトモ、屋敷改候知レ候テハ、此比誠ニ六ヶ敷折柄不宜ト申付候へハ畏リ申候、此程今里御向屋敷御鉄砲場澁谷へ引キ候ニ付、芝御留主居見分申立屋敷改参リ、彼是申候屋敷改候へハ、断無之崩シ候へハ濟候事ト存候ナト、例之山崎不法申、直記モ婦アキレ居候、此比余程之間澁谷へ参リヨシト咄シ候旨、少

シ先日ノ平田直之丞取合、コ、テ此節扣候哉トモ存候、何レニ直ニ大事出可申困リ候人ニ有之候、此段内々都合申入候、以上、

四月八日

尚以其内又有候ハ、万々咄シ可申候、以上、

内用向

二一 山崎拾へ与フ御書(年代不明)

此書面伊達へ可遣候、尤此度外へハドコモ不遣内用ニテ、此間地方(他カ)ニテ存候テハアシク候間、其方へ向ケ遣候間、着ノウヘ取仕立候テ伊達へ可遣候、此寒暖計モ遣候間、一同ニ伊達へ遣候様可致候、以上、

一 スミレ班(篋)入一品、白一品手ニ入候、外ニ少々ツ、ノ紋リ二三種手ニ入申候、アサミノ班・トンホノ班・ミフマタノ班・萩ノ班手ニ入申候、

一 着前ニ色々道具類出シ置ニ不及、ツクヘト硯箱計リ、其外ハ御道具方入用モノ計リ先ニ大蔵へ入置可申候、着ノウヘニ追々出シ可申ト猶後便可申入候也、

廿九日

二三 全上〔年代不明〕

一下曾根（釜三郎）へ三十六ホント之ホーキツスル之筒台

并ニ車寸法

六ホント

野戦之筒

十二ホント

筒台之寸法早クシラセ候様ニ頼ミ可申、左候早々下（字脱カ）

シ可申候、

何ソ品物見合セ同人へ可遣候、以上、

二三 早川五郎兵衛へ与フ御書〔年代不明〕

先比以壯右衛門（山田）御内々ニ差出ニ相成候蘭書御不

用御申請之儀、御模様相伺候様被仰付、且又別紙之書

（兼所調所カ）

目此節調所へ五部程参居候ヨシ、右ハ此節之御船御シ

ラヘニ要用ノ御書物ニ御座候間、外御申請ハ延ヒ候共、

右之御書物何卒早メニ御申請相調候様、御内々御願被

成候事、

プラクチカールゼーハールトキユンデ

全部 二冊

但

船ノ書、千八百四十二年版

二四 全上〔年代不明〕

明朝辰（阿部伊勢守）へ参候ハ、余リ久々逢モ不致、

当月ハ客来、其外色々取込候ナカラ、来月三日五日比

ニ御逢モイタシ度候トノ事可申置候、以上、

一弥智鏡院方ニテ女中請合候但、其処ヲ以テ可取計候、

直ニ宿へ申聞候テモ宜敷候事、

二五 全上〔年代不明〕

日講四書解義二十六卷

康熙十六年大学士庫勤納等奉勅編

北符見聞録一卷

宋曹勛撰

荒政叢書十卷

清愈森編所輯

康濟録六卷

清倪國瓊撰

御纂朱子全書六十六卷

康熙五十二年大学士李光撰

二六 松平薩摩守様御書写(越前家所蔵)

別紙申上候、巫奴之儀扱々可惡事ニ御座候、定テ御建白モ御座候ト奉存候、小子ニハ仮条約御取結ヒノ外御良策有間敷段申上候、此上之処ハ何卒

公武御混雜無之様奉存候間、近衛家へ右之段内々申上候、

叙慮モ御尤モ候ヘトモ、当時之光景、異人之事情御通

知無之故ト奉存候、扱閣中モ色々変化之事、大老モ定〔并伊直説〕

テ良考可有之、貴君ニモ折角天下静謐之儀御尽力第一

ト奉存候、其御地之事細々拝承仕度候、

一唐国モ当正中ヨリ又々賊勢盛ニ相成候由、誠ニ可怖

世態ニ御座候、

一崎陽へ巫船二艘參居候、定テ伝習御家来ヨリ申上候事

ト奉存候、先日ハ蒸汽船城下へ參り候、御家来モ乗組〔木村喜毅〕

罷在候、大混雜ニ御座候、以後ハ成丈ケ不參様圖書へ

頓置申候、

一先日ヨリ呈書可仕処ニ、湯治以来色々繁用ニテ、乍存

延引恐入奉存候、猶後便万々申上候、頓首、

六月十一日

追テ、御參府モ無御滞被為濟候事ト奉存候、御參府

ノ上ハ万事御尽力專一ニ奉存候、以上、

二七 参考 勝安芳阿部正弘侯論

天保ノ末、水戸烈公幕府ノ譴ヲ獲テ屏居セラレシヤ、

正弘水野越州ニ襲キテ老中ノ首座トナリ、復烈公ヲ引〔忠邦、浜松藩主〕

出シ、其廟議ニ參セシメタリ、当時亜米利加船初メテ

来リ、外交ノ事漸ク燒眉ノ急トナリシヨリ、一意外外交

政略ニ注目シ、要路ニ人材ヲ登用シ、殊ニ薩侯齊彬ト

篤ク交リ、其他ノ諸侯ヲシテ不平ナカラシメ、公武ノ

合体ヲ破ラサルカ如キ、薩侯冥々ノ力亦大ナリト謂フ〔以下ママ、阿部正弘安政四年六月十七日死去、島津齊

ヘシ、幾ホトナク薩侯没シ、時事日々ニ危シ、是ニ於〔杉岡五年七月十五日死去〕

テ正弘外強援ヲ失ヒ、遂ニ其志ヲ伸スルヲ得ス、昼夜

醇酒ヲ飲ミテ其生命ヲ促シタリ、歿スルニ先タチ、堀

田正陸ヲ拳ケテ己レニ代リ委スルニ機要ヲ以テスレト

モ、復タ如何トモスル不能、其ノ生前ノ苦心想フヘキ

ナリ、正弘閣老ノ首座ニ在リテ励精治ヲ図ル、会米將

ペルリ軍艦ヲ率ヒ浦賀ニ来リ、人心洶々、天下騒然、

国是ノ方向漠トシテ決ス可ラス、此難衝ニ当リテ操縱

宜キニ適ヒ、大過ナキヲ致セシハ、職トシテ其ノ度量

濶大・識見精透ナルニ由ラスンハアラス、特ニ幕吏ノ

最モ有名有力ナル者ヲ登庸シタルカ如キハ、亦以テ正弘ノ人ト為リヲトスルニ足ル、其登用セラレタル幕吏ハ下ノ如シ、

遠藤 但馬 守胤統
川路 左衛門 尉聖謨
岩 瀬 修 理忠震
平岡 丹波 守道弘
水野 筑後 守忠徳
大久保 右近將監忠寛
筒井 紀伊 守政憲
戸田 伊豆 守氏榮
岡部 駿河 守長常
遠山 左衛門 尉景元
戸川 中務少輔安鎮
鵜殿 十郎 左衛門長徳
跡部 甲斐 守良弼
永井 玄蕃 頭尚志
江川 太郎 左衛門英龍
土岐 丹波 守頼旨
堀 織部 正利熙

松平河内守近直
竹内下野守保徳

是等ノ諸員皆要枢ノ地ニアリ、會計・大小監察・市尹等ノ職ヲ占メ、協力同心国事多端ノ際ニ処シ、応酬宜キヲ得タリ、後此諸員中ヨリ若干名ヲ択ミ、附スルニ海防掛ノ名ヲ以テシ、専ラ外交事務ヲ掌ラシム、正弘又銳意海防ノ術ヲ講ス、会蘭人火輪船一隻ヲ崎鼻ニ献ス、乃諸生ヲシテ、其人ニ就テ運用ノ方ヲ講セシム、我邦是ニ於テカ火船ノ用アリ、且ツ洋学校ヲ興シ、狄鞮ノ学ニ精通セル諸藩士ヲ挙ケテ其教授トナス、即チ箕作阮甫・杉田成卿・川本幸民等ノ諸子、其ノ最タリ、我邦洋学校アル、之ヲ以テ破天荒トナス、

二八 西郷隆盛カ先塋

鹿兒島旧南林寺ノ墓所、西郷カ墓地内ニ左ノ墓アリ、自覺院祖榮忠道居士嘉永五年壬子九月廿七マ西郷吉兵衛平隆盛ト記セリ、五輪ノ小塔ナリ、此レハ京都清水寺ノ僧月照カ水ニ投シタルトキ、一緒ニ投シタルヲ救テ隆盛ハ存ヘタレトモ、幕府ノ嫌疑ヲ憚リテ、同時ニ死シタル旨ヲ以テ届出、窃ニ指揮スル処アリテ、罪人ヲ

埋ミ墓ヲ建テタル者ナリ、而シテ隆盛ハ快氣ノ上大島ニ流シ、養料六石ヲ与ヘタリ、○月照カ墓ハ同所ヨリ西ノ方一町許ノ正西ノ方ニアリ、之モ五輪ノ小塔ナリ、無名ニテ諡号ノミアリ、傍ニアル石塔竈ニ誰人カノ歌ヲ彫シタリ、

二九 伊達公ノ御書翰

先年ペルリ渡来之際処置振、旧幕ヨリ三家始諸侯之意見垂問候、水戸烈公見込余リ手強ク、逆モ実践難出来、於閣老頗当惑、内々順聖君・春嶽君・愚老へ、右見込御書面今少々穩便ニ御認改被成候様周旋阿部ヨリ頼談有之、三人ヨリ調烈公陳情候処、終ニ三人ノ心付ヲ書入候様熟談整、協議之末御建白案ニ加筆シ、其通採用候、右ハ嘉永何年何月比ニテ、且烈公建白案ニ三人心付書入候写有之哉、取調分リ居候へハ教示之程致度、

三〇 九條殿下諫奏ノ譚(近衛家所藏書鈔)

去ル頃御目付岩瀬修理・大井重太郎兩人内意蒙リ、昼夜ノ差別ナク京都へ急キ、早速堀田備中守殿ニ対面シ、シカ／＼ノ様子ヲ巨細ニ通シ、奥老女村次(次ハ誤平、

糾ス)ヲ以テ九條殿へカクト申上ケレハ、大ヒニ驚キ、カ、ル一大事出来ノ上ハ片時モ打捨カタク、早々参内シ、身命ヲ投捨テ御諫奏申上、内辞蜂起ヲ静メント殿上へ伺候シケル、

主上龍顔ウルハシク、早朝ノ参内如何ナルヤト御尋、

九條殿謹テ奏聞シケルハ、此度外夷到来、關東征夷之職モアリナカラ、交通ノ信義ヲ結ヒ、仮条約ノ計ヒ方柔弱トハ申ナカラ、深慮有テノ事ナリ、多年太平ニ浴

シ、武備類廢シテ、戰鬪ノ氣力無之、容易ニ干戈ヲ動

カスノ時世人和ニアラス、マツ五六年武備ヲ訓練シ、

人心ヲ固メ、スミヤカニ

皇国ノ威ヲフルワントノ計義ナリ、然ルニ水戸齊昭時

機人和ヲシラス、副將軍ノ職ヲ以徒党ヲムスヒ、征夷

ノ旨

天朝ニ達シ、太平ヲ妨、人心ヲ惑乱シ、戰鬪ヲ好ムノ

族トイフヘシ、且

皇家ノ陪臣等彼ノ好意ニナシミ、

主上ヲタフラカシ、此儀ニカタンシ、

叔慮ヲ腦シ、不忠臣君前ヲ放レス、終ニハ内乱ノワサ

ワイヲ引出シ候事眼前ナリ、マツ時機人和ヲ計ラヒ征

夷ノ御沙汰然ルヘシト、理ヲ尽シテ諫入、

主上聞コシ召賜ヒ、居丈ケ高ニナツテ逆鱗マシ、九條殿ヲ官笏ヲモツテリウ、ト打タマヘハ(斯ル御笏動アルヘキニアラス)、是ハト局達オトロキ賜フ、

主上ナンジ關東ノ武威ヲ恐レテ、臣トシテ君ヲ弑シ、下トシテ上ヲシノクノ不義ハ、直ニ天兵ヲ以テ誅戮スルニ誰アツテ是ヲフセカンヤ、汝ニ於テ朕ヲ無道不義ニ引入ルノ心底ナルヤ、奇怪千万ナリトオフセ玉フ、九條殿猶モス、ミ寄り、涙ヲハラ、ト流シ、君ハ生来英明俊傑ニシテ、御孝心深ク君臣ノ道明ラカニシテ、開闢以來ノ

皇家ヲ汚カサ、ルノ

御勅慮、何共申上様ハ無御座候ヘトモ、今般水戸齊昭始メト、ウノカタ、ハ、我國ニ尽忠トハ申ナカラ、臣トシテ君ヲ毒殺シ、征夷ノ干戈ヲ動サント計リ、真ノ忠臣ニアラス、カヤウノ不義無道ヲモツテ人ヲ制セハ、第一

主上ノ不徳ニシテ、自然臣ノ君ヲ弑スルモノ蜂起シ、終ニハ内乱ノ災ヒ防ニ手ナシ、ヨク、君臣正義ノ道ヲ思召サハ、先其罪ヲ糺シ、武備調度ヲ設ケ、征夷ノ

御沙汰ニ及ヒ玉ヘト歎キ恐入申上候、

主上大ヒニ驚キ玉ヒ、水戸君ヲ弑スノ不正アルヤ、九條殿兼テ密書ノ連判并志賀金八郎隠宅自殺ノ遺書等、

叙覽ニソナヘケルニ、
主上ハマス、オトロキタマヘ、カ、ル不正ノ齊昭トハ知ラス、

神州ノ大忠臣ト思ヒケルカ、臣トシテ君ヲ弑スルノ大罪ヲモツテ人ヲ征スルノ武威アラシヤ、片時モ徒党ノ罪ヲシラヘ、征夷ノ人物ヲエラムヘシト深殿ヘ入玉ヒケリ、九條殿衣服ツクラヒ、シツ、下館アリケルニ、國家ノ奸賊シハラクト声懸ケ懐劍拔ハナシ、一人ノ女房九條殿ヲ目カケ切りカ、ル、コワ無礼者ナリト有合フ佩刀引拔テ、壇上ヘ切捨ル、狼藉モノアリト呼フ声ニ、殿中詰合ノメン、会集シテ、ヨク、見レハ局部屋ノ女中ナリ(全クノ構造説、肩先一刀ノ深手ニナヤミ、程ナク息ハ絶ニケリ、九條殿大ヒニオトロキ、カク逆臣殿内ニアルカラハ、寸刻モ油断ハナラス、
主上之

宸襟氣遣シト、即刻二條殿・一條殿・今出川殿其外諸公家衆官人集会シテ、

御宸殿ヲ警衛シ、^(所)諸司代本多美濃守ヲ以テ

御所ノ四面ヲ点檢サセ、用心堅固ニ守リケリ、カクテ九條殿ハ私館ヘ婦リ、密使ヲ以テ大津宿ニヒカヘアル堀田備中守ヲメシ寄、シカ／＼ノ子細ヲカタリ、此上ハ徒党ノ面々蟄居申付ルノ間、ソノ用意セヨト命シケレハ、備中守殿大ヒニ悦ヒ、密ニ九條殿ヲ守護シタリケリ、カクテ一味同心之旁^(輩平)一時ノ蟄居閉門被仰出、各々無念口惜トコフシヲ握リ居タリケル、九條殿ハ猶モ征夷延引ノ利害ヲ申上、殿内姦佞反間之者敵數穿鑿シ、無事太平ヲ祈ラント専ラ心ヲ碎キ玉ヒ、堀田備中守ハ一旦京地引払、其外諸役人ハ在京シテ専ラ皇居ヲ守リケリ、サテモ長橋局ハ水戸老公ニ親附シ、天朝之御 思召ニカナヒ、昼夜玉座ヲ放レズ此度ノ大儀ヲ御進メ申上、水戸老公ノ存意逐一ニ

叡聞ニ達シケルニ、

主上モタノモシク 思召、御^(大)太切之御宣旨ヲ下シ、征

夷之御沙汰一決ナリシカ、九條殿サヘ切テ諫言ヲ申上、一味同心之旁々閉門蟄居ニ及ヒ、追々ト吟味シケルニ、長橋局思ヒケルニ、必定災ヒノ来タルハ元ヨリ覺悟ト

イ、ナカラ、ムナシク犬死スモ残念ナリト歎息シケルヲ、腹心ノ女中九條殿ノ下館ヲ見スマシ、刃傷ニ及ケルハ女之非身ニテ、アヘナク即死シケルニ、マス／＼大罪ヲカサネ、今日ハ自殺シ、烈女之鏡ニモナント巨細ニシタ、メ書殘シ、閑室ヘ閉籠リ、スミヤカニ自殺シケリ、扱又禁裏御附都築駿河守ハ長橋局自殺ト聞シヨリ、兼テノ一味同心トハ殊更御綸旨之根介アルカラハ、如何ナル大罪ノ来ルモ計リカタクト、スミヤカニ切腹シケリ、其外追々ト一味同心之族死亡ニ及ヒ、ソノ騒動言語ニノヘカタシ、但シ蟄居閉門之人々別紙ニ有之候、

以上記ス処、當時關東方ノ者ノ筆ナルヤ言ヲ竣^(俟)タス、全ク構造説ナリ、後人惑フコト勿レ、

三一 参考 阿部正弘小伝(明治三十年ノ春調査其筋ヘ進達ノ写)

故徳川幕府閣老備後福山城主從四位下侍從阿部伊勢守正弘ハ、天保十四年癸卯閏九月、年二十五ニシテ奏者番兼寺社奉行ヨリ閣老ニ任シ、安政四年丁巳六月病卒迄在職十五年ノ久キニ亘リ、其任命ハ彼ノ改革ヲ以テ著名ナル

(軍部)

水野越州侯ノ免黜ニ際シ、幾クナラスシテ首座ニ昇リ、内政外事ノ別ナク参画措置セシ内ニモ、其最モ国事ニ大關係アルモノハ、嘉永癸丑米艦浦賀港ニ来ルヨリ寛永以来ノ政機ヲ一大変更セシコト、ナス、是ノ時ニ当リ開鎖ノ論上下各見ル所ヲ異ニシ、適従スル所ナシ、苟モ一タヒ措置ヲ誤ラハ一敗地ニ塗リ、復タ救フベカラサルノ際ニ於テ、偏セス、党セス、善ク衆議ヲ折シテ時宜ヲ計リ、以テ劇変ノ禍ヲ避ケ、国家ノ体面ヲ保チ、今日ノ文明ヲ開キタル創始ノ功ニ於テ決シテ没スヘカラス、然ルニ世或ハ怯懦佞媚優柔不断等ヲ以テ之ヲ排斥スルモノアリ、今ヤ一二ノ確証ニヨリ、当時ノ情勢ヲ察スルニ、鎖港攘夷ヲ主張スルモノハ、大抵皆時好ニ投シテ無責任ノ言ヲ放ツニ過キス、其実昌平恬嬉ノ余、兵備ノ薄キ十余万石ノ大名ニシテ、少シモ硝薬ノ貯ヘナク、警固ノ命ヲ受テ狼狽シ、彈薬兵器ノ供給ヲ商人ニ仰クノ有様ナリシハ、某侯ノ手記ニ見ヘタリ、苟モ彼ヲ知り我ヲ知ルモノ、無謀ノ戦端ヲ開クヲ慎ムモ当然ノ理ノミナラス、伊勢守カ開国主義ヲ執ルハ米艦渡来八年前弘化三年六月將軍家薩州侯父子齊興ヲ延見シテ琉球処分ヲ委任セラレシ日ニ定マルヤ明カナリ、其内論ニ曰ク、

琉球国へ異国船渡来之處、彼地ノ儀ハ素ヨリ其方一手ノ進退ニ委任ノ事故、此度ノ儀モ存寄一杯取計、尤国体ヲ不失、寛猛ノ処置勘弁ノ上、何レニモ後患無之様及熟慮取締向等機變ニ応シ取計可申事、

是レ伊勢守カ深ク薩州侯齊彬ノ言ヲ容レ、開港交易ノ時勢已ムヘカラサルヲ察シ、將軍ニ密白シテ、琉球手限り内交易ヲ許可シタルモノナリ、是ヨリ先キ薩州侯内使ヲ以テ伊勢守ヘ入説セシメシ其大意ニ、琉球ハ日清両屬ノ姿ニシテ、表ハ清国ニ屬シ、内実ハ日本ニ隸ス、故ニ日本一己ノ利害ヲ以テ和戦ヲ決シ難カラシ、若シ外夷予メ清国ノ允許ヲ得テ、通信貿易ヲ請フニ至ラハ、琉球王之ヲ拒ムヲ得サラン、然ル時ハ日清兩國隙ヲ生スルヤ必セリ、是レ国家ノ良計ニアラスト、夫レ琉球ハ極弱ノ国ニシテ、当時清国ハ英国ニ敗レテ講和ノ後トナス、彼レ若シ戦勝ノ威ニ乗シテ清国ニ迫リ、令ヲ琉球ニ下シテ交易ヲ開カシムレハ、清国琉球ト共ニ之ヲ拒ムヲ得ス、是ニ於テ日清交渉ノ紛議トナリ、英・佛・魯・米等ノ強国因テ其欲望ヲ逞クセントセハ、真ニ由々シキ大事ニシテ、其困難ハ

嘉永六年浦賀ノ応接ニ倍シ、且清国ハ一令ノ下方国ヲシテ、琉球ノ己カ隷屬タルヲ確認セシムルノ証ヲ得、寸兵ヲ用ヒスシテ其版圖ニ歸セシムルモ亦計ルヘカラス、豈ニ早ク之カ予防ヲナサ、ルヘケンヤ、此情勢ヲ予言セル薩州侯ノ入説ニ由リ、幕府ノ内議琉球手限り交易ヲ許スニ決シ、薩州侯父子ヘ右ノ諭旨アリシ所以ヲ察スヘキモノハ、弘化三年六月五日薩藩半田嘉藤治ヨリ同藩調所笑左衛門ヘ遣リタル左ノ書ニヨリテ明白ナリ、

下曾根金三郎殿御入来致面会候処、琉球国ヘ佛蘭西船来着ニ付、御取扱筋御老中阿部伊勢守様ヘ御内意書御差上相成候由之処、右御趣意至極御尤ノ訳柄ニテ、早速林大學頭殿・筒井紀伊守殿ヘ右御書付御下ケ相成、可致評議旨御達ニ付被取調候処、抑モ琉球国之儀ハ往古ヨリ此方様御領分ニテ、御手切り御取計有之候処、此度佛国ヨリ追々難題申立、内一ケ条ニテモ承引於無之ハ迎モ致帰帆間敷、一体琉球国ハ清国ノ封爵ヲ受ケ、旧式等取引候国柄ニ候ヘトモ、自然皇帝ノ命ヲ受候上ニテ商法可取組旨無体ニ申募リ候ヘハ、否難申訳柄ハ当然ノ事ニ候、就テハ琉球国ノ儀ハ、兼テ唐国通商御

免被仰付置候上ノ儀ニ候ヘハ、右へ被準琉球国手限りヲ以テ佛国ト通商取組相成候迎御差支ハ有之間敷候、併右一条ハ何分不容易訳柄ニ付、三奉行へ評議被仰付候方ト申趣ヲ以テ、林家被申談書面被致進達候処、三奉行ノ内ニハ佛国ト此御方様通商取組相成候ハ、別テ御利益ノ事ニ候、左候時ハ長崎表公辺御商法差障候杯ト申張リ候向モ有之候ヘトモ、万一琉球国ト佛国及戰爭候時ハ現在御国体ニモ相拘候儀不心付評議故、右ノ調ハ阿部様ニモ更ニ御取用無之御様子ト被相伺候、併シ表立テ公辺ヨリ佛国商法御免トハ被仰出間敷候ヘトモ、前条ノ御趣意ヲ以テ定テ阿部様ヨリ御内諭モ可有之候間、最早無御掛念、琉球国手限佛国ト商法御取組被成候テモ宜敷由、右ノ通商法御取組ノ上ハ、イキリス国杯ヨリモ同断ノ儀申立候ハ案中ト被察候ヘトモ、琉球国ハ小国故産物少ク手広ニ商法難相成趣ヲ以テ、佛国ヘ託シ置キ、佛国ヘイキリス国杯ハ厚ク爲申論候様御取計有之候方宜敷由、右御一条筒井殿ニハ御取扱之御方故、極密タリトモ難相洩儀ハ勿論ノ事ニ候ヘトモ、兼々下曾根金三郎殿ニハ、此御方様格別被蒙御懇命候ニ付、私限リニ右之趣極機密ニ可致内話旨、昨日

態々紀伊守殿宅へ金三郎殿被相招、極内話之由承届候間、御懇切之段厚ク挨拶申述置候、此段申上候、以上、

右ノ書中ニ定テ伊勢守様ヨリ御内諭モ可有之云々、果シテ事實ニ見ハレ、伊勢守更ニ薩州侯ヲ自邸ニ招キ、左ノ如ク訓諭セリ、

琉球国へ佛蘭西人共罷越候節、難題申掛候儀ニ付、取扱方心配被致候段、尤ノ儀ニ候ヘトモ、交易等ノ儀ハ従公辺難被及御沙汰筋ニ候、乍併琉球国ノ儀ハ其方領分トハ乍申、国地同様ニハ難取扱段ハ無余儀相聞、既ニ此度ノ一条モ其方存寄一杯ニ可取計旨被仰出モ有之儀ニ付、寛猛ノ処置、其時宜ニ応シ、後患無之様思慮之上取計可被申候事、

故ニ伊勢守ハ此時既ニ開国主義ヲ実行セシモノト云フヘシ、然レトモ我国情ニ於テ未タ遽カニ其所見ヲ公言スヘカラス、事秘密ニ属スルヲ以テ之ヲ知ルモノナク、独リ之ヲ推測セルモノハ水戸老公トナス、弘化三年十月朔日水戸老公ノ某へ与ヘラレタル書中ニ曰ク、

道路ノ説承リ申候へハ、去ル六月修理大夫発足以前伊

勢守宅へ呼ヒ達候由ニモ有之候処、如何様ノ達ニ有之候哉ハ不存候ヘトモ、万一ニモ防禦相成兼候節ハ、少シク交易ヲ濟セ候様ナド申事ニテハ、必ス其尾ニ取付候テ後ノ大患ト相成候半ト存候、云々、

此ノ水戸老公推測ハ、即チ伊勢守カ薩州侯ト内外相携提シ、通商貿易ヲ以テ富国強兵ヲ謀ルノ事實ニシテ、又其水戸老公ト時々意見ヲ異ニスル所以ノ証ナリ、故ニ米艦渡来ノ日ニ当リ、天下ノ大勢鎖攘論ニ傾キタルニモ拘ハラス、善ク物情ヲ鎮撫シテ破裂ニ至ラシメサリシハ、決シテ偶然ノ事ニアラス、蓋シ胸算夙ニ定マレハナリ、曾テ越前侯慶永必戦必死ノ建言アリシ時、伊勢守近親ノ間柄憂慮ニ堪ヘス、内意ヲ薩州侯ニ伝ヘテ忠告ヲ請ヒシ往復書中ニ、富国ヲ先ニシ必戦ヲ後ニスルト申儀ハ、可恥儀ト申セハ申ス様ノモノニ候得共、時勢ノ変革・武備ノ強弱・国貧富モ少シハ考慮無之候テハ只カラリキミニ相成、事實ハ參リ申間敷欵、御同前ノ国ト江戸モノ、家来ニテモ海防ノ議論ニハ強弱有之、国ニテ理屈ヲ申候ハ、先ツ越前守申聞候如クノ説多ク、江戸ニテ得ト異国ノ情態ヲ勘弁致シ候モノ、説ハ又左様計リニモ無之、有志ノモノ

ニテモ一昨年・昨年・当年ト段々勘考ニテ種々説ノ交シ候儀モ有之、海防筋ノ儀、外国ノ事情種々様々ノ事朝夕取扱居候身分ニテハ、中々当今容易ノ事ハ出来不申、去レハトテ武備迄捨ルト申儀ニハ無之、武備ハ益盛強ニ致シ度候ヘトモ、取扱方ハ時勢ヲ勘弁無之テハ真ノ御為メトハ不被申様被考申候トアルヲ觀ルモ、亦以テ意見一定動カサルヲ知ルヘシ、是レ其優柔不断ノ誹謗ヲ招キタル所以ナラン、然レトモ此ノ優柔不断ハ即チ事ニ臨ミテ懼レ、謀ヲ好ミテ成ルモノト謂フヘシ、且前書所謂有志ノモノモ段々勘考ニテ種々説ノ交スル儀モ有之云々数語ト、曾テ勝伯ニ聞ク所ノ談話ト相参照スレハ、其政略ノ一斑ヲ窺ヒ見ルヘシ、勝伯曰ク、當時所謂慷慨憂國ノ志士ナル者鎖攘論ヲ主張セシハ、外国ノ事情ニ暗クシテ、身ヲ局外ニ置クカ故ニ八面支障ノ難事ヲ以テ、容易ニ当局者ノ実行ヲ責メシト雖モ、若シ其人ヲシテ局ニ當リテ外人ト直接ノ關係アラシムレハ、百般ノ事遙カニ彼ニ及ハスシテ、我ハ決シテ其比類ニアラサルコト一朝ニシテ明白ナリ、論ヨリ証拠、苟モ内省シテ悟ル所アレハ、粗暴ノ激説自ラ消熄シ、各々輕拳ヲ慎ムニ至ルヘシ、且人才ヲ撰抜シテ下ニ遺賢ナカラシメント欲スルハ、勢州政略

ノ主眼ナレハ、反対者ノ鎮撫ニ於テ寧ロ登庸ノ手段ニ出テ相當ノ位地ヲ得セシメ、以テ國事ノ重任ヲ分担セシムル、亦決シテ烏有ノ事ニアラス、此人ヲシテ存セシムレハ、豈ニ後ノ為政者カ大獄ヲ起シテ、天下ノ人心ヲ失ヒシ如キ事アランヤト、安政紀事ニモ亦伊勢守カ善ク人才ヲ愛シテ任用スルコトヲ記シテ曰ク、勢州ハ天保十四年九月寺社奉行ヨリ擢テ、老中トナリ、是ニ至テ十有三年當時ノ諸有司皆薦達スル所、幕府尤モ人物多シト、伊勢守ハ部下ノ有司ヲ薦達スルヲ勉メタルノミナラス、水戸老公ノ如キ豪邁敢為ノ氣象ニ富メル天下第一等ノ人物、將軍家至親ニ出タルヲ無上ノ大幸トナシ、之ヲ幽閉ノ中ヨリ起シテ大政ニ參與セシメ、優遇至ラサル所ナク、内政ノ改革ハ其協議ニ成ルモノ多ク、外交政略ニ於テハ、往々意見ヲ異ニシ、曲ニ事理ヲ竭シテ再考ヲ請ヒ、老公ノ言終ニ行ハレサルモノアリト雖モ、未タ曾テ其欲心ヲ失ハス、伊勢守カ世ヲ終ルマテ些ノ不平ヲ抱カシメサリシハ、伊勢守カ心尽シテ老公ヲ保全セシ好意ノ世ニ見ハレサルヲ傷ミ、栗本鋤雲ノ筆記セシ岩瀬肥後守ノ言ニ照ラシテ明カナリ、其國備ニ汲々タルハ砲台ヲ築キ、講武所ヲ開キ、大砲大艦ヲ鑄造シ、洋式銃陣ヲ創メ、俊秀ノ

子弟ヲ長崎ニ遣リ、蘭人ニ就テ航海術ヲ伝習セシメ、又
蕃書調所ヲ設ケ、四方ノ名士ヲ聘シテ洋学ヲ講究セシメ、
其他改易更革スル所枚擧スヘカラス、未タ大ニ其効ヲ見
ルニ至ラスシテ終ルト雖モ、維新ノ人才此養素ニヨリテ
傑出スルモノ少ナカラサレハ、率先ノ功亦没スヘカラサ
ルモノアリ、又所謂武備ハ益盛強ニ致シタキ伊勢守ノ心
事モ、鎖攘論ニ妨害セラレタル事実ヲ見ルヘキモノハ、
嘉永六年十月幕府閣老ヨリ軍艦二十艘並ニ大砲小銃一切
ノ附属品、其他兵器・兵書等至急購求方ヲ阿蘭陀人ヘ照
会セシニ、歐羅巴戰爭中ニテ、國際公法ニヨリ兵器他國
ヘ輸出相成ラス、且目下日本ヲ援ケテ他國ヲ防キ、蘭人
独リ交易ノ利ヲ私スルノ嫌疑アルヲ以テ之ヲ拒絶セリ、
夫レ軍艦砲銃等武備ニ必用ナル兵器ハ皆外國ノ長所ニシ
テ、當時ニ於テハ先ツ外國ト通交セサレハ右等兵器ノ購
求及ヒ其運用ノ伝習ヲ併テ之レヲ受ル能ハス、況ヤ之ヲ
製造シテ多数ノ実用ヲナサシムルカ如キハ、尤モ望ムヘ
カラサルノ数ナリ、故ニ既ニ兵備ヲ整ヘントスレハ、鎖
國ノ能ク弁スル所ニアラス、幕府ノ官吏ハ此蘭人ノ言ニ
ヨリ必ス大ニ覺ル所アルヘシ、況ヤ最初ヨリ開國ノ見込
アル伊勢守ニ於テハ、一層感悟深カ、ルヘキモ鎖攘論ニ

妨ケラレ、交易ノ速ニ開ケサルカ為メニ武備ノ整ヒ兼タ
ルヤ疑ヒナキナリ、然レトモ滿天下ノ人中八九鎖攘論
ヲ主張スルノ時ニ當リ、志士憂憤ノ徒、或ハ報國ノ大義
トナシ身ヲ殺シテ貿易ヲ妨クモノアリ、家臣ノ中ニモ亦
其人ナシトセス、伊勢守嘗テ大久保子^一ニ向ヒ、外ノ攘
夷説ハ姑ラク差置キ、内輪ニモ攘説之アリ困ルト談アル
ニヨルモ亦其苦心ヲ察スヘシ、故ニ容易ニ抱負ノ意見ヲ
発セス、徐進潛移以テ時機ノ熟スルヲ待ツハ時勢當然ノ
政略ナリ、其堀田侯ヲ薦メテ首座ニ置キ、自ラ下リテ二
班ニ居ルモノモ、亦決シテ責ヲ避ケ安ニ就クカ如キ拙劣
ノ拳ニアラス、蓋シ時機ノ漸ク熟スルヲ見テ交易ノ準備
ヲ為サントスルナリ、是ヨリ先キ凡ソ内外ノ要務水戸老
公ト協議セサルモノナクシテ、此ノ一大事件ニ限り、老
公ノ意外ニ出テ、老公ノ越前侯ヘ与ヘラレタル書中ニ、
細々タル事ハ格別閣老杯ハ天下ノ御為メ御^大太切ノ職ニ候
処、右サヘ御相談モ無之上ハ全クノ案山子云々、ノ語ア
ルヲ見レハ伊勢守ノ独断タルヲ知ルヘシ、蓋シ當時ノ諸
侯伯中和親外交ノ要路ニ当ルヘキモノハ、堀田侯ノ外其
人ナシ、而シテ侯ノ蘭学ヲ好ム、水戸老公ノ嫌惡スル所
ニシテ、常ニ^辭蘭僻ヲ以テ排斥セラル、其推薦ヲ謀レハ必

ス行ハレス、故ニ之ヲ老公ニ謀ラサルハ、其必用ヲ感スル所アレハナリ、其

皇室ニ対スル処置ニ於テハ、従来ノ慣例ニ依ラスシテ、外交大事ハ必ス之ヲ奏上シ、安政二年五月、曾テ下田奉行トナリ外国ノ事情ニ通曉セル都築駿河守ヲ以テ禁裏附トナシ、魯・英・米三国条約書奏上ニ先チ、同年七月駿河守ヘ論達シテ曰ク、

魯西亜・英吉利・亜米利加等御処置ノ品、追々所司代ヘ申遣置候儀ニハ候ヘトモ、書状ニテハ難尽意味モ有之、兼々御所向ニ於テ御心配被遊候趣ニ付、其方ニハ先役ノ節取扱候品モ有之、異國ノ事情ヲモ相弁居候事ニ候間、上京ノ上所司代ヘ篤ト申達、達 叙聞可然事共ハ、事実能々相分時勢無御抛訳柄等、関白殿ヘ直談有之候様致シ度、時宜次第其方儀所司代同道ニテ罷出候ハ、可然哉ト存候、仍テ三ヶ国ヘ差遣候条約書写相渡候間、持參致シ、所司代ヘ申談御都合宜様可被取計候事、

其奏聞ヲ経タル後、同年九月廿二日脇坂淡路守ヨリ閣老

ヘ報告書中ニ曰ク、

今二十二日拙者参内致シ候処、関白殿被逢、去ル十八日三ヶ国ヘノ条約書写持參、演説之趣并都築駿河守直話之次第等委細被及奏聞、条約書写モ被入

叙覽候処、段々之御処置振具サニ被 聞食、殊ノ外 叙感被為在、先以御安心被遊候、不容易事追々居合候段、千万御苦勞之御儀ト被思食候、云々、

右ノ如ク伊勢守カ公武ノ間ニ処スル用意ノ周到ナルハ、朝廷ヲ重ンスルノ精神ニ出テタルニ相違ナシ、又安政元年十二月、皇居御造営未タ落成ニ至ラス、御仮殿ニ在ラセラレ、外夷渡来混雜中天変地妖打続キ、更ニ目出度新年ニアラサレハ、明年ノ参賀式ヲ省略シ、謡初ノ式ヲ廃シテ謹慎ノ意ヲ表セント伊勢守發議セシニ、水戸老公賛成ノ外同列異議者ノ多キヲ以テ、將軍ノ親裁ヲ請ヒシニ、允可ヲ得スシテ其事行ハレス、今日ヨリ之ヲ言ヘハ正月三日謡初ノ式ノ如キハ、徒ラニ昌平ヲ粉飾スル兒戯ニ近キ小事ニ似タリト雖モ、幕府ニ於テハ至重ノ大礼ナリ、故ニ物論大ニ起リ、將軍ノ親裁ヲ乞フニ至テ允セラ

レサルヲ見レハ、愈其容易ニ變更スヘカラサル大事ナルヲ知ルヘシ、而シテ断然之ヲ廢セント欲スル、伊勢守カ勤王ニ厚キノ衷情ト、守旧論者ノ多キ時ニ於テ破格ノ新令斷行スルノ難、且苦ルシキトヲ察スヘシ、是レ伊勢守カ孤立援ナク時々意ノ如クナラサルノ歎アル所以ナラン、開国始末ニ曰ク、阿部正弘首トシテ米使交ヲ求ムルノ局ニ当リ、窃ニ嘆シテ曰ク、外藩^(蕃カ)ノ我ヲ窺フハ我之ヲ知ラサルニアラス、如何セン、滿宮一ノ具眼人ナク、荷蘭密ヲ告クルヲ議スレハ則チ曰ク、彼レ為メニスル有リテ遊説スル者ナリト、嗚呼正弘ノ此言ヲ見テ、以テ當時海外ノ事情ニ通スル者ナカリシヲ知ルニ足レリ、開国起原ニ曰ク、正弘外国請求ノ時勢止ミカタキヲ知ルト雖モ、滿朝ノ諸有司マテモ多クハ拒絶ノ論ニ傾キ、或ハ首鼠兩端ヲ持シ、又開港ヲ否トセサルモ素ヨリ海外ノ事情ニ暗ク、其議論狭少ニシテ、徒ラニ区々ノ末節ヲ争フニ過キス、當時正弘孤掌難鳴ノ嘆アリシト云、右ハ伊勢守正弘事跡中事体最大ナルモノニ付、聊カ其功勞ヲ發揚セント欲スレハ事体大ナルカ故ニ、從テ之ヲ論評スルモノ多ク、世人或ハ先入ノ説ヲ信シ、万障ヲ排シテ危急ヲ濟ヒ、邦家ノ安寧ヲ保チタル苦心ヲ察セスシテ、

偶然ノ僥倖トナシ、甚タシキハ功ヲ以テ罪トナスニ至ル、旧臣ノ情誼ニ於テ之ヲ黙々ニ附スルニ忍ヒス、因テ弁明ノ已ムヘカラサルモノアリ、抑モ當時幕府ノ外国ニ対スルノ本領及ヒ内国機宜ノ政略等、正弘カ邦家ニ尽シタル蘊底ヲ表白シ、以テ明治修史ノ材料ニ供セント欲シ、多年刻苦探討スルト雖モ、其在職中ノ日記百余卷ハ明治六年一月正院へ呈出シテ、同年五月

皇居炎上ト共ニ烏有ニ帰シ、又其在世中ノ手記、諸侯伯ノ往復文書及ヒ近臣若シクハ吏員ノ手記等、苟モ公事ニ関スル者ハ從前ノ慣例ニヨリ、臨終ノ際丙丁ニ附セシメ考抛スヘキモノナク、同時著名ノ幕僚某々氏ノ如キモ亦既ニ泉下ノ客トナリ、詳細ノ事実ヲ聞知スルニ由ナシ、独り幸ニ勝伯・大久保子等ノ遺老ニ就テ聞ク所ノ談話、及ヒ徳川^{水戸}・島津^{鹿兒}・松平^{福井}ノ三家其他ニ存在セル記録筆札等ニヨリ、事蹟數冊ヲ編輯シ、稿既ニ成ルト雖モ、故アリ未タ刊行スルコトヲ得ス、正弘ノ心事世ニ明カナラス、痛嘆ノ至ニ堪ヘス、伏テ承ル、維新勤王殉難ノ士並ニ国事ニ功勞アルモノ続々恩典ヲ蒙ルヲ、正弘ノ如キハ

皇国未曾有ノ最大難時ニ遭遇シ、善ク其局ヲ結ヒテ職務

ニ斃レタル者ト謂フヘン、幽隱颯揚ヲ以テ自任セラル、
貴會ノ御建議ニヨリ、特旨ノ恩典ニ浴スルヲ得ハ、独リ
正弘泉下ノ榮ノミナラス、風教ノ補益ニ於テ亦鮮少ナラ
サルヘシ、此段謹テ請願仕候也、

三三 水戸藩ノ挙動

サレハ(前文欠)水戸浪人等寢食ヲ忘レ、妻子ヲ捨テ、老
公ノ仁沢ニ帰伏シ、御府内ノ新手ヲ繰出シ、役宅ヘト
歎願シケルニ、殿中ノ諸老臣大イニ当惑シ、商議マチ
ノナレトモ、老公ヲ本国ヘ帰城サスルニ於テハ、カ
ナラス反逆ノ野心ヲイタキ如何成茲計モシレカタン、
且徒党ノ旁ニモ同様在城ヲ願フ時ハ、天下騒乱ノ基ヲ
開クヘシ、是極ヲ焚テ猛虎ヲ放シ、江海ヲ開ラキテ蛟
龍ヲ送リケルニカスノ蜂起シ、府内ノ人心競々トシ
テウス氷ヲフムカコトク、何時合戦ノ用意モシレカタ
シト、家財ヲ荷ヒ故郷ヘ帰ルモアリ、妻子ヲ捨テ他ニ
奔ルモアリ、旅算ノ形勢恰モ村家ノ様ニナリ、アマツ
サヘ疫病流行シ、死亡ノ者日々万人ヲ以テカソヘ、殺
氣陰々トシテ満チ渡リ、海浜ニ有ニ異形之軍艦教艘ヲ
ツナキ、関外ニハ蜂起ノ晝夜ノ分チナク横行シ、鳴(鳴)

呼数百年ノ太平今此時ニ滅スヤト歎息セサルモノナカ
リケリ、借モ太田館之惣督綿川正勇・湊館之惣督野ム
ラ鐵五郎等商議シケルハ、右国之主人憂ル時ハ臣辱シ
ム、主人辱メラル、時ハ臣死トイヘリ、今老君国ヲ去
ルノウレイ臣此辱メアリ、カク数千人歎願ニ事寄せ、
老君ヲ在城セシメント欲スレハ、廟堂尚姦臣充滿シテ
更ニ是ヲユルサス、イタツラス糧食ヲ費シ、竈居スル
トモナンノ益ナシ、畢竟身命ヲ捨テ本懐ヲ達センハ元
ヨリノ覚悟ナレハ、此処ニ飢死センヨリスミヤカニ死
ヲ以テ国難ニ報スヘシ、去ナカラ軍師山野邊殿カツテ
戦フ事ヲ許サストイヘトモ、此時ヲ失ヘハ其勢ヒヲ失
フ、所謂義居而行フ不待命トイフカ如ク、我等ノ存寄
リヲ以テ一時ニ蜂起シ、姦佞ノ族ヲ切尽シテ、其罪ヲ
待ツコソ丈夫之所為是如何ヤト申ケレハ、梶野順之助
ス、ミ出イワク、軍師山野邊殿之命令ヲ用ヒス私ニ蜂
起スル時ハ、布テ深慮ニ差ムクニ似タリト、早剋使番
ヲ以テ山野邊方ヘ申送リケルニ、主水正大イニオトロ
キ、扱々無謀ノ旁々ナルヤ、憤怒之義氣賞スルニタヘ
タリトイヘトモ、短慮功ヲナサス、今タトヘ一万二万
ノ彼是アツテ府内入乱入之、姦佞ノ族ヲ払ハントハ、

軍ヲ以テ餓虎ニ与ヘルカコトシ、彼已ニ隣国ノ諸大名ニ手配シ、当国ノ乱妨ヲ備ケレハ、力ヲ以テアラソヒカタシ、却テ老君ヘウキ目ヲ見セ、国家之安危ヲ引出シ、毛ヲ吹テ疵ヲ求め、後悔スレトモ及ヒカタシ、某カツテ深計アリ、飽マテモ歎訴ニ事寄せ、新手ヲ繰カヘ、隊伍ヲミタサス、乱妨ヲセス、愁々然トシテアル時ハ、公辺カナラス深慮之人出テ老公ヲ在城サスルニ相違ナシ、ナンソ国民之君ヲ思フハ赤子之父母ヲ慕フカコトシ、只ソノ情実ヲ以テ在城ヲ歎訴スル名義、誰アツテ非道トヤイワン、且数千ノ郷士等隊伍ヲ付ダサス、其法令ニカナヒ関外ニ集会シ、順々ニ新手ヲ操出シ府内ヲ徘徊セハ、姦佞ノ族心中之恐レヲナシ、針ノ筵ニ座スルカコトク飲食ノドヲ下ラマシ、イカントモ名義ニ於テ正シケレハ其罪ヲ問フ事アタワス、又刑罰スル事モナリカタシ、暫時之遲速アルトモ歎願成スルニ相違ナシ、一旦老公ヲ無事ニ在城セシメ、然シテ各々ノ慮簡ニマカセ、計策ハ某ノ胸中ニアリ、カナラスセク場所ニアラス、去リナカライタツラニ手ヲツカネテ糧食セハ、武威ナキニモ似タリ、彼ノ高松中將殿ハ当家ニ於テ因家ノ恩義トテ、カソソ傍觀スルノ諸侯

ニアラス、アマツサヘ一旦監約(監視)ニカタシ、各々血ヲス、ツテ誓文シナカラ、掃部頭ヘ内通スルコソ奇怪トヤイワン、是等ノ非義ヲ正シテ、然フシテ後ハ外族ノ姦佞ヲ払ワン、マツ同盟之内忠義無一ノ輩ニ拾人撰ミ、歎願書ヲ認、高松殿往返ヲ窺ヒ、同家ノ由緒ヲ以テ俱々ニ公辺ヘ歎願有度旨ヲ愁訴シ、其名義ヲ正シ、近寄ル時ハ不法狼藉之扱ヒアルハ必定ナリ、サスレハ死力ヲ尽シ中將殿ヲ目カケ一刀ニ切り殺スヘシ、カナラス外人ヘ乱妨アルヘカラス、首尾達スル上ハ速ニ官ニ捕ヘラレ、申様ハ私共国家之恩義ヲ蒙リ身体アレハ身命ヲ以国家之難ニ報ス、高松殿ハ我恩ヲ以テ数万之家領ヲ受ケ、余多之士民ヲ養フ事、私共ノ今日アルモ同様ナリ、然ルニ国家之為ニ一応之歎願モナク、却テ宗家ヲ俗トナシ、其情実更ニナシ、且不法狼藉之扱旁々以テ残念ニ御座候、カ、ル無道ノ分家アツテハ御先祖代々ノ神靈モ如何成コトク奉存候付、私トモ存意ヲ以テ切害ニ及ヒ候、カナラス公辺ヘ対シ乱妨仕候ニハ無之、一家之罪ヲ正シ候ナリ、ケ様ニ御大法覚悟ニ候ト其罪ニ伏スヘシ、左アレハ公辺ニモマスノ畏縮シテ、老公ヲ在城セシムル事ト申サネハ、諸人大ヒニタ

ンジ、我一ト越出ス、其人々ニハ

野村鐵五郎 梶野順之助

山崎周藏 竹村賢次郎

佐野清一郎 鈴木六郎左衛門

島田條太郎 堀 盤 作

西條 東 豊 田 清 六

南條七郎 池田友之進

長谷川久馬 加藤宗右衛門

秋田元之助 野 口 主 膳

井上市之丞 吉村老之助

鈴木大膳 大野 彌 平

斯ノ二拾人、身命ヲ投打テ国家之為ニ尽忠セント承領シケルニ、山野邊主水正大ヒニ賞シ、天晴之忠臣ナリ

ト各々用意ヲ調へ、高松殿之往還ヲ伺ヒケル、扱モ高

松中将殿ハ水戸中納言頼房卿嫡男光圀卿同母兄源頼重

公ヨリ同家之間柄ヲ以テ、此度老公征異之議トカタン

シ、専ラ御当代ノ武威ヲフルハント盟約ヲ結ヒ、將軍ヲ

ナキモノニセン計策ニクミシケルカ、フト思ヒケルニ

某先祖ハ水戸家之分家ナレトモ、御当代ノ厚恩ヲ蒙リ、

西国ニ虎踞シテ其跡ナンソ水戸家ニ讓ランヤ、老公之

所為御当代へ尽忠ナリトイヘトモ、公辺ノ評議ニソム

キ、密々 天朝ノ矯旨ヲコヒ受、アマツサへ当君ヲ毒

殺スルノ心底旁以心得ス、老公ハ虎狼之野心ヲイタキ、

征異之名義ヲカサリ、却テ御当代ノ天下ヲ并吞スルノ

陰謀ニ相違ナン、左アレハ畢竟其本望ハ達セスシテ反

逆ノ汚名ヲ残シ、国家之安危ニカ、リ、某逆モ其罪ノ

カレカタシ、然ラハ老人之不覺ヲ以代々ノ家領ヲ失ヒ、

宗廟頽廢ニ至ソテ悔トモナンソ及ハン、夫ヨリハ老公

ニソムキ御当代之危急ニカタンシ、タトへ国家滅亡ス

ルトモ、其道ヲ以テ尽忠スヘシト俄ニ変心ヲ発シ、早

刻登城申、シカノノ陰謀残ラス掃部頭へ内注シケル

ニ、専ラ是ヲフセカント昼夜商議シケル下文欠、

三三 齊彬公島津豊後へ与ル書

安政五年戊午二月鹿兒島ヨリ

度々之書面相達心得申候、愈無事珍重存候、当地無異

静謐ニ候、然ハ御心願(齊彬公御官位昇進、近衛家日記及

ヒ所載ノ御親書補遺第(卷ニ記ス)旁之義申遣心得申候、

相済候分ハ委細不申入候、御湯治之御事至極御宜敷ト

奉存候間、則今式日ヨリ堀田江手紙遣シ、直ニ御願済

之事可申遣候間、此段宜敷可申上候、然ハ琉球滞留蘭人（八重山島へ漂着人）モ無事ニ列帰ト相成候、右之事旁堀田へ書面遣候間、其序ニ御湯治之義モ申遣候様可致候、

一座喜味（三司官座喜味親方、前卷琉球事件ノ条ニ詳記ス）事モ病氣ニテ退役願出シ申候、代リ野村ト翁長兩人之内ニ可申付、シカシ此節ハ人物第一ニ候間、當時取調中ニ御座候、産物方・三島方之船（伊呂丸形）モ成就ニ相成申候、近々島下リニ可相成ト存候、納戸ニテ拵候船モ二艘共成就ニ相成候、出水之船モ（出水郷脇本港ニ於テ越通船造製ヲ云フ）致出来候、不殘島下リ申付候手筈ニテ候、彌兵衛（相良、和蘭貿易事件、井上庄太郎ト俱ニ渡海ス）モ大島へ差下シ申候、色々取込大略之返事申入候、以上、

二月二十九日町便ヨリ

返事

豊後江

相良ナル者ハ、御軍役方ノ筆吏ニシア、島津豊後カ腹心ノモノナリ、別卷琉球大島等ニ於テ、外国貿易開始ノ事ヲ以テ井上庄太郎ト俱ニ大島ニ出張ス、茲ニ記サレタルハ其概

況ヲ知ルニ足ル、

三四 櫻島洗出又ハ神瀬其外砂揚場等へ砦堡建築ノ御目論見

同五年五月幕府軍艦觀丸航海伝習ノ為メ重ネテ鹿児島灣ニ来港（和蘭人「ハントウエーン」及ヒ幕吏勝麟太郎・木村圖書・松元良順・赤松大三郎等乗組タリ）、曩日約セラレタル灣内守備ノ要所或ハ築造法ノ製図等携へ来リ、尚申言スルニ神瀬ヲ築キ八稜形ノ砲台ヲ設ケ、櫻島洗ヒ出シニハ三稜形ニ築キ、沖ノ小島ハ平坦ニ削除シ、砂揚場ニハ六稜形ニ築キ、三ヶ所ヨリ狭撃ノ彈線トシ、神瀬ヨリ内海ニ浸入セシメサル様ニ設ケ、而シテ水雷数十個ヲ櫻島ト神瀬トノ間ニ伏セ、又天保山ト神瀬トノ間ハ埋築スルカ、否ラサレハ砂石ヲ埋メ大船ノ通過ヲ遮断シ、神瀬ト櫻島トノ間ノミ航線トナシ、両方ヨリ砲撃シテ内灣ニ入ルヲ得サラシムヘシ、櫻島洗ヒ出ニハ砦堡ヲ築造（蘭名ニホルテン城ト云）シ、敵若シ上陸シテ之レニ抛ルトキハ、頗ル大事ニシテ神瀬モ保チ難キニ至ルヘシト、詳ニ説明書ヲ付シテ呈上セリ（此図明治十年九月兵火ニ焼失ス、惜ムヘシ、公ノ御書人モアリタリ）、御意ニ適ヒ漸次建築セラレムト、先

ツ差向キ神瀬ノ試築ニ着手セラレタリ、惜ヒ哉、薨逝セラレ遂ニ廃棄セリ、然ルニ文久三年癸亥七月英船ト戦争ノ後、要衝ノ地ナルヲ以テ 忠義公・久光公 御遺志御継紹大建築ヲ始メラレ、一般感佩セリ、建築ノ法方ハ曩（マ）ニ和蘭人ニ就テ研究シタル洋学者石川確太郎「ハントウエー」ナル者ト論定ノ図形ニ則リ取調タリ、斯ク築造至急着手セラレタルハ、英艦ト戦ヒノ後悉ナ人先公ノ卓見ヲ感シ、建築アラムコトヲ建言セシ者続々タリ（廣貫モ建言セリ、文久三年七月ノ部第（マ）卷ニ記ス）、故ニ日夜業ヲ取り、半歳許リニシテ三四門ノ砲ヲ備ヘ得ルニ至リ、尚ホ進ンテ大小七拾余門ヲ備フルノ計画ナリキ、戦争ノ際此砦堡アラハ英艦侵入スルコト能ワス、仮令ヒ侵入ストモ撃沈スルヤ疑ヲ容レサルナリ、否ラサルモ艦中数十名ノ死亡アリ、味方ハ僅ニ二三名ノ死傷アリシノミ、又敵艦ヲ打撃セシコト寡カラス、英艦ハ機関ヲモ破ラレ、一艘ハ漸ク知輪島沖迄退キ滯泊シ、数日ノ後挽船来リテ辛フンテ退キ挽キ去レリ、如此英艦這々ノ形況ニテ遁レタルモ、神瀬ノ砦堡アラハ一艦モ遁ルコトヲ得サリシナラント、當時一般握腕セリ、当公ハ実戦上ノ要衝ナルヲ弁セラレシ故、戦争後直ニ建築着手セラレ、稍落成ニ垂々タルニ

廢藩置県ノ大沿革トナリテ、全ク廢棄スルニ至レリ、建築着手セラレシハ、文久三年ノ八月初ニシテ、石材ハ磯櫻谷ヨリ田ノ浦・潮音院岬迄沿海ノ山ヲ崩シ、或ハ花倉・龍ヶ水辺ヨリ運送セリ、櫻谷ヨリ潮音院岬迄ハ満山桜樹繁茂シ、其風眺譬フルニモノナク、花ノ時分ハ貴賤ノ遊観モ允サレ、殊ニ愛スヘキ勝景ナリシカトモ、国家守備ノ要ナルヲ以テ断然毀テ建築ノ用ニ充ラレ、其費用ハ琉球通寶ヲ充ラレタリ（上巻鑄錢ノ条ニ記ス、費額凡ソ七万円ニ余レリ、建築ノ細事ハ文久三年ノ部ニ詳記ス）

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政五年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数一二二枚）」の記載あり〕

目録

岩瀬伊賀守香港行取調向々エ達書（琉球ニモ関ス）

長崎ニ於テ蘭人清英交戦ノ顛末具上

参考 宮部鼎藏日記抄

参考 阿部家々記抄

佛蘭西条約調印人名（条約書別冊ニアリ、茲ニ略ス）

梅田源次郎等捕縛セラル

参考 橋本左内事蹟

西郷吉兵衛（隆盛）日下部・堀へ送ル書

安政五戊午九月十七日
日本書徳川家蔵

参考 閣老阿部侯ト外国処分御親談之事実安政元年頃

出水郷大野原及ヒ庄村海浜ニ新田開発ヲ命ン玉フ

考証 伊地知季安記事鈔

四書五經等出版セラレシ事実

参考 黒岩堅藏家記抄

新納駿河意見上申書

勝義邦齊彬公ノ話及久光公御書翰

京攝之風説

洛中風説（原田才輔報告）

御所探訪余聞（原田才輔密報）

宮堂上臨時参内

水戸前中納言中山中納言へ内書送致事件探索

此間關東ヨリ御返答之 勅答御文段之趣意

關東へ御沙汰書

堂上九十六名建言

非藏人三十六人建言

堂上諸卿へ賜金

東坊城歎願事件之説

洛中之評判

近衛忠熾・鷹司輔熾其他公卿建言

早々評議致シ可被申聞候事、

長崎奉行
岩瀬伊賀守エ可相達趣

長崎表ニ於テ貿易取調モ出来候ハ、岩瀬伊賀守儀、在
勤支配向之内其外ニモ有志之者共召連、暫時唐国香港
辺迄渡海致シ、外国之交際其外実驗致シ罷歸候様可被
致候、尤今般御買上之和蘭スクーネル船坎、又ハ此度
入津之御兆蒸氣船之内何レ成共都合宜方ニ乗組、蘭人
相雇、都テ蘭船之俟、右船乗試等之名日ニモ致シ、手輕
ニ取計渡海致シ候積可被心得候事、

三六 長崎ニ於テ蘭人清英交戦ノ顛末具上

二月五日

此度之一件ハ唐国奉行職之不明ヨリ事起リ、英人理不
尽ノ致方ニハ無之、多分此度モ唐国ヨリ和ヲ乞、英人
ノ存意相立ベク、^{〔廣カ〕}唐東居民致風聞居候、サテ日本ニ於
テモ亜墨利加ト条約相濟、下田・箱館御開キニ相成、
公ケニ交易ハ未タ御免相成居不申候ヘトモ、金銀錢ヲ
以テ品物相調、或ハ品替、又ハ官吏ノ滞在モ御免有之
候ヘバ、先交易ノ道開ケ候ト申モノニ有之（本記ノ如ク

通商開ケタルナリ）、又英國トモ御条約相濟、是ハ下田、
箱館ハアメリカト相變リ候事モ無之候ヘ共、長崎ニテ
ハ品々些細ノ御規定有之有様ニテハ、英人条約取結候
詮無之候、又魯西亜トモ御条約相濟、三ヶ所御免ニ相
成、然ル尠長崎渡来ノ節ノ御処置、魯人甚不同意之由
承知仕候、但下田ニテノ御処置ハ至極感服仕候由（加計
外人長崎ノ敵ヲ憚リ、下田ノ寛ヲ悦ブ、以テ其地奉行ノ長短ヲ
見ルベシ、亦以テ我カ政府ノ政理一定ナラザルヲ見ル）、右三
ヶ国ハ世界中ノ強國ニテ、魯ハ最大國、殊ニ御憐國ニ
有之、此上味方ニンテハ御後楯ニ可相成、敵ニ取り候
テハ至極ノ御大患ニ可有之候間、別テ御懇情被施候ハ
ゞ、御安全ノ御長策ニ可有之、右三ヶ国ノ外佛蘭西モ
御条約相濟候事近々ニ可有之、依テハ此上ニ於テハ旧
來ノ御国法御變革ニ相成、世界普通ノ御法ニ被成候義
肝要ニ有之、左モ無之是迄ノ御法ニテハ、諸國ニテ承
伏不仕、決テ正法ノ御國トハ相唱不申候、元來日本ハ
東方諸國之内一箇之富饒強國ニテ、其人民英才有之、
唐國杯ノ及フ所ニ非ラス（記スカ如シ）、但シ東洋ノ人
民ハ自カラ尊ヒ、他ヲ卑メ候癖有之ト（記スルカ如シ）、
之ヲ愛國ノ基トス）西洋人評判仕候、拙者久シク日本ニ

在テ見聞仕候ニ、果シテ相違無之、折々外国人渡来之
 砌、御渡シ御書翰ノ御文言為御見相成候処、兎角他エ
 御命令相成候様ノ御文言有之、御頼ミト申ス御文言ハ
 曾テ相見不申、御国内限リハ、兎角可申様モ無之候ヘ共、
 外国人ニ対候テノ御文言ハ御改相成候様有之度候、蘭
 人ハ年久敷御国風モ相心得居候間、左様ニハ不申候ヘ
 共、国々ニテハ至極不快之義ニ御座候、外国人ノ思フ
 処ハ、我モ人彼モ人ト申ス事、其本意ニ候ヘバ、書翰
 御文言其外御応接自他ノ尊卑無之様ニ御処置肝要ニ奉
 存候、一旦和交御取結ニ相成候テハ、尤御太切之義ニ
 付、能々御勘弁相成度、元来条約ノ趣意ハ親睦ヲ專ト
 致候義ニテ、紙上ニ細事ハ載カタキ義ニ候間、些細ノ
 事ハ可成丈ケ御沙汰不相成方可然、可成程ハ狭ク被成
 候様ノ御処置ハ不宜、只親睦ノ二字ヲ本トシ、万事広
 ク相成候様緩ヤカニ御沙汰相成候方可然、既ニ和蘭某
 下田滞在ノ巫官吏ヘ面会^{ハルリスヲ}指^{ニ似タリ}候処、日本ハ兎角細
 事ニ拘リ、些細ノ事ニ返答埒明不申、無益ニ小事ノミ
 申聞、実ニ煩シク候間、政府ヘ申立、別段日本ヘ強ク
 談判ニ可及抔申居候、右様ノ事ヨリ可及混雜候間、篤
 ト御思惟相成度、猶後來外国船申立ノ廉々ハ可成丈ケ

速ニ御返答相成度、是亦御含相成度、始メ御差許ニ難
 相成旨御申聞相成候義モ、強テ申立候ヘバ御指許ニ相
 成候様ニテハ、強クサヘ申立候ヘハ何事モ御指許相成
 可申心得、事實御指支之義モ強ク申立候様可相成候、
 御指許可相成程ノ事ハ速ニ被指許候ヘバ、御国威モ相
 立可申、強ク乞候故ニ被指許候テハ、少シモ御指許ノ
 名義ウスク、御国威相減可申、夫丈申乞候者之方国威
 相増可申候、兎角兵端ハ小事ヨリ起リ候者ニテ、此度
 唐国ノ弊モ右等ノ事ヨリ起リ、遂ニ和ヲ乞ニ至リ可申、
 自ラ弱キヲシラザルハ智トハ難申、御国ニテモ御勘弁
 有之度、尤唐国程弱クト申ニハ無之候ヘ共、久シク太
 平御打続キ、歐羅巴ホド軍艦ニ馴不申、唐国ト違ヒ四
 方海岸ノ御国ニテ、一旦兵端ヲ開キ候テハ、至極ノ御
 大切ニ可及候間、能々御勘弁相成度、此度唐国ノ一件、
 必外国ノ事ト御聞捨無之、事情得ト御賢察御所置有之
 様ニト加比丹申出候、

是蘭人ノ忠告スル所、深く當時有司ノ心思ヲ動カシタル者
 ニシテ、遽カニ外国処分ノ局面ヲ変シ、大ニ和交ノ論ヲ開
 ク事、是等ノ力ニヨラズンハアラス、コレニ由テ廿四口堀
 田備州評定所一座、海防掛、長崎・下田・箱館等ノ奉行ニ

論シテ曰ク、

英人廣東ヲ焼払候一条ニ付、加比丹説話ノ趣再応致熟考候処、蘭人ノ申立今更ノ事ニモ無之、追々差迫リ候義ニ相聞、右ハ彼国情願ヲ可遂ト強テ牽合附会致候義共不相聞、実ニ当時外国人御取扱振事情ニ不応義ハ、我國人ニモ粗相分リ候程之義ニ付、漸々怒ヲ積ミ候ハ、廣東ノ覆轍ヲ蹈候モ難計、尤警戒可致義ニ有之、既ニ寛永以来之御祖法ヲ御変革相成、和親御取結ニモ相成候上ハ、寛永以前ノ御振合モ有之、御扱方モ亦随テ御改革無之テハ相成間敷、然ル処兎角仕来リニ致拘泥、鎖末ノ義迄事六ヶ鋪差拒、近年外夷ノ怒ヲ醸シ候ハ無算ノ至ニテ、万々一炮声響キ候上ハ、最早御取戻モ難相成候間、外人緩優ノ御取扱、且長崎・下田・箱館ノ三港ハ諸事同様ノ御取扱振ニ相成、文書ノ往復、応対之礼義等スベテ外国人共致信服候様、真実ニ御所置無之候テハ難相叶時勢ニ有之、既ニ英吉利・亜墨利加官吏申立、猶又今般蘭人ノ申立等一々差迫リ居、此上是迄之御仕法ニテハ永ク可取支様無之ハ顯然之義ニ付、無事ノ内ニ早々は迄ノ御仕法御変革有之、此上之御取締相立候様取計候方長策ニ可有之間、右之心得ヲ

以テ向來ノ御所置振勘弁致熟慮、早々取調可被申聞事、

是ニ於テ貿易和親ノ義正ニ決シテ、幕中ノ議論一定、皆寛永以前ノ旧制ニ復スベシト称ス、三月七日ハルリス又書ヲ老中ニ呈シテ、上言ノ事ヲ促シ、切ニ老中ニ面センコトヲ請フ、

三七 参考 宮部鼎藏日記抄

三月廿七日、晴、治装出逆旅、此日国公赴江戸、因至大町肆頭肆カ觀行列、公年三十有三跨馬、家老齋藤某及某々四人亦跨馬扈從焉、行列雖不多頗齊整、有尖眉刀赤皮包焉、長丈余、觀畢至判所、取券出郭南門、行里余則山也、有阪曰船坂并松坂、至関、至此二里、又越一坂槽坂、二里余至綱木脯食、綱木有関出券通之、出関則山也、坂曰檜原峠、上下三里、山上為羽輿界、顧見米澤 如盤中、坂最峻、有残雪山間最多、而桜花粲然開于雪中、亦一奇觀、山中桜最多、南下又上坂、有雪有桜、(津カ)大抵関以南梅桃桜共咲、忽見一山屹立、前面則會澤之盤梯山也、不問而知之、山中聞丁々音、近而見之里人結草屋、溪水上取椀材也、木曰武奈、武奈居山木三之居、木質極堅実、溪水則注猪苗代者也、山北水則注最上川、上下山三里余至大鹽、此処塩井有二、

里人煮之為塩、在溪水上有塩釜五、各五尺方深七八寸、
則宿焉、逆旅汲塩井為風呂浴之、泉本温不炙之亦可浴也、
夜溪水雪水来耳々聒、行程九里、

○塩井煮塩自四月至八月、所収四斗二升入ノ俵六百俵
也、白精増于海塩云、蓋煮之者借金官以弁之、

○檜原山下有数村、以地不熟穀民皆入山伐武奈、以取
椀材為業、無租稅追山成業称曰小屋

念八日、早発、山路稍平而南嚮而下一里半至熊倉、自是
地平坦、左盤梯、行二里至鹽川、馱ヲ出有川、即津川上流
而自猪苗代湖而流者、又山下有湖、東湖ト云、恨不一觀、
左右田稍濶、始見泥服田、午後至若松、尋井深志賀黑河
内高津志賀、懇留高津大喜飲酒語曰、先公有著書及未成
者云、宿松川屋、行程六里半、夜雨、

○會津頃年造炮艦長七間横四間、藩人安部升武和依筑
前人村澤某法造之、先公試之東湖云○先公之時書生

ニ文題ヲ賜、曰清正關羽孰優論○佐藤平三郎カ中陵
漫録ニ、米澤ノ封内飯豐山北ノフモトニ、平家ノ落
人ノ(マコ)アル由ヲ載、中陵ハ本帥家ナリ○津輕青森三
厩ノ間ニホロベツト云地名アリ、蝦夷語ニホロハ大
ト云義、ベツハ川ト云義、則大川ト云カ如キカ、又

今ベツト云地名モアリ○高津ニ平川駿太カ五家紀行
ヲ与ヘント約ス○高津一句、異種聞談忠廣一人寄文
為写氏郷書

念九日、雨、早発、過高津平三ニ書詩与之、又与蒲生氏郷
書、出南門渡一小橋、行田疇間未一里舟渡會津川、蓋発
源山谷間經阿川者至關山、至此自若松三里、稍山中也、
上阪一里余、阪上北望若松及北岳ニ上残雪成堆、山中桜
花亦開美觀也、下坂又一里、蓋曰坂火玉峠、至大内少焉
倉谷・檜原・那賀野ヲ過田島ニ至ル、日將没、於是宿焉、
行程十里余、自大内以南大抵山谷之間ナリ、檜原ト那賀
野ノ間ニテ會津川ヲ二度渡ル、前則舟後則橋、將渡前先
ニ支流アリ、步渡ナリ、深サ徑ニ至ル、田島ハ公領ニテ
會津ノ預地ナリ、關山ヨリ以南五万石ナリト云、田島ハ
永沼濟齊ノ先永沼盛秀ノ所居、城墟町裏ニアリ、素師并
齋齊會津ノ出ナリ、可謂善出豪傑士也、
晦日、早発、沿川南行、過川嶋二里而至糸澤、渡川数次、
谷極則坂也、上一里川則発源于此間也、嶺上顧為奥与下
毛界、坂名三王峠、頂極処以有三王祠也、顧見奥山也、
又下一里至横川午食有、川南流至(マコ)与鬼怒川合流注于
銚子口也、沿之南下過上見ミヨリ中ミヨリ至碓、但四里ナ

り、地勢漸々而下、渡川又数次、皆橋也、駅外又渡上則坂也、名高原嶺、極峻、上二里、山勢雄尖、樹木枯仆半覆、見晃山、自肩以上上隱雲、中連于是西北諸山疊々相望將至山嶺、左面見一山屹立、為鷄頂山、山形似鷄冠也、薄暮投宿、高原上一里許、憊甚少憩、顧吉田曰今日三月尽而踏尽奥羽地、又越一大嶺冠、于此行者自明日下看関、左大沃野指点于掌上而下一大愉快、自高原以南為宇都宮領、行程十一里而達、

四月朔、晴、早發、下山三里比之前日上路稍夷至藤原駅、有一川、自山間南流頗有雅致、曰鬼怒川、發源于絹沼者也、沿之南行、地勢漸下無坂路、過大原・高德・大桑、過駅舟渡、鬼怒川瀨急行一里橋、大谷川則發源于中禪寺湖者也、行數丁出今市駅、人家頗多、乃向山行二里、行樹皆杉、森々成列、徐々而上至日光、蓋自大谷川至文狹為晃領、〔日光カ〕一万三千石也、此間行樹皆杉也、直觀東照宮宿鉢石丁、行程十一里、日光三十六坊三十六院・社司六人・樂人廿四人・寺人七十五人・同心七十五人・法親王臣百許、

二日、晴、早發、至今市、出駅外路歧為二、左則自宇都宮達江戸之路而幕府所田也、乃取左路過板橋至文狹社頭止此、自此以南宇都宮領及小旗本領・壬生領相混雜、渡

滑川至鹿沼晡食、奈良・佐原・楡木・金崎合戰場ヲ過、合戰場宇都宮某与某戰処云、不審、至栃木、家頗庶、類江戸乃宿、此日行路坦然少下、程十二里、夜懷吾楳而就寢、三日、陰、出宿西行、過富田・茂呂・犬伏・天明、此際大抵平衍烟也、而所領則壬生・宇都宮・濱松・島山等其外小旗本入雜也、出天明右一小村、岐路為二、則取右路行田疇間、此間多桑樹、家々札々相聞家頗富、行三里至足利、足利西南有一流、曰瀬波川、行程八里、宿足利、足利觀學校、學校小野篁奉勅建之八百年前、快元和尚八百年前人也、入唐セシ人也、自是為僧所預云、昔ハ足利東南數丁十年寺村ニアリ、八九十年前罹火災後移今地云、正門有額〔原書作階〕楷書學校二字、漢人龍莒筆云、有中門扁杏壇、紀州先々公所書、聖廟扁大成殿知音院法親王書ナリ、殿六楹、正面為孔子像木像宗ヨリ所伝、長二尺許座像ナリ、甚有古色、前顔曾子思孟子ノ牌アリ、左ニ小野篁ノ像アリ、木像ナリ、是亦古色アリ、又觀書庫一箱書上板、上杉憲實所納、尚書註疏宗〔宋カ〕板本其外詩經写本尤古ナリ、易・詩・左氏・孟子注疏・京板周礼小本アリ、概紙上大書學校公用四字、有印象野之国学四字、又有金澤文庫本、此地東筑波西淺間南富士北中禪寺、又學校南西間有淺間

山、甚魯昌平邑因為學校云イカン、

○学ノ東北有両甲斐山、往時長尾但馬守十八万石ニテ

所領云○義貞ノ城跡ハ上州新田郡太田ニ有ト云○西場

ノ領主人見又兵衛ヨリ年々米一俵ヲ学ニ納ル、ト云、

四日微雨、出宿、沿ラボ川而下、左見十年寺学校旧趾、

至猿田渡川、過梁田駅外及野田至館林、三科文一ニ書ヲ

与欲見之、文二不居、又置書而去、二里而至板倉午食但

館林、又行二里余臨利根川、上偶有舟、呼之乘而下五里

至關宿、時此間原文欠、乘船処曰泉、下二里至栗橋、暫上

陸、但以川関也、栗橋隔川有中田駅、駅下十丁而川分為

二、一注銚子注中川也、

三八 参考 阿部家々記鈔

安政五年戊午

正月十五日、正教登營、營中白書院縁頼ニ於テ、老中列

座月番内藤紀伊守ヨリ付付ヲ以申渡ス、左ノ通、

旭日丸其外御船々御製造、且深川越中島調練場御取

立等之御用、亡父伊勢守勤役中取扱御軍艦御造立共

御草創之儀ニモ有之、最初ヨリ別テ心配骨折候処、

此度御出来相成、御喜悦之御事ニ被思召候段、御沙

汰之事、

七月五日、正教儀幕旨ニ就テ登營、黒書院ニ於テ老中列

座内藤紀伊守ヨリ達ス、左之通、

松平越前守(慶永)事思召御旨モ被為在候ニ付、隠居

被仰付候、急度慎ミ可罷在、家督之儀ハ松平日向守(茂明、糸魚川藩)

主(主)ニ相統被仰付旨越前守へ可相達旨、

右ハ親類ノ場ニテ細川越中守・山口丹波守ト共ニ此ノ達

シヲ受ク云々、

三九 佛蘭西条約調印人名(条約書別冊ニアリ、茲

ニ略ス)

九月三日佛蘭西ト通商貿易ノ約ヲ締フ、締約ノ人名如

左、

(忠徳、外國奉行)

水野筑前守

(尚志、外國奉行)

水井玄蕃頭

(清直、外國奉行)

井上信濃守

(利照、外國奉行)

堀 織部正

(忠義、外國奉行)

岩瀬肥後守

御目附

〔無防尉〕
野々山鉦藏

佛蘭西使節ンユワンハヘテイステルイスコロノカミ
調印、

四〇 梅田源次郎等捕縛セラレ

〔頭注〕近衛家日記參看「山田義昌夫婦ノ演説筆記參看」
九月七日梅田源次郎初メ十余人召捕ラレテ、關東へ綱

送ス、此時西郷吉之助（隆盛）薩公ノ命ヲ北條右門ニ伝
フ、依テ右門京師ニ登ル、

四一 參考 橋本左内事蹟

是書ハ越前国老中根雪江氏ノ筆記セラレタル草稿ニテ、塗
抹竄点ノ俚ナルモノヲ、其家嗣牛助氏ヨリ勝野正滿氏ニ寄
示セラレタルナリ、今氏ニ請フテ茲ニ録ス、字句等或ハ穩
カナラヌ所モアルヘケレ共、敢テ改削シテ眞ヲ損センコト
ヲ恐レレニ一字ヲ増減セス、

橋本左内、名ハ紀、字ハ伯綱、世医ヲ業トス、生テ而穎
敏喜テ讀書、為人軀幹稍ク五尺、白哲孱弱殆ト美婦人ノ
如シ、而シテ志氣慷慨、沈毅英果ニシテ胆略人ニ絶ス、
十五六歳ニシテ嶄然トシテ大志ヲ懷キ、学ヲ勤テ手卷ヲ
積ス、応答進止老成人ニ異ナラス、窃ニ姻党ノ擊劍家ニ

就テ其術ヲ学ビ、岳飛ノ為人ヲ景慕シ、自ラ景岳ト号ス、
家居孝悌、好シテ藩中有志ノ長上ニ師事ス、午後笈ヲ負
テ京攝ニ遊ヒ、漢洋ノ諸名家ニ出入シ、学術大ニ進ム、
〔編九〕
年十八、父ノ後ヲ襲テ医員ニ列ス、君公其異材ヲ將テ刀
圭ニ終ン事ヲ愛惜シ、医籍ヲ脱シテ親衛隊ニ編入シ、江
戸ニ遊学セシム、左内感奮意ヲ鋭クシテ、専ラ経世ノ学
ニ志シタリ、当年海外ノ強國、比々幕府ニ迫リ、和約貿
易ヲ要求シテ、嚇スニ兵威ヲ以テス、
朝廷又斥攘ノ議アツテ、之ヲ幕府ニ令責ス、於是幕府ノ
窘迫殆ント極リ、天下岌々トシテ、志士腕ヲ扼リ、齒ヲ
切ルノ秋ニ際シ、左内慨然奮勵、幕府ノ衰弱ヲ扶植シ、
帝室ヲ翼戴シ、夷虜ニ接シ、国体ヲ隊サス、
〔編九〕
皇威ヲ海外ニ更張センコトヲ欲シ、広ク天下ノ豪俊ニ交
ル、于時吾公癸丑以來徳川公ノ多病ニシテ、將軍ノ職ニ
堪ヘ玉ハス、加之宇内ノ形勢和スヘク、戰フヘカラサル
ヲ洞見シ、令嗣ヲ建テ、幕府ノ基礎ヲ固クシ、
朝旨ヲ奉シテ、威信ヲ以テ、外国ヲ綏撫センコトヲ思慮
シ、薩侯齊彬君ト心ヲ協セ、謀ヲ一ニシ、之ヲ宗室ノ中
ニ索メラル、ニ、一橋公長シテ且ツ賢ナリ、因テ之ヲ閣
老ニ勸奨セララル、或ハ面上、或ハ紙表薩侯ト更番、月

ヲ経、年ヲ閱シテ、幾數回ナルヲ不知（昨夢紀事及ヒ島津家史、或ハ石室秘稿參看）、閣老其議ヲ嘉シテ、拒ムコトナシト雖トモ、又因循シテ敢テ果サス、延テ安政丁巳^{〔四年〕}ノ夏ニ至リ、公江戸ニ參觀シ、^{〔病力〕}府下ノ景況ヲ觀察セラル、ニ、外国愈迫リ、將軍家益々多病、

朝議亦大々急ナリ、公惶懼憂戚、大ニ前議ヲ張テ、比々閣老ニ建白シ、又在廷有志ノ諸有司ニ咨詢ス、而テ窃ニ聞ク、紀侯幼弱ト雖トモ、近親ノ故ヲ以テ養君タルヘキノ幕議アリト、公若悶^{〔苦力〕}ノ懷ニ堪ヘス、急ニ左内ヲ江戸ニ召テ、某議ヲ咨フ、左内云、自今幕政閣老ニ出テ、失措少シトセス、就中外国ノ事ニ於テハ概ネ

朝廷ヲ敬遠ノ地ニ安置シ、専ラ幕議ニ決セン事ヲ庶幾ス、祖宗尊王ノ典型ニ悖リ、君臣ノ大義ヲ紊ル、之ヲ以テ朝廷ノ譴責ヲ来シ、併テ天下志士ノ憤懣ヲ醸成セリ、此ノ弊政ヲ矯メ、正道ニ反サスンハアラス、而シテ反正ノ力ハ嗣君ニアラスンハ能ハス、公ノ曾テ議スル所、惣テ臣カ素ヨリ希フ所ナリ、敢テ心力ヲ竭シテ、知遇ニ報セスンハアラス、然レハ則チ營中閣内ノ事ハ公宜シク之ニ任スベシ、幕府諸有司及ヒ諸藩君臣草莽ノ有担当^{〔志願カ〕}シテ、愆愆説論スヘシト、爾來鞠躬尽力、寢食ヲ廢シテ之ニ從

事シ、遂ニ幕府及ヒ府下ノ有志左袒シテ、

朝廷ヲ奉スルニ幕府ヲ以テシ、幕府ヲ扶ルニ橋公ヲ以テシ、轂ヲ推スモノ十ノ八九ニ至ル、就中幕府司農川路左衛門尉ハ老狡確實ニシテ輕信セス、内閣ノ參謀タリ、人皆敬憚シテ犯ス者アル事ナシ、左内説入一回川路節ヲ折テ屈服ス、他日君公柳營ニ於テ閣老堀田侯ニ对接ノ事アリ、語次ニ堀老閣云、今朝川路ニ語ラク、越藩橋本左内猶弱齡、昨夜来ツテ僕ニ説ク、其議論剴切精到ナル、一々肯綮^{〔梁力〕}ニ中リ、僕ガ半身已ニ宰割セラル、カト覺事、僕年来対客無數未タ如此可畏ノ人ニ逢ス、ト舌ヲ捲テ驚歎セリ、之ヲ公ニ告テ、其良臣ヲ得ルヲ艶羨セラレシナリ、左内精神透徹、説キ得テ信愛セラル、事概ネ此類ナリ、老大ノ諸豪ト雖トモ之ヲ遇スルニ、先生ヲ以テス、受重^{〔愛心〕}セラル、亦如此、此秋幕府墨国公使ノ庄迫ニ堪ヘス

朝廷ニ告テ、開港和約ノ允準ヲ希望シ、先ツ林大學頭ヲシテ、京師ニ造ラシメ、外国ノ事情ヲ説入シ、尋テ戊午正月堀閣上京シテ、川路左衛門尉・岩瀬肥後守等ヲ率テ上京シテ勅許ヲ乞ントスルノ事アリ、於是公左内ニ命スラク、此行ヤ外国ノ事ニ於テハ、恐ラクハ幕權ヲ以テ朝議ヲ庄スルニ出シ、又養君ノ事ヲ奏定センモ知ルヘ

ト奉存候(尤書付ヲ以モ細々申上置候)、尤於同表モ細々申上度、其上明日共ハ決シテ(メカ)拜謁相叶可申候間、益(益)引勤メ候様、勿論 老公之御望之処(齊興公御官位昇進ヲ云ナラム)迄モ御ニララセ(可相尽參仕候間)相成、得ト御腹ノ座リ候処、可被(可)尽候間、必御心配被下間敷候、守衛人数何レモ中途ニ被差向、早々着坂仕候様御達ニモ相成、誠ニ難有次第ニ御座候、明日間(閣部控務)閣(間閣ハ閣部下總守)着之賦ニ御座候間、若哉暴発仕候ハ直様義兵ヲ拳可申、左候ハ、土州(大坂城代土屋)之兵ハ応シ可申、尾張モ同様ト相考申候、間閣等之兵ハ柔弱故ニ打破リ可申、左候ハ、彦根ヲ乘落(彦根)候様可仕候間、其節ハ關東ニテ兵(水戸兵ヲ云乎)ヲ合セ、打崩候様御責可被下候、

一關東之模様、有馬(新七)着之上ハ決テ相替可申候間、何卒雷発之向(有馬新七關東往來日記參照)ニ御座候ハ、早々御知セ可被下候、左様無御座候テハ京師之御備ニモ相拘候テ、第一不当相成、御国元エモ申遣、人数練登(鹿兒島有志中へ報告)候様可致事ニ御座候、

一有川(有川七之助)方御取替金之儀ハ、私方ヨリ直様返弁致置候間、御安心可被下候、

一御国之儀ハ何事モ表向仕掛候筋ニ相成、至テ仕合之事

御座候、其外 朝廷之御模様ハ杉浦(一)ヨリ御聞取可被下候、省略仕候、

九月十七日安政五戊午 西郷吉兵衛隆盛

日下部伊三次様

堀 仲左衛門様

斯書水戸家ニ藏ス、明治廿四年七月同家編輯員服部敏氏廣貫ニ示サレタリ、水戸ニ保存ノ所以ハ西郷カ日下部ニ贈レルヲ、日下部水戸ノ同志ニ示シタルナラム、○西郷滯京中ノ書中人数云々ハ、鎌田出雲滯京近衛家僧月照ヲシテ、御守衛ノコト御受ヲナセシ事実、或ハ島津豊後へ説キタル事由、齊興公御許容アリシ云々ト符合セリ、近衛家所藏書第(ママ)卷參照、

(大西郷全集ならびに西郷隆盛全集にて校訂)

四三 参考 關老阿部侯ト外国処分御親談之事実

(安政元年頃)

嘉永ノ末、安政ノ初メ、外国船浦賀又ハ長崎其他へ屢々渡来、通信貿易ヲ乞フコト切迫ナルニ依リ、幕府措置ニ困ミ、狼狽極リ、當時ノ關老ノ首座阿部侯ハ從來公ト親交ナルカ故、折節親話或ハ書信ヲ以テ御意見ヲ問ハレシ事寡カラス、或ル時西郷隆盛へ御譚ニ、幕府ノ形勢モ狼

狼極マレリ、実ニ氣ノ毒ナル世トナリタリ、阿部モ當時ノ立場ハ重荷ト云フヘシ、何分勇断ナキ故、手後レノ事多シ、存意ヲ述ヘ遣シテモ水泡ニ帰スル事ノミナリト、將軍家モ長久ナラサルハ、阿部ヲ除クノ外當時人物ニ乏シト、非常ノ世ニハ非常ノ人物出テサレハ、此世ヲ維持スルハ甚タ難シト御歎息アリシトナム西郷カ或ル友人ヘ親話

四四 出水郷大野原及ヒ庄村海浜ニ新田開発ヲ

命シ玉ヲ

出水・高尾野ノ両郷ニ跨ル街道ノ左右ニ在ル畑地及ヒ原野ヲ、水田ニ開墾スヘキ旨命セラレ、或ハ庄村ノ入灣ヲ埋立テ、田地トナスヘキ旨ヲモ令セラレタリ、両所共ニ安政元年甲寅春御下国ノ際親シク御巡見、大野原ハ水利不足ナル旨郡奉行等言上セシニ、公仰ニ、上宮山ノ水ヲ引カハ充分ノ水利ナリト雖トモ、山中ニ谷アリテ容易ノ工事ニアラス、入費モ莫大ナリト上申ス、公仰ニ、谷ヲ埋ルカ又ハ大樋或ハ石橋ヲ架シ小林郷ニ石橋ヲ設ケ、水利ニ架シタルアリ、之ニ例フヘシト宣ヘリ、此石橋ハ弘化ノ頃稻富良助カ架シタル者ナリ、水ヲ引クヘシ、即今ノ費用ハ必ス百年ノ後ニハ償フハ疑ナシト、両所共ニ着手セラレ、

今大野原並庄潟新田ト唱ルハ是ナリ（此水田今西島津家ノ所有タリ）、御逝去後モ連綿中村新介担当シテ其工ヲ終ヘタリ（福永直之丞覚書）

四五 考証 伊地知季安記事鈔

嗚呼盛哉々々、前政下情通於 上仁風被於下、日夜意委於政事、憂患世變俗衰土風沈滅、正學風勵武道而大振興、或於二之丸設文武之講堂、觀覽不時発令弛張善惡、或設常平倉治金山銅山建足兵富民之道、或造軍舟建水軍兵士之家、或龜鶴亭於境内設時務要具百工悉集、名曰集成館運漕左候也、公手自試百工大得守備之便衆物渾、

公手自明習練之精龜、於是土風競勉萬旬月一、而四夷百蠻率服之秋也、斯可謂中興之華也焉、於是日々荷大恩至下愚々夫各勉焉、安堵家職而更不有待聖代者也、宜哉君德可謂至尽也矣、嗚呼時哉不幸哉、当安政五之初秋國家之悲歎不知可言悲哉、敬拜謹願 公徳沢令名之大嗚呼亦宜奉觀、 公至繼世嘉永辛亥二月被大任創大業八年於茲心志疲勞之極自可有也、同三月御初公発駕江戸芝邸、次程ケ谷澤、明日鎌倉雪之下詣鶴ヶ岡藤澤、次十

一日小田原、十二日三島、十三日興津、十四日藤枝、十五日島田、此日大井川滿水依一日滯宿同廿五日伏見御、留卅五日

同廿七日曉發伏見邸行於陽明殿、被謁 左府公大納言

卿夜寅之刻過煇館、同夏五月魔府御着、斯秋巡見西方

之諸郡、而興軍備正風俗救困窮、二旬余而到於指定之(箱力)

溫泉、於是滯留二旬余而光婦本府、十月廿一日妙圓寺

御參詣ヨリ新寺夫ヨリ江被為入、十一月廿五日御煇殿、(脱字アル也)

同壬子正月設常平倉明令審賜手書於太夫、自太夫達士庶後皆同、初夏正文武勉勵

龜服等賜手書於太夫、同八月念一日廳城發駕、同十月御着於江

府芝邸、公令名愈隆而諸侯及旗本於日拜視者多、公雖

不得寸暇、月六次召筒井紀伊守論議經伝平日侍君側、者皆拜聞、戶

主隔簾御聞侍女數十拜聞、宮中宮外大振、此冬 公任

中將、同癸丑四月發駕於江戶芝邸到於中國、炎威甚衆

惱者多、公深憂患之手自調業施於庶人、同六月御着

於廳城、斯冬巡見東方之諸郡、詣神社仏寺如旧例、觀

覽每郡武芸軍備、大一新士俗、一日 公指法華嶽寺鄉

士隨從凡八百五拾人四ヶ郷、他領過中村等拜觀者榮之、

自古隨從不聞如斯、賢主亦未聞如斯、士人大感賞之、

每巡郡民慕之如父母、豈所謂同東面与西面哉、君德至

誠可謂至也、月參而光婦本府、同七甲寅年正月魔府發

同三月伏見御着、留此三日行於、同月御着江府芝邸、到於茲

駕陽明殿被謁、左府公亦遲過殿、公令名益盛希拜視者愈多、同四月憂患近侍之風俗怠弱

之旧弊、賜手書有司正之、自同閏七月朔日公疾病、同廿

三日 郎君虎寿丸君被侵炎暑、時病甚數医集會、雖奉万葉

而無其檢、及夜半終夭亡、嗚呼悲哉々々、僅六歲而有

聡明大智、六霜言行謹有宜奉觀、雖然臣正処其時今考

其時振筆而不忍拳其事実、泣涕而止當後補於是、上下

勿々危難係於此時、公既雖過於三旬疾愈重、上下憂

患是極、捨身命禱神社、到於中冬疾漸輕、雖然士庶猶

未安、射金的奉鶴ヶ岡上下実困、到於乙卯之春大順快、(安政二年)

初夏一日公為保養行於田町之邸、至於茲人心漸安堵、

自斯逐日全服、上下唱万歳入暗室初如觀朝暉、今不能

尽其若与怡不能尽、同冬十一月地大震、殿中破裂府内

府外大乱死多、於是 公及后 公女渾徒澁谷之邸、殿

亦狹不日增修假殿公勞心志、於茲久 公応万事機變之

妙計敬而有可感賞、同丙辰十一月 公女篤君為陽明殿

養女、奉称 篤君御方入興 將軍家、同四年丁巳春三

月發駕澁谷邸同四月伏見御着、行於陽明殿被謁、左府公等如前、

一日微行而行於嵐山、素為檢察、禁裏護衛等也

同五月入於廳城、自夏到於冬軍備大成、冬十月正学風

勵文武兩館大振枳大夫以下近侍為出、公自繼世到於茲凡举

大略如斯、憂國家之深愛士民之厚出明令之審人君之大德備矣、嗚呼正可謂至尽也矣、公素尊 天朝諸侯無偏倚、興廢礼厚急務追遠救窮民用節儉省朝夕之膳部、嗚呼仁政積善可謂至也矣、伝聞 公之喪達

天朝詔曰、是朕不德是極矣、悲淚黍雨沾

紅顏、非斯誠忠積德之謂哉、而下幕府・尾・水兩卿大

小各多悲歎、非斯仁德厚之謂哉、公在而公武安堵

公冠席而国主固結、公在而外夷之患漸輕也、拳而為

當時賢將者然矣、到於今外患内憂公武有故障所以、上

下踏虎尾者有大故哉、急々々

同五年初夏行(初九)行指宿温泉、同五月蘭人与幕役蒸氣船ヨ

リ来ル、公直騎到墨浜、召幕役及蘭人万事責問、日

月魔府帰城、幕役蘭人本府之港ニ来ル、一日召幕役及

蘭人磯龜鶴亭、蘭人候服從 公ノ賢明ヲ感以下欠

四六 四書五經等出版セラレン事實

山崎嘉点 四書集註全部十冊 薩摩府学蔵版

嘉永七年甲寅改刻

薩之為国。襟帶山海。土沃民樸。士馬精強。自古以英

武聞。建業已来。文学寢興。乃者

世子君欲為一藩子弟刻四書。而諸本多訛誤。惟山崎闡齋讀本為正。因命刻之。顧夫闡齋。以朱子為宗。講解

精密。傑出一世。然 世子君。則有取於校讐之精。訓

点之正耳。非崇奉其学也。夫朱子註釈。闡明孔孟之旨。

而孔孟之教。不越乎日用彝倫之間。学者読其書。究其

理。内之心存誠敬。無私意之或擾。外之身履規矩。無

非礼之或犯。推而求之人情。達諸政事。至於古今治乱

成敗之故。亦靡弗通曉。則体立而用行。心和而理明。

可謂善学者矣。且文武相順而濟美。古今之通義也。薩

之子弟多勇武。資之以文教。庶幾材德斌々。莫不完備。

此乃

世子君之本意。而子弟所宜遵奉也。故余推其意而序之。

弘化乙巳夏五月林讒序

古之治国莫先乎建教。而建教之道必以經伝為本。蓋經

伝乃所以立德明道經綸天下国家。不可一日不学也。薩

州地居賜谷之東。素重 尼山之教曾建。文廟于城西。

左設学校。広聚諸生。教以人倫。近来閭塾里序。接踵

而起。雖三尺童子。亦皆崇儒重道。執卷遊于芸林。而

文雅之風彬彬大興。是所謂上好学則下自化者也。其為

学之次第。以四書為首。而五經次之。六芸則又次之。

但所學諸書。皆出于他郷。不可以一二日購之也。況四

書乃初學入徳之門。而読之者甚多。豈無欠之者乎。今

少将(齊彬公) 公聡明天授。學問日新。慮被域。広布横

経之化。徳彰日表。不揚論道之風。爰視書士之益繁。

憂書冊之未裕。特命匠師。新刊四書集註。流布於世。

永示槭樸作人之至意。嗟乎

少将公教育臣子。徳沢所及。深且遠也。日後儒風愈振。

英才愈起。以文章華国。以忠信佐君。而著光于史冊者。

曷勝屈指。余才疎學淺。不敢妄操筆。但命及再至三。

難獲固辭。故贅數語。弁之簡端云爾。

時

天保十四年歲次癸卯使者尚元魯謹跋王子玉川カ実名

本藩士ハ從來文学粗ニシテ、唯文維尚ヒタルノ風習ナリシ

ヲ以テ、公ハ文事奨励ノ要四書五經及左氏傳・孝經・春秋

等ヲ出版セラレ、藩内一般ニ廉価弘ヒ下ラレ、便宜ヲ与ラ

レタリ、從來江戸・大坂ヨリ買ヒ下シタルニ依リ高価ナル

ノミナラス、適々知己ノ手ヲ經テ買下シ、或ハ一二ノ書店

アルモ、大坂ヨリ仕入レ、運輸ノ費用等ノ手数ヲ増シ、從

テ高価ナルカ故、貧困ノ輩ハ購求シ得サリシ故、書店ヲ開

カシメ、出版書ヲ下ケ渡サレ、販売セシメ玉ヒシヨリ、上

下共ニ弁ヲ得タリ、其事実ハ別卷ニ記スカ如シ(出版セラ

レタルハ弘化二年乙巳ノ年、御手許ノ經費ヲ以テ江戸ニ於

テ、訓点ハ林大學頭ニ依頼セラレタリ、則序文ノ如シ)

四七 参考 黒岩堅藏家記抄

照國公指宿御光越中(安政五年戊午五月)折角御釣ノ思召

立被為在、御船等鹿兒島ヨリ御召寄ニ相成、知林島方

限松瀬入方数ヶ所私拜命、則チ其辺取計申候処、無程

諸魚集附、右形行御届申上候処、其時分大早魁尊数日打

続、農民一同雨乞祈念祭ニ立至リ、右折柄ニ付御沙汰

ノ趣ニハ、ケ様一同困苦ノ砌御釣之儀ハ御取止被為在、

松瀬ノ儀ハ漁民一統へ施与候様御沙汰被為在、殊ニ雨

乞ニ付、太鼓・鐘等二月田近傍ニテハ御遠慮打止メ相

成候処、是又御沙汰ノ趣ニ、第一御前ニモ御同様雨乞

可被遊候間、鐘太鼓等ノ儀ハ不相交打明シ申候様御沙

汰被為在、一同恐縮無限、殊ニ漁民一同ニハ一入謝ス

ル言葉モ無之、難有次第御座候、以下略ス、

黒岩ナル者ハ元來指宿郷摺ノ濱浦人ニテ、政右衛門ト呼ヒ、

屈指ノ商人ナリ、琉球諸島往來ノ為メ、大小船数艘ヲ所有

セリ、少シク才学アリテ尋常ノ商賈ニアラス、国事ニ力ヲ
尽シ、私財ヲ耗シタル巨額、其功ヲ以テ城下士籍ニ召出サ
レ(調所笑左衛門カ執政中)、而シテ内外財政ノ下吏ニ仕
ハレタリ、

四八 新納駿河意見上申書

墨夷御取扱振ノ儀ニ付、從 京地堂上方上奏ノ趣有
之、被^{〔儀〕}腦

叡慮、關東へ

仰達ノ 御旨被為 在候由、御内々承知仕、右ニ付

御当国御手当向何様有之可然哉、存慮ノ程奉申上候

様被仰付、左ニ申上候、

一 關東御取扱振ノ事ハ私式可奉存儀ニ無御座、何モ閉口
仕候、乍去是迄ノ御処置於 京地御不安ニテ、以来御
取扱振リ相替候へ、是迄ノ御条約御変易可相成、左候
得ハ異人共難題可申立ハ一定ニテ、猶応接モ六ヶ敷相
成リ、詰リハ争乱ニモ及可申哉、誠ニ不容易時宜成立
可申奉存候、其期ニ至リテハ 御当国三方津海ノ御国
柄ニテ、一入防禦モ御嚴重不被備置候テ不叶、勿論御
當時御手当専務被仰付候御事ニハ御座候得共、猶一涯

実意ニ基諸所台場ヲ始、大小砲製造玉葉太分被備置、
訓練等モ猶無油断被仰付候様有御座度奉存候事、

一 江戸御屋敷当分モ守衛人数被差登置(嘉永六癸丑以來)、
大小砲モ御手当ノ事ニハ候得共、是以今一涯御手厚被
仰付候様有御座度奉存候事、

一 京・大坂ノ儀モ時機ニ依リ、守衛人数發裏御守護ヲ云
不被差出候テ不叶儀モ難計御座候間、是亦人数賦等被
仰付置度奉存候事、

一 御当国ノ儀ハ前文申上候通三方海岸、殊ニ琉球島々ヲ
モ被相抱、余国ニ違候御国柄ニ付、万一争乱ニ及フ節
ハ、江戸

御屋敷守衛ハ何程カ御手厚被仰付、其外江戸近海防禦
ノ儀ハ被及御断、御国中ノ御手当嚴重ニ被仰付候様有
之度奉存候事、

右ノ通大意申上候、諸御手当向ハ只今ヨリ一涯御手厚
被仰付度、尤今般 京地御評議ノ事(勅答ヲ云)ハイマ
タ關東御決着ニモ不至事ニテ御内通申上候訳ニ付、押
付ケ及評議、若何欸故障到来仕、以後御内通(領色)宸翰甲第号參信
対ノ意塞リニモ相成候テハ、第一御不便ノ儀ト奉存候
間、此涯至極内密ノ御取扱ニテ、御手当向ハ只今ヨリ

分テ御蔽重被仰付度儀ト奉存候、以上、

四月十三日

新納駿河久
(徹カ)

右ハ下總殿(島津久徹) 拙者兩人へ前方御書付被下

置、今十三日御前へ兩人被為召、心得ノ程細々御聞

被遊候ニ付、当朝認置罷出候上差上候書付也、

安政五年戊午四月十三日

四九 勝義邦齊彬公ノ話及ヒ久光公御書翰

四九の一

○この文書は、本文第十一号文書の二(勝義邦記事抄)と同文重
複により略す。

四九の二

○この文書の前半部は、本文第十一号文書の三(勝義邦記事抄)
と同文重複により略す。よつて後半部の文書のみを収める。

過日御過訪之砌、御話申上候前左府公安政五年御送之
御返書漸ク見出シ、且ツ其後転末附記候分共入御覽候、
猶又後ニ一言ヲ記申候、細ニ往事之跡ヲ思候得ハ、前
左府公当時之御苦慮不一方、終ニ御前代之御遺志御祖
述被玉候事跡、此短文中ニ相頸、敬服之外無之、且順
聖公御笑談中之一言、終ニ公ノ終身ヲ御觀察被成候御
眼刀、弥感服仕候事御座候、以上、

(明治二十年)
十二月十五日

安芳

吉井友實殿

五〇 京攝之風説

奥州仙臺家老片倉小十郎儀此節上京、堂上方之内野宮
家ハ親類之由、同家ニ窃ニ逗留罷在、何用ニテ上京有

之候哉之儀、野宮家ニテ被相尋候処、此度備中守殿(正徳、老中、佐
倉藩主)為御使御上京ニ付テ之儀ノ由、尤此度備中守殿ヲ

以從江戸表被仰進候御趣意ハ、江戸表ニテ諸侯方ヲ始
メ多分御不伏ニ有之、

御所向御返答之次第ニ寄候テハ、備中守殿エ仕掛ケ可
申内存之由、右ニ付兼テ人数モ手当致シ、右人数ハ江
州路仙臺領分ニ内密差置有之候哉之趣、小十郎密々之
噂野宮家被承、段々厚説得被致候哉之由(当時京攝ノ風
説、右之趣不取留風聞相聞候付、野宮家内聞ハ勿論、
江州路仙臺領之処急速探索仕居候付、虚実相分リ次第
可申上候得共、仮初ニモ不容易風聞ニ付、不取敢先ツ
一忖此段申上候、以上、

午三月二十一日

五一 洛中風説(原田才輔報告)

御返答御案文、昨十九日堂上方一同未申刻參

内被 仰付、右御案内ニテ御返答可相成候間、拜見之上難有可奉存旨被相達候処、大原三位殿不承知之由ニテ難儀ヲ被盈、抑御文言之字儀ヲ初、其外論被掛、彼是論判有之、昨夜迄ハ一向御返答御治定ト申体ニモ無之事之由、不取留相聞候付、此段申上置候、以上、

三月廿日

五二 御所探訪余聞(原田才輔密報)

此度之一条ニ付、御箇条之趣精々探索仕候得共、堅ク秘合極意巨細之儀ハ相聞兼、全浮説迄之事柄多可有御座候得共、承込候趣左之通御座候、

一元來關東ヨリ諸藩人心折合方之儀ニ付、

叡慮御伺之次第モ有之候処、右一条ハ於

御所向モ不容易事ト被 思召、御心配モ有之候由、孰ニ折合方之儀サヘ如何様共、關東御引受可被成トノ御事ニモ相成候ハ、御安心可被遊欵ニ候得共、是ハ素々御伺ニモ相成候程之儀、輒於關東御引受ト申手續ニハ相成間敷トノ御内評モ有之候由之処、存外御内評ニ

符合之御返答被仰越、則備中守殿(堀田)ヨリ被仰達候

ニ付テハ、右ハ内通致シ候者無之候ハテハ右之御返答ニハ相成間敷、先人心ノ折合ハ關東ヨリ御伺之一ヶ条ニ候処、御返答ニ關東ニテ御引受トノ御文言何共不都合不審トノ事ニテ、於

宮中禮儀被有之候処、東坊城家ヨリ右様之儀被不審ヲ立、議論ニモ及間敷哉ト被申候ヨリ、兼々同家内通ヲ一同疑被居候折柄、一同平日之宿意モ有之、旁大談判ニ相成候由、東坊城家(九条尚忠)太閤殿エ被駈付、内実内通之

次第并前談判之儀ヲモ被申上候由之処、太閤殿ニモ殊之外御立腹、一体同役ニハ如何ニ候哉ト御尋有之候処、駈ト相談被致候トノ答無之、又相談不被致トモ不被申何欵ニ半ニ被申上置、退出掛ケ廣橋家エ被立寄、御返答内実心付申上候儀相談被致候様ニモ被申述候処、廣橋家ニハ更ニ不被存候由ニテ、相談致シ候扨トハ以之外之旨、是又立腹被致候由、其後引統御役辞退願書(近衛家秘書中遺書存ス)被差出候事之由、然ルニ又一説ニハ東坊城家ヨリ右之次第書面ニテ被申遣候処、右比同家ヨリ廣橋家エ書面參リ候由、右之返事被差遣置候上、即刻東坊城家ヨリ被差越候書面之本紙ト、廣橋家自分

ヨリノ返事案トヲ所持参内被致ヨリ、頻リニ東坊城家
〔領書〕被檢中第 号参有
退役之仕宜ニ相連ヒ候哉之由ニモ相聞申候、

一 關東ヨリ当座ノ為メ御会釈多分之金子受納被致、猶事
成候上追テ御加増ヲモ受納可被致積之由、専ラ風聞致
候由(此儀受納千両又ハ五百両共申候、御加増ハ三百石扨ト
申候由)、又一説ニハ東坊城家エ兼テ生島ト申者(此生
嶋儀名所名前差当リ相分リ不申候付、精々探索仕相分リ次第
可申上候)方ヨリ被借入候金子之内、五百両計当節句前
返金相成候由之処、前書内通之疑念モ有之折柄之儀ニ
付、右返済之金子ハ全ク關東ヨリ御差贈之金子ニ可有
之、無左ハ当時御役中トハ乍申、左程潤沢之手許共不
被存トノ趣ニテ、弥以疑念相増、風聞高ク相成候事之
由ニモ相聞申候、

一 東坊城家ハ是迄議奏サヘモ余リ御勤無之家之処、大閣
殿御在職中御同人エ取入、廣橋家外ニ家程ヲ打越伝奏
被仰付候由ニテ、右等は迄ニモ偏執致シ、右三家ハ勿
論、彼是申居候堂上ノ向モ有之、其外何角意味合有之
向々モ有之哉ニテ夫トハ不申、此度内通金子受用等之
一条ヲ含、混雜致候事之由、

一 東坊城家ニハ、此度退役之趣意ハ全廣橋家之所為ニ被

存、殊之外同家ニ怒氣被差含、品ニ寄可被差違哉之氣
色ニモ被相成居候哉ニ内実相聞申候、

一 当十日比之由、三條(實萬)家ヨリ東坊城家被相招、密
々御退役之儀被論候処、同家被相拒候由、其節内府之
申条ヲ可被背哉之旨、三条家少シ言葉荒々被申候テ其
悞被相別、翌々十二日比ヨリ東坊城家被引籠候由、其
後御役被免候御内評、最初ハ御役被免候上禁足ヲモ可
被仰付哉トノ仕出シモ有之哉之処、左候テハ余リ廉立
身分之障リニ可相成哉ニ付、禁足之御沙汰ハ無之様ニ
ト議奏衆強テ被申、御役被免候迄ニテ相濟候事之由(謝
罪及辞表及ヒ光成卿添書、近衛家秘書中ニ存ス)

一 当十二日比德大寺家

御所表ヨリ退散掛ケ鷹司殿エ被相越、夫ヨリ 九條殿
エ被相越、掃宅掛ケ日ノ内之由刻限晝下、不相分、九條殿表門通
リ半丁計北手ニテ、大原三位殿継上下着帯刀被致、中
間者人被召連、行逢ニ理不尽ニ德大寺家駕籠之戸ヲ披
キ、屹相ヲ替、東坊城ト声被掛候処、駕籠之中ヨリ德
大寺之旨答有之候処、御印ヲ見違ヒ龜忽之段被相断、
其節同家ヨリ大原殿何故右様不意之事ニ候哉ト被相尋
候処、今度東坊城家堀田備中守エ御評定之儀ヲ内通被

致、不忠之至ニ候間、此所ニテ刺違ヒ我モ自滅致シ候
処存ニテ、左候ハ、

御所表一統以來之響ニ相成候ト存推参仕候旨答有之由
何分荒々敷景色ニ付、徳大寺家ヨリハ何等之儀モ不被
申被別、其俣相治リ有之候由、

一御所内之女中ト九條殿御密通有之、其取扱ニテ、東坊
城家悪クシミヲ受候ト申説、且九條殿之候儀カ実事ニ候哉
ト之儀(近衛家旧諸太夫北大路俊良實話紀参看)

准后御殿三上臈

実石井前宰相息女

高倉前大納言(永胤)猶子

てる女

四十四五才

右てる女儀、

女御御里方ニ被為在候節、上臈ニ被召出、相勤被居候
節、関白殿恋慕被致候儀有之、則先年承合被仰付、追
々ニ申上候書付散乱仕、相揃不申候得共、見当リ候別
紙二冊写差上申候、御密通ト申ハ、右てる女ニテモ可
有御座哉、右者長々病氣引籠、出仕モ無覚束旨ニテ、
願之通御暇被下、新清和院御召仕從

禁裏被進候御人之儀故、昨冬中御切米取越願書、去已
八月被申立候処、当月差入願之通被仰渡候由、

此儀御取締掛ニテ承合候処、右之通相違無之、御切
米取越之儀、当月朔日願之通御下知有之候旨申聞候、
右てる女之外ニハ至テノ老婆之外、近頃御暇被下候方

無御座候、然ル処てる女生涯被下物之儀ニ付、東坊城
家被相拒候由之一条、段々承合候得共、差当相聞兼申
候、猶精々承合聞取次第可申上候、

右精々心配承合之趣、書面之通り御座候、色々手筋ヲ
替再応承合罷在、殊之外延引相成候段、宜敷御断申上
候、以上、

三月廿五日

五三 宮堂上臨時参内

昨日御沙汰御座候堂上方群集之儀、承探候処、左之御
方々、

青蓮院	宮尊融法
関白	殿 <small>親王</small> 九条
近衛	殿 <small>尚忠</small> 忠熙
鷹司	殿政通
一條	殿忠香

三	廣	久	德	萬里	坊	裏	職事	廣	葉	清	中	萬里	御用掛	中	飛	中	三	正
條	橋	我	大	里	城	松	廣	橋	室	閑	御	里	山	山	鳥	院	條	親
殿	殿	殿	寺	小	殿	殿	橋	殿	殿	寺	門	小	殿	殿	井	西	町	愛
美	光	建	則	路	聽	恭	息	長	長	殿	宗	路	忠	通	殿	殿	殿	殿
万	成	通	實	正	長	光	嵐	順	順	房	有	息	能	富	典	允	愛	愛

右之御方々昨廿三日午刻比ヨリ参内、夜五ツ時比ヨリ四ツ時比迄ニ退出有之候由、右ハ去二十日附触流之廉ニテハ有御座間敷、御役儀又ハ御用掛ト奉存候付、御評議之筋探索仕候得共、一向採取兼候付、尚精々探索仕罷在候、尤群集之廉ハ延日ニ相成候哉、又ハ密事之御評議ニ候ハ、事柄相頭候テハ触流モ余リバツト仕候儀ニ付、不審ニモ奉存候間、虚実等迄探方罷在候、尚ホ承取次第可申上候得共、先此段一応申上置候、以上、

三月二十四日

五四 水戸前中納言中山中納言へ内書送致事件

探索

水戸前中納言殿ヨリ中山家へ御差贈ニ相成候由之御内書之儀ニ付、御書取之趣奉畏候、右一条モ段々探索仕候処、同家々来之内身柄之者、一旦暇被申渡候者有之候由ニ候得共、右暇之趣意彼是取沙汰高ク相成候テハ、結局御内書ヲ相洩シ候訳柄、風聞高ク相成、不可然トノ事ニテ、暇之儀ハ被差免、五七日計慎被申付候者有之由ニ乍不取留承込候付、人体之儀尚承探候処、発輝トハ不突留候得共、諸大夫田中駿河守(河内介ノ一類乎)・大口但馬守(大和守ノ誤乎)兩人之内ニ可有之由ニ相聞候付、右兩人方エノ手蔓相求、専勘弁探索中ニ御座候、然ル処御承知被遊候通、此節之堂上向之儀ニ候得ハ、不寄何事聞探之筋手入方、平日通ニハ参兼候付、急々突留方出来之儀難計奉存候間、追々延引之儀相願候儀モ奉恐入候得共、何卒宜敷御賢慮之程奉願度、右之段一応入御聴置申候、猶延引御断書別紙ニ相認差上申候、以上、

四月四日

五五 此間關東ヨリ御返答之 勅答御文段之趣

意

神宮始被対 御代々

東照宮以来之儀御变革之処如何 思召候、其辺於關東

御勸考被在之候様子之由、

一 左之趣御添書ニテ御達可被成哉、未御談シ未定之由、

伊勢之地ヨリ五里四方、諸陵ヨリ三里四方之内エ夷

人立入間敷様トノ事、

前段御文言、昨夜八ツ時比漸御取極メ、今日午刻比迄

ニ御伺書廣橋殿方ニテ出来、今明日之内ニ叙

覽可相成由、

一 十四日比備中守殿(堀田)御参 内之上ニテ、右之御

返答可有之候由、其砌川路殿(聖蹟、勅定奉行)・岩瀬殿(宝篋、目付)エモ御酒肴可被

下哉、是ハ御評議中之由、

一 改メテ十七八日比御暇参 内、其節關東エノ御返物并

御拝領物有之由、

一 關東ヨリ御返答之御趣意ハ、關東ニテ御出来無之、青

蓮院宮并東坊城御相談之上、東坊城家ニテ御内々御直

筆ニテ御出来、今度御上京之御方之内へ極内御案文被

遣候付、關東エ其俣御達相成候付、其御趣意ニテ御返

答被仰進候ト之事之由、右ハ何レヨリ相聞エ候事哉難分候得共、不取留事乍ラ

御所表御混雜ニ相成、東坊城家昨日御退役之御願書御差出被成候由、且又不取留惡説ニハ候得共、太閤殿・青蓮院宮・東坊城家全御同腹ニテ、一旦御評定相決候事モ其後違変相成候儀、間々有之由、

一久我殿今度之一条御評定之節々兎角御摺レ合有之、御引籠ニ相成候付、一昨日坊城家ヲ以テ御出勤之儀被仰諭候処、何角御取合ニ相成、坊城家俄ニ御疝痛ニテ御退散之上、同日ヨリ御引籠相成候付、議奏衆甚御無人ニ付、御出勤迄加勢中山家・正親町三條家へ被仰付候由、

一江戸表エノ御返答振御銘名御存寄有之、容易ノ事ニ無之、有体書類候テハ此度御上京之衆之内ニ怪我人モ出来可申場相成間敷共難申哉ニ付、廣橋家ニハ、東照宮以前ヨリ都テ武辺エ御任セノ儀ニ付、穩之御答有之候方、奉対先御代テモ無此上儀ト再応被仰立候処、漸ク前段之御趣意ニ御治定相成候由、

一青蓮院宮へ川路殿御内々御參

殿有之、何角御密談モ有之候由、且ハ今度之一条關東

江御内通モ有之由ニテ、一折簡条ヲ以、関白殿ヨリカ青蓮院宮へ御尋相成、御答之趣奏聞有之候処、

主上殊之外御立腹ニテ、先ツ江戸表エノ御返答先日來其尽ニ相成、右之調手間取候事之由、

一兵庫開港之一条何レニモ御除之儀、此度之

勅答ニ御書加可相成哉、今一通別紙ヲ以御達可相成哉、今少シ難相分由、

以上記スル処、真偽相半パス、

五六 關東へ御沙汰書

今度之一条不容易、奉

神宮始 御代々エ被為対候テモ可有如何哉、深被腦(腦)

叡慮候、至此期候テハ人心之居合国家之重事ニ候間、三家以下諸大名之赤心被 聞食度思召、今一応被下

台命、各所存被為書取入

叡覽候様、御沙汰之趣及言上候処、

叡慮之趣御尤之御事ニ被 思召候得共、人心居合ノ儀ハ如何様共關東ニテ御引請可被遊トノ事及言上候処、

人心居合之処ハ先以 御安心被遊候得共、

神宮始 御代々エ被為対候テハ何共恐多、

東照宮以來之御制度ヲ御变革被為在候儀ハ、天下人望如何ト 思召、再応被^{〔脱カ〕}腦

勸慮候間、何共御返答之被遊方無之候、此上ハ於 關東可有御勘考様御頼被遊候事、

五七 堂上九十六名建言〔八十八名カ〕

同意之輩恐多候得共、為國家不顧万死申上候、此度關東御返答之趣不被為止御事トハ、奉恐察候得共、不顧多罪奉言上候、去月被仰出候

神宮御始御代々ニ被為對、如何可有之〔裁脱カ〕被^{〔脱カ〕}腦

勸慮候事、実ニ重大之儀ニ候処、何共不申上、人心居合之儀ハ引受候趣 言上、堀田備中守城使トシテ上京之旨趣トハ相違之廉有之、如何ニ存候、將又此度御返

答ニ、關東ニ御頼被遊候旨相見候、左候得ハ条約以下物テ關東存意之通リ取計候節、再応被仰達方無之哉、

然ル時ハ天下之人望ヲ塞キ、朝運・武運相共ニ衰弊致シ候様可相成哉ト深歎息仕候、猶又内乱之程難計、一

同憂苦之至候、御返答御文面之内、御返答之儀被遊方無之、此上ハ關東可有御勘考様御頼被遊候ト申^{〔脱カ〕}御文

面御差除ニ相成候様、伏テ奉願度候事、

〔脱カ〕
〔三月十二日〕
堂上連名

凡九拾六人

申立之趣関白殿ヨリ被及言上候処、不無理趣意ニ 思召候間、御評議之上可被改儀モ可被為有旨、関白殿被命候趣、廣橋前並相被申候事〔八十八人ノ誤ナラム〕
〔大日本古文書纂末外國關係文書〕にて校訂

五八 非藏人三十六人建言

内々奉歎願口上之覺〔裁脱カ〕

墨夷申立之儀、不容易儀ニ付、段々

公武御僉儀被為在、此節御決答モ可被為在之風聞承知仕候ニ付テハ、微々之私共猥リニ申上候義、何共恐懼

多罪之至奉存候得共、不堪憂苦候間、不顧前後敢テ言上仕候、抑モ人心居合之儀、關東ニテ御引請之趣ニ付、

御安心被遊候トノ御事、乍恐何共不審之至奉存上候間、何卒今度關東ニ御決答之儀、従來之御制度御变革難被

遊、且人心之居合方之儀、列侯之赤心被^{〔被聞召度旨被仰立度ト奉存候天〕}聞食度儀ト

仰立度奉存上候、実ニ此度關東如御申立御許容ニ相成候ハ、乍恐

皇国開闢以來之御武威、今時萎蕩仕候儀ハ異日若蕃夷

上陸乱暴仕候節、勤王事候武士等モ無之様成行候得ハ、
此上之儀御^(行カ)大事ニ奉存上候間、何卒今度御決答御文面
之内、御安心之三字、最末此上ハ於關東可有御勘考
様御頼被遊候事トノ一句、乍恐甚以テ歎ケ敷奉存上候
間、此等之御文言御省被為在候様、内々奉歎願候、此
段宜敷御取成之程偏奉願上候、以上、

^(號カ)
〔午三月十三日〕

非藏人連名

三十六人

右之趣、殿下、議奏御第一久我殿・廣橋殿而奉行欠夫
昨夜願之御文面ケ所被除候間、可致安心之旨、奉行西
洞院殿被申渡候事、

(大日本古文書幕末外国關係文書にて校訂)

五九 堂上諸卿へ賜金

今度之一条ニ付、群参之堂上方エ從

禁裏被下物有之哉ニ風聞御座候付、其筋合探索仕候処、
八拾八人之内醍醐家・東坊城家相除、其余一同之衆へ
金三百疋ツ、拜受、外ニ八拾八人ニ相後レ、追テ同趣
意被申立候衆七人有之候由^{差向名前相}分リ不申候、此向ハ金貳百疋
ツ、拜受、其節之廻章之由、左之通、

(頭註)東久世伯日記參看

今度之一件、去月十二日列参之輩誠忠歎願之儀、格別

御満足ニ被為在、猶又誠忠報国之志可有之趣被
召候、右ニ付過日自關東進獻之品、以 思召誠忠之
輩エ賜之候、右之御品当番所御方之分、明後十七日
爲定エ被渡候旨ニ候、御礼之儀ハ自十七日小番参勤
之便議奏衆迄^{但不及表使、而公}御礼可申上旨、^{三条家}右大将被
申渡候由、中山大納言被演說候事、

一 右ニ付若年之輩任血氣、猥ニ参集申立之儀、杯無之様、
議奏衆ヨリ為心得被示候事、

一 右之御品自關東進獻之御配分ト申訳ニテハ無之、実
ニ以 思召賜候旨、是又為心得被示候事、

右之趣今日爲定御用召不参候間、大炊御門大納言被伝
候、仍申入候、誠ニ不存寄御褒美之御沙汰、御平ニ深
畏入候、弥可尽精忠報国恩儀候、委曲可有面上候、御
回覽明日中可返賜候也、

五條家

四月十五日夜

爲定

追テ申入候、明後十七日モ爲定不参候ハ、次之御
方エ御参可申入旨ニ候、爲定過日ヨリ風邪平臥候間、
三室戸殿乍御苦勞十七日已刻過御参

(東坊城家息)

朝可給候様頼入候、且又尙少納言へハ不被下旨、内

々為心得被示候事、

右之趣相聞候付、此段申上候、以上、

午五月

六〇 東坊城歎願事件之説

東坊城家親類中ヨリ歎願書被差出候由、尤委細之儀ハ相聞兼候得共、東坊城家御役被 免候一条之由ニテ、同役廣橋家ニモ何カ次第柄有之候由、則言上ニ相成、此節廣橋家ニモ内実心配被致居候儀之由（近衛家秘書參看）

一 廣幡家外ニ両家計此阿家名前不相分由何レ共相分兼候得共、統合之大名衆当地ノ留守居屋鋪エ自然非常之儀有之節ハ、人夫用達具候様頼談被致候由之処、先日以来

御所向エ相聞、今般之一条ニ付テハ御警衛向之儀、關東エ被仰進置候儀モ有之候処、乍内々モ私ニ手当ノ人夫等右様之先エ頼談ニ及ヒ候儀ハ、第一關東エモ不相濟、殊ニ此節柄人氣ニモ差障リ可申端ニテ不宜敷候間、早々右頼談取消相成候様可被可取計段、（符カ）内々御沙汰モ有之候由、

一 先日一応申上置候大原家金談一条之儀、其節相聞候通

右談受候モノヨリ相断候処、断之次第大原家至極尤ニ

被聞請、其外息始家族エモ不申明、秘密之存立ヲ如何ニ別懇迎相頼候儀ハ、自分之不束ニテ今更恥入候次第必聞流ニ致具候様、自分ニモ右存立ハ最早絶念致候儀之旨、尚内密被相語候由（以上記スル処真偽相央ス）

右之趣寄々風聞等相聞候付、此段申上候、以上、

午五月

六一 洛中之評判

御所辺ニテ出来候哉之由、

美の紙や備中紙をもみこなし

尻ふき紙にするそ関白

かにはゝをたれし堀田の京登り

娑婆の名残りに都見物

松かれて牡丹はしほむふじは咲

菊の匂ひはひびにこうばし

山吹を八重九重にちらすとも

東男の身にはなるまい

聞たほどから見の見へぬ鷹の爪

末はとうふのすい口となる

東より大閤かねで林たし

すへおそろしき牡丹なるかな

大切なきくをは尻にしひたゆへ

葵かをしてたれる備中

大閤にそふべき金もふしを喰ひ

林も間にはあはぬとんちやん

唐人のけつを堀田かほられたか

欲もはあ／＼たれた馬鹿との

江戸かたの牡丹は藤にからまれて

あれとら將軍の葵顔つら

延過た松の緑のしんをつみ

梅にやろうか竹にやろうか

しんとして堀田かひなきから井戸へ

雲のうへ人はまりこまねは

金は飛さくらは来る世の中に

何とて町のさひしかるらん

右

藤か芽を出すと牡丹の花かおり

よく張た太鼓にはちはあたるらん

九条いも堀田か口にあいかねる

方ほふよろこべ藤はお役にたつたそや

六二 近衛忠熙、鷹司輔熙、其他公卿建言

戊午二月堀田正睦京師ニ至リ、伝奏光成(廣橋)・聰長(東坊城)ヲ旅亭ニ迎へ、外国ノ事情ヲ開示シ、以テ宸襟ヲ安セント請フ、曰、嚮ニ和蘭國ノ使節其國書ヲ齎シ来テ、我幕府ニ呈シ、各国ノ形勢ヲ忠告ス、咬啗(カラバ、シヤガタラ)國ノ提督モ

亦来リ、書ヲ呈シテ曰、旧制ヲ变革シ、商港ヲ開カス
ハ、則永久安寧ヲ保チ難シト、抑近時歐羅巴諸州大乱、漸
ク治平ニ及ヒ諸民太平ヲ楽ミ、五大州共ニ交易和親ノ盟
約ヲ締フ、此時ニ当リテ、清国鎖鑰港ノ議ヲ建テ各国ト
連戦シ、遂ニ大ニ敗虜シ、乃巨多ノ償金ヲ輸シ和ヲ講ス、
爾後亞米利加及歐羅巴諸州ノ商船、日本海ヲ經過スルモ
ノ尤モ多シ、是ヲ以テ合衆国之力魁首ト為リ、使節ヲ遣シ
テ好和ヲ結ント請フ、此際許多ノ応接ヲ經テ各国ノ事情
始メテ氷解シ、乃チ権リニ条約ヲ結ヒ、下田・箱館ヲ以
テ商港ト為ス、然レトモ同港風波狂暴、滞船ニ便ナラス、
故ヲ以テ類ニ代港ヲ請フ、比年獨乙人・英吉利人亦連リ
ニ来リテ通商ヲ請フ、和蘭国王再ヒ書ヲ我ニ致シ、鎖国
ノ旧制ヲ廢スルヲ以テ然リト為ス、若シ旧制ヲ墨守セハ、
則チ仇ヲ四方ニ受ケ、必ス救フヘカラサルノ危機ヲ踏マ
ント、魯西亞人モ亦特ニ来リテ、日本ノ大患咫尺ニ逼ル
ノ形勢ヲ報ス、箱館滞留ノ米人亦窃ニ我國人ニ告テ曰フ、
近日英国ノ軍艦數艘航シテ日本ニ到リ、將ニ大ニ請フ所
アラントス、若シ之ヲ拒マハ則兵威ヲ以テ手ヲ無人境ニ
下シ、漸然蚕食併吞ノ勢ヲ呈セントス、今ニシテ早ク之
カ備ヲ為サスンハ、恐クハ噬臍ノ悔ヲ生セント、以上陳

スル所ハ外国事情ノ要領ニシテ、曩日大學頭(林)等已
ニ進言スト雖トモ、今又其遺漏ヲ縷述ス、素ヨリ疑フヘ
キ条件アリト雖トモ、然モ外国新聞紙及舶載ノ器械・書
籍、其他実地ノ景況ヲ参考スレハ、則チ未タ必シモ虚喝
ト做スヘカラサルモノアリ、初メ疑惑ヲ抱クノ徒漸次会
心了悟スル者、今已ニ二十八九、然トモ之ヲ信用スルニ
非ラス、謹テ外国人ノ説明スル所ヲ陳ヘテ以聞スルノミ、
其処置ノ如キハ臣等無似ト雖トモ敢テ股肱ノ任ヲ竭シ、
事情ヲ斟酌シテ、以テ国家ヲ安セント、光成・聰長、正
陸ノ説ク所ヲ以テ、入リテ聞ス、天皇宸憂益々深ク、諸
公卿ヲシテ意見ヲ建白セシム(辰翰甲第 号及第 号参看)、
諸卿乃上表シテ夷ノ和ス可カラサルヲ条陳ス、其書左ノ
如シ、

近衛左大臣忠熈

從關東言上候重国一条ニ付、愚意言上スヘキ旨被
仰下、恐懼不少候、是迄於關東ハ再三ノ応接有之、無
抛此期ニ至候事、実以テ無是非次第ニモ候欤、且此度
開港商館等申立候条々、人心不居合ノ趣ニテ及言上候
事不容易儀、実以天下ノ重事ニ候得ハ、兎角所存難言

上候得共、申立ノ通和親通商共、此末如何成故障出来候モ難計、且夷情モ難相弁候得ハ、何分諸大名ノ面々、人心不居合候テハ、〔慮カ〕皇国ノ大事、叡念不安、大樹公心

配不踴候欵、何分諸国共実意ノ旨一致ノ儀肝要ト存候、〔眞実意旨一致之義天〕

右等ノ処深勘考ニテ、三家以下諸国ノ大小名存意篤ト被及尋問候上、所置有之候様可被仰下哉ニ存候事、

鷹司右大臣輔熙

亜墨利加使節申立ノ条々相考候処、表ニハ和親専務ニ候得共、夷情ノ深キ処難相弁、実ニ天下ノ重事、不容

易ノ事ト存候、先差向候急務ハ、〔急務カ〕皇都近国ニ開港・開市ノ事遠慮無之候テハ可有近患存候、尤 征夷將軍

警衛守禦ノ所置ハ可有手厚候得共、猶 皇朝八省六府等末々御再興モ無之事故、愚身辱高官、其辺深ク恐懼致

痛歎候、何分五畿内近国ニ商館被開候儀ハ差拒候得共、〔促脱カ〕諸務御整ノ上ニ候得ハ、別テ愚案等無之儀、尤可否可〔別ニ愚存無之儀、自余之儀尤可否可有事ナカラ大〕

在事ナカラ、時務ニ変革ノ処置モ可有事故、所意不申〔慮カ〕上候、併墨夷開港有之候上ハ、外夷追々同様可申立欵、

総テ国政武備向ハ關東へ被任候得ハ、神州一体ノ大関係故、〔為脱カ〕国忠純料ノ議提ヲ被立、尚亦於柳營モ三家諸国

〔小脱カ〕大名ノ異見ヲ被尋、〔意〕皇国安泰人和撫民ノ所務無闕失処、肝要ノ群議可有之存候事、

三條内大臣實萬

墨夷申立ノ事件從關東言上ノ儀、所存可申上旨、謹承候、〔則為見被下候天〕使節為見被下候書取熟覽候処、国体不安ノ事情歎

息ノ至ニ付、頃日閣老被差登〔堀田上京予定ヲ云〕被窺叙慮ノ由、旁以不容易ト存候、則書取ニ有之通、人心

不居合ノ節ハ、内外何様ノ禍端ヲ引出可申儀難計由、尤ノ事ニ候、全体列国ノ諸藩ニ至迄、見込ノ趣意可有

之義ト存候間、被 聞召度旨被 仰下候テ、〔天々脱カ〕叙覽ノ上尚亦可有朝議哉、抑先達テ下田条約ノ後、無余儀事情

委細ニ言上有之候処、漸々申募リ候趣、実ニ国家ノ安危、唯今ノ所置ニ有之、大樹ノ配慮所察候、況於

叙慮ハ先年以來 神州ノ瑕瑾無之様ニト深ク被惱 宸衷、臣下一同不堪痛歎事ニ候、誠ニ此度ノ御決答至大

至重ノ儀ニ候ノ間、何卒不墮 皇威、不汚 大樹ノ号、人心固結士氣引立候様ノ勘弁無之哉、是等ノ趣ヲ以閣

老面々ノ存寄別段御尋有之、無伏藏書取申上候様被仰下、其旨被 聞召ノ上、叡断ノ仰所希候、不願恐愚意

言上候事、

廣橋前大納言光成

今度於關東亞国使節申立〔候脱カ〕、ミストル差置事〔候脱カ〕、開港ノ事等、御許容被為在候テハ、神國ノ風儀相汚レ不容易、神宮御始メ御先代へ被為対候テ、如何可被為在哉、愚体〔体カ〕ノ光成申上候モ深恐懼候得共、天下ノ大事ニモ候得ハ、於公家〔公カ〕及公卿〔卿カ〕僉議〔凡御御後天〕、於武家ハ三家及国持大名存意被尋下候上、公武無御隔意御評議被為在候テ、御国体ニ不拘様御決答被為在候様、伏テ所仰願候事、

久我大納言建通

墨夷ヨリ願候開港・開市ノ事、誠ニ不容易天下ノ大事〔脱カ〕ト奉存候、今度從關東及言上候箇条ノ中、京師ノ儀ハ於關東力ヲ尽シ、差拒候旨ハ、聖慮ヲ可被安御次第ニ候得共、万一攝・泉・畿内ノ地ニテ開港・開市ノ事始リ候ハ、後來ノ憂不可測、元来夷人ノ情ハ無鑿者ニテ、既ニ下田開港ノ上又別ニ開港ノ代港ヲ申立候事ニテ、其情態モ相知申候、若攝・泉・畿内ノ地ニテ開港市ノ事〔則脱カ〕勅許候ハ、唇破レ齒寒シ、京師ノ患ハ申迄モ無之、後來

天下ノ憂如何可有之哉、実以寒心仕候、開港市ノ事、畿内ノ地尤難被許候、唯力ヲ尽シ、精々相拒候様、關東へ被 仰遣可然儀ト存上候〔奉脱カ〕、自今海内ノ事ニ於テハ、關東ノ所置モ可有之、又大名夫々ノ存慮モ可有之候間、唯々畿内ノ地疎漏無之様痛切ニ奉祈候、抑又臣建通ノ存スルハ、夷人唯利ヲ好、義ヲ不知、義利ノ二字ハ中国夷狄ノ弁別ト奉存候、大抵古ヨリ人心ノ不振忠節ノ風不見事ハ、全好義ノ氣少者ニ御座候、国家ノ治乱ハ義利ノ二字ヨリ起ル、今日

朝廷ノ御所置、義理明白、人心振候様相成度奉存候、開市開港ノ事、財利ノ説、建通歎息憂慮ノ至ニ不堪、忘身報国ノ誠〔秋脱カ〕恐々惶々ノ至、偏奉祈英断候事、

一條大納言忠香

近頃異国盟約相調、本朝ニモ可同開貿易様夷謀ニハ、〔付カ〕亞国魁首トシテ、種々強情申上候旨言上候間、所存御尋ノ由謹奉拜承候、誠ニ国家ノ大事ニ候間、猥ニ言上恐入候得共、愚存申上候、先外夷へ和親ヲ被許候儀ハ、本朝ノ人心一同ノ事ニ候哉、何分當時国内多分武家ノ所領ニ成来候間、徳川家下知ニハ尤同意ニ存候得共、三〔下カ〕

家始メ大名ノ面々所意モ可有之ノ間、右等ノ面々所意

被聞召候上、〔何卒脱力〕皇威不滅、国辱無之様、且此上諸夷上陸仕、

種々ノ儀申立、差支等申述候節ハ、關東ノ所置見込モ

有之哉、兼テ篤卜御尋可被遊哉、何分ニモ国内人心不

一致義ハ、則公武共故障ノ基ニ候間、人心一同ノ事ニ

無之候ハ、御聞届被為在間敷ト存候、右ニ付テハ、

於官家諸臣等議論ニ可拘人ニハ、弘ク御評議可被為在

哉、尤取捨決断ハ、聖慮又ハ大臣ノ儀ニ候得共、如

斯皇国ノ大事ハ、弘ク議論ノ上御裁断御宜哉、自古蛮

夷ノ異変毎ニ依神明平治候間、何卒君臣心ヲ一致ニ仕、

真実ノ御祈禱モ候ハ、自然神明ヘ通シ候欵ト存候事、

二條大納言齊敬

此度從關東令注進候〔重慶利加〕一条書類拜見、就右所存被尋

下、謹奉敬承候、然ニ愚昧ノ質無左ト言上モ、深恐怖

候得共、何分不容易治乱ノ際ト令愚存候間、不願恐懼

奉申上候、抑丑年〔嘉永六癸丑〕以来異船渡来、終ニハ

昨年ノ冬登城迄相濟、猶亦今般 帝都始近国交易商館

ヲ開度由相願候趣、不敬至極ニ存候、尤夷人申立ニハ

双方国益ト称シ候得共、深意ハ輕々敷モ不被存、旁今

度交易ノ願意猥ニ御許容ニ相成候テハ、国辱ニモ拘リ、

其上如何ノ事申立モ不知、何迄無際限事、猶亦天變地

妖モ無覺束、仍テハ速ニ退散ノ計ニ相当リ候処、当時

武門銘々一体気合ノ程如何候哉、何卒早々国内和熟一

致ノ儀第一ニ被諭、弥 朝恩感伏ノ期、近例ノ准抛征

伐有之候テモ何事之候哉、左候ハ、征夷ノ職掌ニ相叶、

聖国ノ威徳顯然ニ候間、猶更万代昌平ト存上候様宜有

勅裁候、

九條大納言幸經

亞国使節追々申立一件就言上、愚意被尋下奉畏候、窃

惟フニ当今世界ノ形勢致一變、〔通國通交〕通交ノ例ニ有之候得共、

皇国ハ從古昔夷蛮隔絶ノ儀依為嚴重、上下相安、不失

淳風ノ処、今般異国交易通商取結、商館雜居ニ相成候

テハ傷風敗俗、後來ノ成行モ難慮候、乍去時勢ノ變革

ヲ以既ニ条約有之上ハ、無故拒絕モ難成、但諸藩〔謀〕

議万民之情意会合多処ヲ以テ、聊之〔脫〕異同ニ不拘、苟且ノ

計無之、永久ノ基不損様御議定所冀ニ候、尚宜有御敕

断奉存候、

德大寺大納言公純

今度墨夷關東登城不容易事件申立、林大學頭・津田半三郎ヲ以、応接ノ次第言上書取ノ趣、誠以一大事、神州ノ安危此時ニ候欤、四海昇平相統、人氣怠慢ノ折ヲ伺ヒ、夷狄強梁ヲ申出、既ニ京攝ノ内商館ヲ願候旨、何様商館ト申候得ハ、輕易ニモ相聞候得共、彼牛皮大ノ説ノ如ク、追々廣大ノ結構無相違ト存候、最初下田ヲ被許、今又十港開市ヲモ申上候ハ、不奪不壓ノ夷情顯然ニ候、又商館ヲ被許候上ニテ、場所相撰、或ハ京攝ノ城郭住居ヲ企テ、其上邪教伝染ノ程モ難計、譬ハ不慮ノ御備トシテ、兼テ敵重ノ警衛被差置候共、且暮宸襟被安候時節被為在間敷ト深恐入候、旁以五畿内ハ申迄モ無之、近国タリトモ夷館免許ノ儀無之、御安慮ノ規則屹度相立候様ニ、關東へ被仰進可然哉ト存候、元來於御政務ハ、東武へ御委任ノ義、一切御構ハ不被為在儀ニハ候得共、斯ル急務ノ大事、皇国ノ安危ニ候得ハ、公武一同人心帰服否御議定ノ上、人々忠言御採用、不拘国体 皇威万世迄モ光耀候様、偏英断奉仰候事、

中山大納言忠能

墨夷申立不容易条々、從關東言上ニ付、御沙汰ノ趣謹承候、右一件自始ノ次第隨不及承事ニ候得ハ、猥ニ言上別テ恐入候得共、於此義ハ兼々深く憂懼仕居候間、不願恐言上候、元來嘉永年中渡來呈書条約後、於關東追々と親取結ヒ、所望ニ隨順シ、既ニ使節登城対面モ相濟候上、彼是增長種々難題ノ条目等申募候段、皇国ヲ致輕蔑候儀、誠以 神州ノ恥辱、国家ノ安危此時ト存候、今度条目ノ内、所々開港、夷ノ官吏ヲ置、國中ヲ随意ニ往反セシメ、且教法所ヲ建立ノ儀坏、殊更難許第一ニ候、此上ハ偏ニ一州ノ人意齊ク和同シ、蛮夷ノ姦謀ヲ綏服致サセ候義、第一ト存候間、早々武辺三家始諸大名、更ニ格別応接ノ示談有之、上下万人納得、心ヲ一ニシテ国体ヲ不損様、速ニ改正ノ所置可有之由、急度御沙汰可被為在候様、 聖断所仰候、唯今ノ内早ク改正無之、苟且因循候ハ、朝廷ノ御危難ハ勿論、於將軍家モ禍害不遠ト深敷入存候、去ル嘉永年間ノ条約スラ十分ノ宥許ニテ、当然ノ義ニハ無之欤、況ヤ増長シテ今ニ至リ、国内ノ人意不一致儀ハ必定、内外禍乱ノ基ニ可相成候、方今ノ事勢人心不居合ノ趣、実情

ヲ以テ、一端夷族へ説諭謝絶候義肝要ト存候、其謝絶
 ヲ不聞シテ、彼ヨリ兵端ヲ開候ハ、是非ノ論ニ不及
 候、遂ニ打払〔通ニカ〕、人心一致シ、防禦ノ一事ニ帰シ、各々
 誠心ヲ以術ヲ〔其誠カ〕尽シ候方、却テ万代安全ノ策ト存候、唯
 ヲ以テ、人事ヲ被極尽候上ハ、実ニ天命ノ令然歟ニ
 シテ、其時社神國ノ儀、天助冥感モ必可有之候、尤争
 闘ハ不容易議論〔勿説〕ニ候得共、面前理世安民ヲ專トシ、國
 家ノ深謀遠慮ヲ捨置、此上諸夷追々來集シ、猛威ヲ張
 リ、種々難題申立候ハ、堂々タル 神國、終ニハ犬
 羊ト伍ヲナシ、國勢長ク挽回ノ期無之候間、何卒早々
 被決定、衆思ヲ集メ、群慮ヲ同シ、蛮夷ヲ退ケ、防禦
 ヲ敵ニシテ、永夷狄ノ深害ヲ除キ去リ、神州ノ御瑕瑾
 ニ不相成様、厚可被廻 叡慮相願上候事、

萬里小路大納言正房

亞墨利加使節申立候条々不容易ノ儀ニ付、此度林大學
 頭・津田半三郎上京口演ノ趣、誠ニ古今未曾有ノ事ニ
 モ候歟、是迄再三応接ノ上、如此次第ニ相成候趣ハ、
 無余儀相聞候得共、元來墨夷ノ事情ヲ〔推考〕推察仕候ニ、最
 初ノ条約致変革、下田港ヲ閉チ、三都ヲ始メ諸州ニ於

「開港開市セントノ事」天
 テ開港開市ノ事、是全通商交易ニ事寄セ、人民ヲ誑惑
 シ、日本ヲ併吞ス可キ結構事情既ニ顯然ニ候、元ヨリ
 不奪不鑿〔其力〕ノ事情、此度申立ノ条々被差許候ハ、此上又
 何様ノ大事ヲ申立候モ難計候坎、於不被許テハ、例ノ
 大砲巨艦ヲ以テ、恐嚇致ス可シ、実ニ輕蔑驕慢可憎事
 ニ付、墨夷如此次第相聞候〔成〕ヘハ、諸蛮モ又追々聞入レ、
 日本ハ夷類〔族カ〕ノ巢窟ト可相成、左候ハ、征夷ノ名義モ如
 何候半、後々ニハ其任ヲ可望武將モ可出来、臨其期如
 何天裁可被為在哉、是一重大事ニ候、方今人氣変革致
 シ、西洋ノ異風ヲ尊信候族モ有之由相聞候、是皆日本
 ノ罪人ニテ、甚以歎敷事ニ候、譬夷情和順シテ、交易
 互ニ被行候共、 皇統綿々万世不易ノ神州ヲ、無勿体
 モ合衆國ニ配偶セラレ、後ニハ醜夷ノ属國為同様事、
 誠以口惜次第、且ハ皇祖ノ照覽神祇ノ冥陞其恐不少候、
 乍去万一時勢不得止時節ハ、申立ノ中〔二三ヶ条〕三ヶ条被差許、
 尚亦畿内近國ハ不及申、不虞ノ警衛被尽、武備蔽整ノ
 時ヲ待テ、速ニ興復可有之坎、何分係ル重大ノ事件國
 家ノ安危ニ候得ハ、 朝廷ニテハ三公諸卿ノ群議被聞
 召、又東武ニ於テハ三家以下諸國ノ大小名不殘異見ヲ
 被尋、其精忠純粹ノ議定ヲ御採用有之、公武御合休御

和談ノ上御決定被為在候ハ、人心無不伏之疑、弥
皇国太平柳營武運長久ノ御計策候半欵、猶宜御裁判奉
仰候、

東坊城大納言聽長

〔世襲利如天〕
亜国請開敷港建商館置吏之事、謹案、我邦二百歳來鎖
国良法、一旦於破革之者、非拘国体耳、人情動揺尤可
恐候、或言、今也外昵蛮夷、内棄人民、又言、開關已
來皇統連綿之神国、徒与夷狄為伍、豈可勝悲憤哉、人
心不穩、於是可知、国中安危〔此腦力〕一挙候欵、若不得止、
心從時勢被革旧法者、被置將軍、敵戒、皇都、禁彼夷
人勿入近畿、特可令夷人固条约、以禁邪教、莫背国法
之旨、可被仰關東候様、猶宜被竭衆議〔欲力〕徵万全之事、
〔入日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕

六三 松平薩摩守建言



此度亞墨利加人ヨリ申立候書面并ニ御達書御渡ニ相
成候旨、〔慶拜、仙台藩士〕陸奥守(伊達)ヨリ廻達之趣、委細奉承知候、

旧冬申立候通格別御差支ニ不相成分ハ、速ニ御差許
被仰付候テ、万端之御事モ、御変革被 仰出当然
之御時節ト奉存候、併人心一和第一之御事ト奉存候
間、末々ニ至ル迄、不伏之者無之様、当時万国之光
景并異人之事実、厚ク御教諭被仰出度、且亦左之条
々乍恐奉申上候、

一朝廷御尊崇被為在度事、

當時ニテモ御手厚之御事ニ被為在候得共、カ様之御
時節ニ御座候間、今一段 御尊崇被為在度御事ト奉
存候、

一西城建儲之御事、速ニ被 仰出度事、

第一人氣一和之基ヒニ可相成奉存候、旧冬申上候間
委細不申上候(昨夢紀事參看)

一万端之御法度簡易ニ被 仰付度事、

昔ヨリ法度繁キハ民ノ煩ト承り候、漢之高祖之法ヲ
三章ニ極メ候モ、第一人望之為ト奉存候、

一金銀之位、慶長之昔ニ被復、物価引下ケ候様被 仰付
度事、

金銀之位イヤシキ時ハ物価高直ニテ、諸人難涉之基
ト奉存候、其上下外国御条约相濟候ハ、後事〔年々〕混雜之一

端ニモ可相成哉、尤急ニ難被

仰出御事ト奉存候間、追テ慶長之昔ニ被復候旨、被
仰出置度奉存候、

一御武備敵重ニ被仰付、諸大名江モ急度被仰出度事、

御条約相濟候ヘハ、何トナク諸人心弛ミ勝ニ相成候
間、是迄ヨリ猶又敵重被 仰付度奉存候、

一堅固之軍艦御製造被仰付、水軍之兵士御取建有之度事、

外国人入込候得ヘ、非常之御手当第一ニテ、殊ニ海
上之御備無之候テハ、異人制御之義難整、海上不馴
ニテハ物之用ニ難立候間、第一ニ御吟味被為在度奉
存候、

一軍器製造所御取建被仰出度事、

當時之光景ニテハ、諸大名面々製造仕候テモ、存分
ニ製造難叶、殊ニ小身之面々如何程志御座候テモ、
難及自力、自然ト手当等閑ニ相成候間、便宜之場所
江製造所御取建被仰付候テ、願之面々江御下渡相成
候ハ、人氣モ競立、第一御手当之為可然御事ト奉存
候(全国兵制一致ハ積年ノ持論)

一要所之海岸江堡砦御取建被仰付度事、

外国船渡来仕候テハ非常之御備無之候テハ、人心動

乱之基ヒト奉存候間、御吟味之上被 仰出度候、

一諸大名勝手立直候様御吟味有之度事、

諸大名困窮ニテハ手当難整、乍恐

御国之御弱ミニ御座候間、是又御吟味有之度奉存候

(昨夢紀事參証)

一商法之為御開港相成候場所之奉行格式被引上度事、

奉行之権輕ク候テハ、外国人共自然ト輕シメ候道理
ユヘ、万石位之処ヨリ被仰付度事ト奉存候、

一商法御開ニ相成候上ハ、外国一同平等ニ被仰付、諸売

人共弁利ニ相成候様被仰付度事、

諸国平等ニ無之候テハ、争端之基ヒニ御座候、且又

唐国ハ商人計之事ニテ、訳モ相変候得共、是又御吟

味之上寛容之御所置被仰付度、勿論異人江計寛容之

御所置ニテ、国民江是迄之コトキ御法度ニテハ、人

心不伏之基ヒト奉存候間、唐物敵禁并ニ外国人江商

法向キ御寛容被為在度奉存候、

一外国江通船被 仰付度、且右之御規定委細ニ被仰付度

事、

御開港相成候上ハ、通船不被仰付候テハ、富国強兵

之御計策難計、殊ニ外国事情モ難弁知仕候間、外国

六四 松平肥後守建言

御答書

事務之御役乗組ニテ、士商召列レ通船被 仰付度、
左候得ハ外国事実モ委敷相分リ、乗馴候ヘハ、御手
当之為可然奉存候、

一開港之場所ハ別段、其外江異人共住居、其貨物持越候
義ハ被 仰付間敷事、

此節如何程御治定ニ相成候テモ、後年争端ハ必定ト
奉存候、シカシ官人ハ御約定次第之事ト奉存候、

一無用之貨物不持渡様ニ被 仰渡、且金銀輸出之義嚴禁
被仰付度候、

一邪宗門之義弥停止被 仰付度事、

一阿片之義弥御製禁被 仰付度事、

右之条々誠ニ恐入奉存候得共、愚存不残奉申上候、

尤此度御改革御成就相成候得ハ、五大州制御之御手
段(公ノ御持論)、如何程モ可有之御時節ト奉存候間、

乍恐 御国中之光景ヲ御吟味有之、外国事情御照シ

合セ被遊候テ、彼カ我僂之申立ニ乗シ、 皇国万全

之御計策ヲ御吟味之上、万事御変革被為在度奉存候、

以上、

正月廿四日

松平薩摩守(齊彬)

(照國公文書、大日本古文書、幕末外國關係文書)にて校出

重墨利加使節江被及応接候趣、且右ニ付使節差出候書
付和解共ニ御渡之上、申候趣不容易事共ニ付、心付候
儀モ有之候ハ、早々可申上旨、委詳ニ被 仰出候趣奉
畏候、御沙汰之通近來世界之形勢一変致、古來之御
制度ニ而已難被為泥次第モ御座候、惣シテ是迄之振合
ト違ヒ、数ヶ所開港被 仰付、外国人共不絶所々ニ差
湊ヒ居候様相成候テハ、諸事弥御油断不相成、御心
配之御事ニ御座候得共、併當時之形勢ニオイテ不被為
得止、既ニ条約御取結ニテ交易御差許ニ相成候上ハ、
開港之儀モ無御余義被任願候外有御座間敷哉ニハ御座
候処、右様相成候ハ、争戦等之憂モ有之間敷哉^(存疑)
^(カ)人氣相弛、武備モ怠リ候様相成候テハ、以之外之事ニ
御座候間、此後一入相励候様無之候テハ相成申間敷、
尤古今未曾有之御大業ニモ御座候間、乍恐 御英算無
御遺漏、後來之利害厚御勘弁被為在、此上ハ禍ヲ転シ
福トナス之御手段ヲ以、富国強兵之御良策肝要之御儀

ト奉存候、被仰聞候通、使節申立之趣御取縮方被 仰
付、可相成丈ヶ彼カ願意御減省被 仰付、第一京・江

戸之儀ハ自余之場所トモ違ヒ、格別之御場所柄ニ有之、
大坂迎モ京都程近之儀ニ御座候処、異人共常ニ雑踏致

居候様相成候テハ、兼テ重御場所柄之儀ニ御座候得ハ、
程遠之場所ニ開港被仰付、其余之ヶ所トテモ、兼テ非

常之御備全難相整場所ハ御除ニ相成、不時之變事相起
リ候トモ、御取縮方御行届、聊御差支無之ヶ所共、厚

御取調之上、開港被 仰付候様相成申間敷哉、右等之
趣不顧淺見、臆存之程申上候儀ニ御座候、種々御吟味

被為相尽候上ノ儀ニモ可有御座哉ニ候間、外ニ可申上
存意モ無御座、御尋ニ付、前件之次第不取敢申上候、

以上、

十二月

(容保、余津藩志)
松平肥後守
(大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂)

六五 南部美濃守建言

亜墨利加方之儀ニ付、御心配被 思召候御儀実以奉恐
入候、依テ折合方宜様追々共御変革ナキ様、此度御決
定相成候ニ付、存慮之趣無伏誠可奉申上旨奉畏候、随
テ申上候迄モ無御座候得共、方今時情ニ因、(伏見)難重相考

候時ハ、強テハ御旧法而已被為拘候御場合ニモ被為在
間敷、何ニモ御權道ヲ後來永久之御安心ニ被為至候様、
御取据方ハ両全之御儀ト奉存候、

正月三日

(利剛、盛岡藩志)
南部美濃守

六六 阿部因幡守建言

旧臘御達御座候此度亜墨利加使節江被為及応接候趣、
且使節差出候書面和解共被成御下、再応申立候次第ニ
付、猶心附候儀モ御座候ハ可申上旨被 仰出候趣奉謹
承候、得ト熟聞仕候処、何レモ不容易御事柄、可否可
申上心附之品無御座候、此段申上候、以上、

三月四日

(正西、片岡藩志)
阿部因幡守

六七 黒田和泉守建言

此度被 仰出之趣ニ付、銘々心付候儀モ御座候ハ、可
奉申上候様被 仰出奉畏候得共、別段奉申上候儀等モ
無御座候、此段奉申上候、以上、

正月三日

(貞和、久留川藩志)
黒田和泉守

六八 松平阿波守建言

去ル十五日、御渡被成候。垂墨利加使節再度応接書之趣ニ付、存慮之次第可申上旨被。仰聞候ニ付、篤ト披閱熟考仕候処、此度之件々別テ重大之事ニ有之、無智不才之身ニテハ、巨細ニ定考難行届義迄左ニ申上候、今度申立候開港之義、誠ニ不容易義ニ有之、大坂ハ帝都近ク、日本之要所ニ付、堅ク御断被。仰立、并京都之義ハ尚更之事ニテ、此上彼レヨリ再三申立候共、夫レニ御動キ不被為在、御手強ク御断可然奉存候、将又品川・江戸之処ハ、乍恐。公辺始諸大名武威主張之土地故、是ハ速ニ御許容有之候方ト奉存候、左候得ハ自他共御武威相輝キ、京・大坂御断ニテ御膝元御許シニ相成候ト申義、被对。京都御義理合モ御貫キ被遊候御事ニテ、諸大名ハ申ス迄モ無之、万民ニ至ル迄可奉感服、於。京都モ如何計御満悦御安堵之御義ト奉存候、乍併品川ハ余リ。御城近ク、其上海岸遠浅ニテ双方不弁理之事而已多クト存候間、横濱之方ニ此上篤ト応接被。仰付、可相成ハ此方ニ押付、取極度事ニ存申候、又ミニストルハ、江戸場末ニテ可然土地相撰ミ措置候得ハ可宜、是以此方人心折合不申テハ難相成、篤ト時期御勘弁之上、御所置被為在度奉存候、交易商壳筋之

義ニ付、段々申立候義、弥交易御差許ニ付得ト於此方指支不申義ハ、彼レ申立之通御取行ニテ可然、且又交易御許シニ相成候得ハ、此方ヨリモ彼国江交易トシテ航海被仰付度、乍去只今之処ニテハ大艦無之候間、阿蘭或ハ垂墨利加江軍艦・蒸汽船等数艘御詔被。仰付、并船中大砲其外入用之器械悉ク被。仰遣、右代料ハ、交易之利潤ヲ以、追々ニ御支払被。仰付、夫迄指当ル処ハ、江戸・大坂富饒之町人江上金被。仰付、即時御支払之御引当ニ相成候得ハ、其内ニハ交易之利潤モ潤沢ニ可相成、両都町人ニ於テモ数百年治平之。御恩沢ヲ相蒙候義ニテ、更ニ迷惑トハ難申上、是等之説得方ハ如何様ニモ可有之ト愚考仕候、右之通航海被。仰付候得ハ、誠ニ御国初テ之事ニモ候間、此御人撰甚御大事之義ニテ、能々御吟味被。仰付度、又大統領ヨリ申越候御返答モ、航海ニテ被。仰遣候得ハ、却テ御国之強盛モ相顕レ、彼レモ如何計悦服可仕、且。天命推移之時勢ヲ御取失ヒ不被遊処ニモ相通ヒ、盛大之御所置ト可申上、弥交易御開ニテ、互市盛ニ相成候得ハ、日本極テ富国ト相成可申ハ必然之義ト奉存候、乍去阿片ハ国之鴉毒ニ候間、尤嚴重ニ御禁制無之テハ

〔候得ハカ〕

忽人命消滅ニ相及、甚可恐事ニ御座候、前記申上候軍艦御誂之上ハ、於此方モ右ヲ手本ト致シ、公辺ハ自素之御義、諸大名ニテモ早ク製造有之度奉存候、且又老ヶ年ヨリ已上居留之異人、或ル都ヲ旅行之一条、甚至重之義ニテ、旅行致候様相成候テハ、畢竟京都徘徊モ可仕、其外国々城下々々ヲモ遊歴致候テハ、人心折合不申事故、何レニモ変事相起リ可申、其時ハ和親モ忽讐敵ト可相成、戰爭ヲ相招候基ニ候間、先ツ里数ヲ御定ニテ遊歩御許シ之方可然奉存候、彼レ教法ヲ自由ニ行ヒ、拝所ヲ取建候義ハ不容易義ニテ、畢竟是ヨリ天主教習染ニ相及、国民之迷路相生シ可申、右様ニ候得ハ如何様充満可仕モ難計、其時ニ至候得ハ、皇国治平之御恩沢ヲ相忘レ、彼レヲ信仰仕候様可相成、甚以御大事之事ニ御座候間、能々御遠謀彼為在度、且又交易御許容無之候得ハ、極テ御危難可有之ト申上候云々、是又御勘弁被為在度奉存候、此上イツ迄モ鎖国御閉被遊候様ニテハ、却テ後患相生シ、往々之处深ク御案思申上、当時世々相移リ候義天然之至ニ有之、毎々申上候事ニ候得共、文武盛大ニ御取行、四海遠境ニ至候迄、御高德ニ威服仕候様御憤發被為在、是迄之古格モ事品

ニ寄り、早速御取改被遊、(簡カ)管易武備等第一ニ御革正被為在度、無左時ハ弥彼レニ見透サレ、万国之誹笑ヲ受候而已ナラス、御国体年々歳々衰弱ニ落入、其節ニ至候得ハ最早御取返シノ道モ無之、此節ニ候能キ御改革之時至リ候ト奉存候間、何分ニモ此機会御取失ヒ不被遊、五大州ニ冠タル御威勢被布施候ハ、皇国之治安無疆之義ト奉存候、其余之事件愚考ニ行届兼、至重之義迄愚慮之趣申上候、以上、

十二月廿七日

(右拾、徳島藩主)
松平阿波守

六九 佐竹右京大夫建言

亜墨利加使節再度申立之書面并對話書トモ拝見被仰付、存意之旨モ候ハ、申上候様、御達之趣奉畏候、先達テ委曲奉申上候外、別段存寄モ無御座候、乍併無御拋条約 御取結被成置候ハ、今般魯西亜国江被定置仮条約之御振合ヲ以、万端御所置被為在度儀ト奉存候、此段奉申上候、以上、

十二月廿八日

(義就、久保田藩主)
佐竹右京大夫

七〇 松平大和守建言并掛

一 往々彼ト御和親之 思召ニテモ、御国内之人心一様ニハ不可參、当今之勢ヲ以致推考候得ハ、十ニシテ一二ハ貿易偷安ヲ欲シ、八九ハ義憤不堪ト申様相見候得共、元來 神州之御武威、開闢已來海外ニ致光輝候儀ニテ、義ヲ尊ミ候国風故、蛮夷之利ヲ以致心候醜俗トハ、往々御和親之道ハ難相整義ト奉存候事、

一 御和親整熟致シ候ハ、往々

神州之義氣薄ク相成、彼之醜俗ニ類シ候様不相成候テハ、相和シ申間敷、其地ニ陥リ候テハ、 神州之穢ト相成、被為対天朝被為濟間敷、御大切至極之御儀及、幕府之御恥辱後來ニ残リ、不容易御儀故ト奉存候事、

一 若又御和親御整熟ヲ思召候テモ、夷吏府下江致在任、彼之商人モ立入、又新開之濠々、何モ夷吏始彼之商人共多ク立雜リ、貿易公許ニ相成候得ハ、右申上候義勇之国風故、全国彼ト和親ヲ欲サル処ヨリ、中ニハ背命令、不顧一命、龜忽之振舞致シ候モノモ致出来、往々和ヲ破リ候義必然カト奉存候、又義氣薄キ人々商人共ニ至テハ、利ニ走セ易キ習ヒ故、漸々ト今日之利潤ニ從、偷安ヲ樂ミ、自ラ神州之神州タルヲモ忘却致候儀見得渡リ候、如何トナレハ、蘭學者ハ彼之利密ニ心奪

レ、我國ニ生レナカラ、彼ヲノミ尊ミ怖レ、仏者之本尊ヲ崇如ク成行、時トシテハ君命ヲ後ニ致シ、甚數ニ至テハ彼ニ荷担致シ候モノ、日々事ニ相増可申哉、其時ニ至リ候テハ、夷奴之御掃除被遊度思召候テモ、容易ニハ御届被遊兼可申哉ト奉存候事、

一 右様愚見致シ候処ヨリハ、往々御和親之道無之、仮令御和親ヲ御求被遊候テモ、遂ニ破壊ニ相成、其時ニ至リ候テハ彼之荷担ノミ増、弥被遊悪キ事ニ可相成ト奉存候事、

一 然ル上ハ、戰爭ヲ以御弘ヒ被遊候ヨリ外有之間敷処、必然如何ト御座候得ハ、必勝道トテモ得不申候共、漸々夷奴之御国地ニ立雜リ、醜風押移リ候後ヨリハ、寧此時ニ当リ夷奴之御掃除 征夷之御職ニ断然ト御立居被遊、是迄之御所置ハ御權策ト被遊、 敵命新ニ降リ、諸事右之御仕向ニ相成候ハ、十二八九ハ心服仕、必死之覚悟相立可申、右ヲ御基ニ被遊御所置御座候ハ、是ヨリ事ヲ御求無之トモ自然ト彼ヨリ退キ可申、又退テ後ニ事ヲ発シ来候節ハ、我必死之勢ヲ以御取挫相成候ハ、勝之道モ生シ可申哉ニ奉存候事、

一 右之御所置ニ相成候上ハ、勝負ハ天運ニ御任セ被遊、

神州義勇之人民^{〔兵ヲ以テ〕}、極ト被遊候儀、御決定候儀肝要

ト奉存候、自然人民相尺候共、此上之御尽シハ無之御
義故、聊 御恥辱ニハ被為在間敷様奉存候、右過日蒙
仰候間、無腹藏愚存之趣申上候、以上、

正月

^{〔貞侯、川越藩主〕}
松平大和守
^{〔大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂〕}

七一 松平攝津守建言

並墨利加使節追々申立之趣等不容易事共ニテ、御国内
人心之折合方モ有之候付、心附候儀ハ可申上旨再応被
仰出之趣奉畏畏、右ハ外国之事情親敷不弁義多、随テ
偏固之議論等ニ陥リ候得共、是迄応接之旨趣及熟覽候
テハ、双方共事情央相悟候事ニ相見候間、右等之趣
御国内ニ押及候ハ、漸々人心モ折合可申哉ト奉存候、
就テハ別段存寄之次第モ無御座候、此段申達候、

正月

^{〔忠恕、小幡藩主〕}
松平攝津守

七二 水戸前中納言殿建言

御廟算伺書

一旧冬墨夷ヨリ申立、^{〔脱カ〕} 応接之上条約御取極ニ相成、交易
之利ヲ以御武備御整可被遊御趣意之様ニモ伺及候所、

此方御武御御手厚キ上ヨリ御初ニ御成候ヘハ、交易モ
御益ニ可相成候得共、此方御武備御手薄ニ付、彼力願
意御破リ被成ガタク、無御抛御初ニ相成候交易ニテハ、
御益之所モ如何可有之哉 ^{〔深ク脱カ〕} 追々喰入申候ト、
何レカ早ク可有之哉、御廟算有之度候事、

但ケ様申候テハ、交易ハ一切不宣ト申様聞ヘ候ヘ共、

左様ニハ無之、方今之勢二百年前通り鎖国ニハ相
成兼候御儀ニテ、交易モ無御抛候ヘ共、主客之勢
ヲ不失様致度ト存候、尚又開港之場所ニテ、売買
之為彼我ヨリ商稅御取立ニテ、五十万・三十万之
運上上リ候テ、^{〔ハ、カ〕} 御益之様ニ候ヘ共、外国へ必要之
品出候ヘハ、内地之品ハ少ナク相成候ヘハ、価貴
ク相成候ハ必然之勢ニ有之、左レハ内地ノ者ハ益
^{〔密〕} 究シ候故、一旦上リ候眼前之益ハ兎モ角モ、日本
國中究シ候ヘハ、矢張公刃之御不為ニ相成可申哉、
^{〔密〕} 左候得ハ彼ヨリハ交易ヲ大ク御開之様申候ヘ共、
拙老愚見ニテハ畿重ニモ小サク致度事ト存候、尚
又内地之品ヲ以テ交易不致候共、他邦ヨリ持來リ
候品ヲ又他邦ヘ送り、利ヲ得候品モ有之由ニ候ヘ

共、主客之勢ヲ失候テハ、御引届（行也）之程ハイカゞト
存候、

一夷狄之願ヲ為御濟無（之脱カ）候ヘハ、各国申合攻来ルモ難計ト

ノ儀ニ候所、口ニテハ直ニ攻掛リ候様ニモ可申候得共、

話ニテ聞、図ニテ見候計リニテハ、容易ニ（脱カ）内地エハ入

申間敷哉、当分平穩ニ致居候共、直交易邪教等ニテ、内地ノ

人ヲ懐ケ、地理人情ヲ諳熟シ候上兵端ヲ開キ候ハゞ、

弥危カルベク候間、御廟算有之度候事、

但シ切支丹（本尊の儀は「水戸藩史料」ノ本尊ニハ、子共ヘ乳ヲ与ヘ候モ、又際

ニ相成候モ有之ヨシニテ、外見ハ大ニ相違ニ候ヘ

共、其術ニ至リ候テハ同様ニテ、先年渡リ候ハ幻

術ヲ行候由ニ候ヘ共、右幻術ハ方便之為ニテ、此

方ニテ折々僧侶・山伏杯狐ヲ使ヒ、祈禱ニシルシ

有候トテ、人ヲ欺キ候位ノ事ニテ、方今ハ開ケ候

ヘハ少々志有之者ハ、右幻術ニ欺レ候者モ有之間

敷候ヘ共、追々邪教ヲ以テ諸国ヲ奪ヒ候ハ、金銀

財宝ヲ初メ総テ自国ヨリ費ヲ不厭持来リ、人ニ与

ヘ、又ハ病難之者ヘハ薬ヲ遣シ、謝礼ヲ不受杯申

如ク、表向ハ仁恵ト見セ候得ハ一々符メ候事モ不

相成、仁恵ト存シテ人モ帰伏致候所、過半ナツケ

「仁恵と存候て人々も帰伏いたし候如半過なつて候上は「水戸藩

史料
候上ニハ、彼ヨリ大軍ヲワタシ、内地之者ハ右ニ

応ジ候テ其国ヲ奪候故、甚易ク被奪候由、其国ヲ

奪候上ハ最初ニ遣シ置候金銀等ハ、皆自分物ニ候

得ハ費ヲ不厭惠ミ申候由故、此所早ク御洞察ニテ、

日本モ右様不相成様被遊度存候、

一ミニストルヲ指出候儀、万事ヲ統轄シ、外国事務宰相

ヘ直掛合致候旨申候由、右様相成候テハ、貿易ノ外国

ヘ拘リ候外之事ニテモ、彼等ガ不便ニ存候事ハ如何様

ニカ辞ヲ作り、直ニ御変革ヲ願候様ニモ可相成、後害

不可測候、滿・清阿片ノ乱モ北京ニミニストル居候ハ

ゞ扱方モ可有之旨申立候ヘ共、滿・清ニテ北京ヘ不措

置候所ニモ、又意味可有之候ヘハ、何レ清国之所置ヲ

御吟味之上ニ被遊候方、此度直チニ御定メト申スモ如

何可有之哉、「得」水戸藩史料何モ御廟算有之度候事、

一敦港ヲ開ケ事ノ願ハ墨夷計之義、又諸夷来リ、墨夷ト

同港ニテハ指支候杯申出候節ハ、又別港ヲ開キ玉フ御

調ニ候哉「昨年十二月御渡ノ御書付之内、墨夷ヨリ指出候条約案ニ

十余国有之所、其国々ヨリ皆来ル日ニ至テハ、若左様ニモ有之

別港又別事願出候ハ、指見候事ト奉存候

候ハゞ、公辺御領之港之外ハ御許無之トハ存候ヘ共、

其願ニ寄り、諸大名領分中ノ港迄モ御引上ニ相成候御

含ニ可有之哉、右御引上ニ相成候上ハ、其替地ハ其大名難有奉存候程ニ被下候義ト存候処、湊之御益ハ申サバ御当座物、土地之御益ハ永世ノ御益ニ候得ハ、多ク右之類出来候ハ、追テ公辺之御損ニハ相成申間敷哉、夷狄ニテ好候程ノ港ハ船繋リ等モ極宜敷湊ト存候ヘバ領主モ惜可申、又ハ領主々々自分ニテ致交易候ハ、人ニモ寄り可申候得共、如何様之弊可生モ難計、扱又数港ヲ開キ、ミニストルヲ置キ、直交易イタシ、切支丹寺ヲ立、内地之人ヲ懐ケ置キ、諸夷申合、四方八方ヨリ一時ニ起リ立候ハ、其余ハ余程御手張ニ可相成哉ト懸念イタシ候所、右様之節ノ御廟算有之度候事、此節道路之説ニテ承リ候得ハ、蘭夷ヨリ兵庫ト下關ヘ湊ヲ開キ、貿易ヲ致シ、且両港之間ニテ海軍操練之伝授ヲ致度旨願出候トノ事、実否ハ元ヨリ不存候ヘ共、数年服従之蘭夷マテ右之勢ニ候得ハ、諸夷ヨリ各一層上々ト願立候ハ必然ニ可有之カ、此節諸蛮ハ何レモ墨夷ノ御扱ヲ如何ト致熟察候半ト存候処、墨夷御処置御決シノ上ニハ、諸蛮ヨリモ色々難題申立候ハ眼前ニ有之、扱諸蛮内地ヘ入込候上ハ、一墨夷ヲ御処置被遊候ヨリハ、マス／＼御六ヶ敷候ハ申

迄モ無之事ニハ候得共、甚過憂イタシ候、一邪教拜所之儀モ夷狄ノ商館中ヘ立、夷狄ノミ拜シ候ハ無御構トノ思召ニ可有御座候得共、近来切支丹ハ邪教ニハ無之ト申ス説蘭学者共申触候得ハ、諸大名初心得違公辺ニテ踏絵(耶蘇ノ画像)ハ御廢シ、切支丹拜所建立ハ御許ニ相成候故、悪敷ニハ無之杯申様相成、追々信候事ニ至リ、昔ノ大友(宗麟)・小西(行長)ノ如キ者出来、其節ニ相成不宜ト御心被為付御禁可被遊ト思召候テモ御行届ニ相成可申哉否、信長杯モ致後悔候様子ニ候得ハ、トクト御廟算有之度事、
 我国ニテ罪アル者、右商館中之邪教所ヘ逃入候者等出来、指出候様被為命候節、一命御助け被下候ハ、却テ指出可申杯申事ニ相成、夫ヲ強テ罪シ候ヘハ、却テ外国ノ親ヲ破リ候杯申様之儀ニ至リ候ハ、刑ヲ正シ候事モ不叶、右之罪人ハ夷狄邪教寺ノ恩ヲ以テ、命ヲ助リ候ト申事ニ可相成候ヘハ、益邪教伝染之患可有之哉ト甚々致心配候、今惡事有之候ヘハ、死刑ニ相成候之通り、又彼船ヘ乗セ彼国ヘ連行候様ニ成候、テサヘ惡事致候者有之候、況本文ハ、マス／＼惡者オソレズ多ク相成可申候
 一遊歩之事モ開港之地ノミニ候ハ、可然、無限所々遊歩ト相成候テハ、必突当リ出来可申ノミナラズ、内地之

模様モ相分り、後害多端ニ可有之候、交易サヘ出来候ハ、開港之場ノミ致歩行候テ、随分彼カ養生ニハ相成可申候得ハ、予メ後害無之様御廟算有之度候事（去ル子年）
（寛永五壬子）、横浜滞船中モ種々不法有之由ニ候得ハ、無限遊歩ト相成候ヘハ、色々突当リ出来可申カ。

一 交易御初ニ相成候ハ、此方ヨリハ武器類ハ勿論、武器用ニ相成候品ハ一切不遣サ、彼ヨリハ大小炮・銅・鉄錫・鉛（無鉛）・トタン并有用之書籍之類ノミ御取入レ、武器ニ無用之品ハ、一切入ザル様ニ成候ハ、彼カ胆ニヒマキ候故、何程表向ハ平穩ニ被成候テモ、夷狄モ恐れ可申、仮令表向武ヲ張被成候テモ、無益之品ヲ入レ、有用之器械産物ヲ被出候時ハ、彼ガ侮リヲ受ケ可申候得ハ、蘭夷之交易迄モ右之様（懸カ）ニ有マホシク、御廟算之（御廟算有之度）事（候事）水戸藩史料

本文之義、何程嚴制御立相成候テモ、直交易御許ニ相成候テハ、必奸商共ヨリ濫出之憂可有之候又銃ニ連・八連之小銃ノ如キハ、海防ノ用ニハ不相成内地悪者持候ヘハ、以テノ外ニテ御禁可然カ

一 ミニストルヲ指置キ并直交易、切支丹寺建立之儀、是皆人ヲナツケ候術ニテ、此三ツハ彼ニ在テハ尤肝要之儀（術カ）、我ニ在テハ尤以テ大害ト存候、只開港之場ヘ船ヲ寄セ致交易、双方之有無ヲ通候迄ハ害モ薄ク候ヘ共、

右三ヶ条ハ日本ヲ奪フノ術顯然ニ候間、自余之儀ト違ヒ、此上再三御申立ニテ、朝廷ニテ御許容被遊、御取掛リ相成候テモ能御通りニ可相成哉否、何共見極メ兼候、仮令御取掛リ相成候トモ、万一御六ヶ敷相成候ハ、内地ノ人ハ不奉服、外夷ヨリハ強テ申立候様相成、意外之奇禍ヲ醸候半、苦心ニ不堪候、一寸其一端ヲ申候ハ、邪教寺之事等ハ内地之僧侶初メ六ヶ敷候半、先年夷狄防禦之為、梵鐘ヲ以テ大小砲ニ被遊候トノ義、御正道ニテ、官符迄モ被下候所、夫サヘ出家ヨリ云々ニテ、今以其忤ニ相成候ハ、全ク僧侶驕立候ヘハ、檀家迄モ及候半トノ御懸念ト推察仕候所、右様日本之御為ヲ不存、無分別之出家共ハ論ニ不及候ヘ共、中ニハ御正道相分り候者ハ、出家タリ共左ノミ惜ミ申間敷候所、夫スラ僧侶ヨリ云々申候得ハ、官府ニテ被仰出候事サヘ行ハレズ、マシテ切支丹ノ儀ハ、東照宮御初メ三代將軍家之御英明ニテ、後來迄ヲモ御見通シ被遊御嚴禁被仰出、神官及八宗ヘモ嚴重被命居候事ニ候ヘハ、万一諸山合体ニテ蜂起シ、強訴等致、御取上ニ不相成候ヘハ邪教寺破却抔申事ニモ至リ可申、左候時ハ大小名ニ被命カ（候カ）、御人数ヲ以テ御取鎮メモ可被遊候ヘ

共、其上ニモ命ヲ奉シ不申節ハ、事ニ寄是非干戈ヲ用候事ニモ至リ候半、其節ハ僧侶ハ戦争ニ相成候テハ、勝利無之共兵端ヲ開キ候位ノ事ハ可致扱又命ヲ奉シ不申ハ不届ニ候ヘ共、夷狄ノ願ヨリ事起リ、僧侶タ、朝廷ニテリトモ日本ノ人ヲ被殺候テハ、如何ノ物ニ可有之候哉モ再三之御申立故御許相成候ヘ共、如何イタシ候哉杯

ト御察当ニモ相成候ハ、公辺ノ思召トハ大ニ齟齬可(ト駭カ)致哉致推察候、サレハ只今ノ内幾重ニモ御廟算有之度(度駭カ)事、

一廿年前ヨリ、拙老ノ横文字学ノ流行ハ切支丹ノ媒ト申置候所、ハタシテ追々ノ様子ヲ見候ニ、横文字ヲ学候者ハ、切支丹ヲアシクトハ不存様相成候、乍併只今ト相成候テハ、一円ニ止ル事モ相成間敷候ヘハ、蕃書調所ヲ二ケ所ニ被遊、公辺ニテ御用ニ相成者何人ト御定當時之天文方之御御聖童(水戸藩史料)扱ニ准シ可然カニテ、両所之蕃書調所ヘ御指出、仮令ヘハ東ノ調所ニテ致和解候分西ノ調所ニテ改メ、西ニテ致和解候分ハ東ニテ改メ候ト申如ク致シ、和解出来候ハ、原本ハ不残御目付方ヘ指出シ、焼捨ニ相成、右和解書ハ板ニ被遊、又大名ヨリモ蕃書ハ不残為指出、和解被仰付、原本ハ即御焼捨、指出候丈ケノ御報ヒハ相二人とか三人と応ニ被下置可然、扱又大名ニモ家ニ応シ、二人ナリ、水戸藩史料三人ナリ洋学者ノ人数ヲ定メ、猥リニ不学様被仰付、

其他長崎等訳官之外、天下之人ハ致洋字候儀御禁ニテ可然候、如何トナレバ豪民等洋学ヲ信シ、万一野心ヲ生シ、夷狄ト申合候者有之時ハ、実以不容易事、天草ノ乱ニモ繼キ可申候得バ、早々御禁可然、御廟算有之度事、(度駭カ)

一 休夷狄ヲ近付不申様ニト有之東照宮御始御代々之御主意ハ、御正道ニ有之、右ヲ御変革御近付ト申スハ、當時不被得止御權道ト奉察候ヘハ、内地之者ニ不服之者無之トハ難申、万一内ヨリ事起リ候時ハ、御扱ニ御指支之儀モ出来可申哉、左候得ハ内憂外患イヅレカ早ク可有之哉、(御廟算有之度候事、水戸藩史料)御廟算之事、

本根実シ居候ヘハ、仮令夷狄ニテ兵端ヲヒラカントシテモ、直ニ内地ヘ入候事ハカタカルベク、運米ヲ妨ケ、又離島ヲ奪候様之儀可有之、其節本根無恙候ハ、枝葉ハ被切候テモ、又本根ヨリ萌芽ヲ生シ候道理ニテ、内サヘ整居候ハ、施策可有之候ヘ共、本根傷居候テハ繁茂之期有之間敷候、サレバ今ノ内本根ヲ培養ノ手段アラマホシク候、

一 墨夷始諸夷ヨリノ願、追々為御濟之上ハ、万々一朝廷ヨリ品々御好出候モ難奉計候所、防禦ノ御手当御行届

ニ不相成程之御砌り、夫モコレモトハ被遊ガタク義勿^(キカ)
論ニ候へ共、御上洛杯ノ如キハ君臣ノ大義ニテ、東照
宮御初度々被遊候事^(御殿カ)ニテ、夷狄ノ願ハ先例無之モ御許
シ、御主君ヨリノ勅命ハ、御先蹤有之事モ御断リトモ
被遊兼候半、又諸大名ヨリモ種々願立可有之モ難計、
旁御廟算有之度候事、

一御大變革御箇条之事、惣テ日本御為宜敷様御變革ハ御
尤ニ候得共、夷狄ノ願ニヨリ、万一枉テ彼カ為ニ重キ
御祖法ヲ御變革ニモ相成義ニテハ、大名共モ自分々々
ノ勝手ニ相成候儀願出候モ難計、前モ認候通天朝ヨリ
ノ勅命、大名ヨリノ歎願モ御義理合ニテ、無御拋御濟
セ無之候テハ不相成様可相成所、右ニテハ公辺御為如
何可有之哉、御廟算有之度候事、

一被奉安叡慮候御儀、譬へハ紀・淡ヨリ内へ入レ候義、
并鳥羽港ハ伊勢神宮へ近ク候得バ、是等ヲハ幾重ニモ
御断リニ相成、五畿内近クハ不參様ニ被遊、ミニスト
ル指置キ、直交易、切支丹寺建立杯ノ代リニ、無御故
障場所ニテ一二港位ハ御増ニテモ、前文為御濟ヨリハ
マシ可申哉(稍開港ニ傾タリ)、右様相成候テモ彼カ益
ニ相成候事ハ数多有之候へハ、彼ヨリ兵端ハ開キ申間

數候、尤御答致遅々候へハ、催促カテラニ聞夷杯誘来
候モ難計候へ共、夫ニ恐レ、後害ニ相成候事マテ為御
濟相成候テハ、尚以御威光ニ拘リ候へハ、不成事ハ不
成由幾重モ御断リ可然候、能々御廟算有之度候事、

人心不居合候へハ、居合候迄ハ交易一ト通りノミ致
シ、十五年カ廿年ノ後人々交易ノ利ヲ存候ハ、居
合可申、其節兎モ角モ可致旨期限^(トビ)ヲノバシ、其内御
武備御手厚被遊候儀肝要ニ可有之候、且応接ノ模様
ニ寄り、汝ハ万国普通之法箇様々々、又世界万国ニ
例無之杯種々申張候へ共、第一合衆国ニテ大統領之
位ヲ年限ヲ以テ輪番ニ勤候杯モ、万国ニ例モ有之間
敷、我國ハ封建ニテ、土地モ大名へアツケ置候事故、
交易之利モ万国ノ如ク広ク致候事ニ相成兼ル杯、其
場ニ臨ミ断リ方ハ何程モ可有之儀ニ存候、扱又御断
リノ節、彼直ニ致屈服候へハ、外ニ無之候得共、定
テ今更右様御断リニテハ、本国へ復命致兼候杯申張
候ハ指見候事ニ候間、其節ハ汝カ主命ヲ重ンズルハ
尤ナリ、併此方モ亦主命故断リ之外無之、併汝カ志
モ御察シ被遊候間、本国へ御使被遣候、汝カ主命ヲ
辱メタルニハ非、此方ハ此方ノ思召ヲ以テ御断リニ

相成候ニ付、無心配引取候様被命、アメリカへ御使〔御使に
て御断に相成候は、水戸藩史料〕
相成候へ、御威光モ相立チ、ハルレスへモ面目ヲ
不為失、旁可然被存候、扱其御使へハ至極ニ重任ニ
候へ共、数万之御旗本ニハ、其任ニ当リ候者数多可
有之候へハ、非常ニ御拔擢御任ニテ被遣、彼へハ〔符カ〕
リヤ、ハルリスノ上ニ出候程ニ必死ノ力ヲ尽シ候ハ
ゞ、彼モ承服可仕、主客ノ勢モ定リ可申哉、
一古キ記録ヲ見候テモ、秀吉ハ勿論、東照宮ニテモ朝廷
へハ殊ノ外御親敷被遊、〔徳川秀忠〕 臺徳公ニモ姫君迄御入内モ被
遊候へハ御親キ事ト奉恭察、〔徳川家光〕 大猷公迄ハ御上洛モ被遊
候所、其後ハ如何様ノ御意味合カハ不奉承知候へ共、
御遠々敷相成候処、何分朝廷ヲハ御尊、且ツ御親敷被
遊候方公辺ノ御為可然ト乍恐奉存候、且京坂之御備ハ
何卒御手厚被成進候様致度候、只今之姿ニテ万一明日
ニモ如先年夷狄大坂ニ乘入り、内地ヲ却シ候為大砲ニ
テモ打掛候ハゞ、於御所江戸へ被仰進候間モナクテ、
直ニ大名へ可被命モ難計候所〔此後果シテ如所記〕、左様
相成候テハ公辺御為ニ不相成候故、先テ近畿之大名へ
被仰付、非常之節ハ早速人数指出、次第ニ寄り主人迄
モ致出馬候様被成置、又畿外ニテモ程近キ者へハ、模

様ニ寄人数并出馬モ致候様御達ニ相成、洛外、河・攝
ヨリ入口へ二三ヶ所モ陣屋御出来、常ニ番兵指出候様
扱被遊候方可然儀ニ奉存候、尚兼テ御勘考ニ致度候、
扱右様大名ニモ兼テ御内達有之、万々一之節ハ右御内
達ニ相成居大名へ、直ニ所司代ヨリ夫々相達候様ニト
申奉書ヲ、兼テ被遣ニ相成居候ハゞ、御手ノ廻リ候処
ヲ於天朝御満悦ニ被思召候半、左候へハ火急之節モ、
御所ヨリ直ニ大名へ被命候様ノ御不都合ノ儀モ有之間
敷存候間、早速御廟算有之度事、〔候脱カ〕
右件々、憂慮之余リ思出候マニ、認候、素ヨリ倫
次モナク、体裁モ無之候間、其文ヲ捨、其意ヲ御汲
取ニ致度候、此他繁文縟節ヲ省キ、太平ノ習俗ヲ一
掃シ、武備專一ニ御仕向、天下之人心ヲ致一振候事
等、短文ニ難尽候故、全ク方今指向ヒ之所ヲ致愚慮
候、
源をにごさしと思ふ人ならて、誰にかいはむ水の
こころを、
〔水戸藩史料 吉川弘文館にて校訂〕

七三 京都所司代 (酒井若狭守) 意見書取
聖墨利加国使節申立候趣モ有之、一体之事情等委細入

叡聞候様、旧臘林大學頭・津田半三郎上京致シ候処、猶追々申立候儀モ有之、外国御取扱等御变革被為在候付テハ、列侯・諸藩等居合不申候付、為御伺

叡慮 御使備中守被^(老中堀田正睦)仰付候間、急速關東発駕可致処、当年頭御使高家京着比合、二月七日八日頃ニ無之テハ御差支モ有之由候処、右体御差急之御用柄ニモ有之候間、其以前備中守上京致シ候テモ御差支有之間敷哉、御両脚エ否為御尋、早々申越候様ニト年寄共ヨリ申越候事、

正月

七四 大道寺玄蕃意見

山井伊豫守様

御直呈

大道寺玄蕃

今度閣老備中守殿初諸役人上京之由、右ハ尊地之説如何之趣ニ御座候哉、又ハ

叡慮ヲ被奉伺、天下エ御下令之事ニ候哉、殿下^(尚忠)

エハ御親敷御参殿被遊候御様子ニ奉存候間、今般之事体御内密御伺セ可被下候、今般ノ一件不容易事柄ニ奉察候間、密々奉伺度、実ニ国家之安危此時ニ御座候間、

武士ノ身ニ取候テハ、戦々競々ト寝食之間モ不被安時勢ト相成候間、何卒御様子委密ニ為御伺被下候様奉願候、且ハ又御探秘之事共ニテ、殿下御從モ不被為在御事ニ候ハ、貴説無御腹藏御示被下候様奉願候、何ヲ申モ国家ノ為ニ伺候間、御憐察奉願候、頓首、

正月廿六日

直實

山 豫州様

猶々、三月比御下向ニ御座候ハ、以前ニ一寸為御知可被下候、此段分テ奉願置候、以上、

七五 松平阿波守密申

乍恐内密奉申上候、今般林大學頭・津田半三郎、引統堀田備中守上京、垂墨利加条約之箇条、其余之事共具ニ入

叡聞候事ト奉存候、近来不容易時勢ニ推移リ、方今別テ不穩、既ニ今般之次第ニ相成候、乍恐宸襟被為^(德)腦、

叡慮之御程如何被為在候儀ト、誠以奉恐入候、誠ニ今般之件不容易御一大事ト奉存候、此般ニテハ往々日本之御為如何御座候哉ト奉掛念候、屢外夷之变化形勢熱

慮定考仕居候テ、唯今迄ハ斯クモ不申上候得共、就中
方今臨深履薄之世態ニ相及、諸夷

皇居近キ海岸ヲ望候事情ニ相成、誠以御大事無此上危
急之場ニ相逼リ、乍恐

御案思奉申上候、日夜眠食不安、苦慮心痛仕罷在、万

一非常之節ハ為警固軍勢差登シ、弥騒乱ニ及候得ハ、

上京仕、禁裏奉守護、列侯ニ先立粉骨碎身微忠相尽候

心底ニ罷在候、誠ニ恐多事ニハ候得共、聊ニテモ

宸襟御安堵之場ニ被為成候様奉專念候、依テ赤心報國

之存慮、極密奉申上候、誠恐頓首、謹言、

松平阿波守

二月十一日

齊裕

別紙内密奉申上候、如本書今般之件々、殿下嚙々不一

方御配慮被為成候御儀ト奉察候、將又私儀度々幕府エ

上書仕、閣老エモ存寄申上候得共、更ニ御採用無之、

最早諫争之道絶果、歎息仕罷在候、且是迄ハ不容易事

ニ付、存慮奉申上候儀無御座候得共、差扣居候場合ニ

無御座候、乍恐

天下之御安危此一举ニ有之事ト奉存候間、此度殿下エ

申上、宝祚長久・兆民安寧・外夷威服之御所置被
仰出候様奉希望候、此段極密奉申上候、頓首謹言、

二月十一日

齊裕

太閤殿下(輔應)
(鷹司)

内密御通覽

七六 在京原田才輔密報中ノ要点

太閤殿(鷹司輔應)御儀、一昨日頃御内覽ヲ御辞退御願

被成候由、此度ハ多分可被 免哉、何レカ

御所向御混雜不相成候テハ宜哉ニ候得共、既ニ昨日萬

里小路殿(博房)御引籠可被成杯被仰立、御同列方ヨリ

御説得等モ被有之候由、

一御所向御返答之次第、江戸表エ被仰進候段、去ル廿八

日御所向エ御達ニ相成候由、右ハ何レ江戸ヨリ

思召被仰進、彼是御往復ニ可相成哉ニ候得共、約リハ

是迄御三家方以下諸侯方、江戸表エ兼テ被差上候御建

儀書ヲ(紀・尾・水三家、其他各藩建言ヲ云フ)、可被入

觀覽ニトノ御中折レニテ、御所置可相成ヨリ外有之間

敷哉ニ、内実其筋之御方々之御見込之趣、極密挨拶申

候、如何可有御座哉、聞取之俟此段申上候、以上、

午三月朔日

七七 無名書第一（幕府補助論者ナラン）

異国一条ニ付、

御所表御返答之御模様洩レ聞之儀、内談仕置候、先キ之者申聞候ハ、右一条一ト比トハ余程御秘シニ相成候趣ニテ、聞込後レニ相成候得共、左之御趣意柄ニテ、最早御旅館ニ御返答ニ相成候哉之由、尤御返答振内見モ仕候得共、堂上方之御前ニテノ事故得写取不申由、一人心居合方之義、

關東ニテ御引受相成候上ハ、

祖宗之被立置候儀ニ相振候モ痛ミ

思召候得共、先ツ当節之次第無御余儀御事ニ

思召候間、御瑕瑾ニ不相成様、御取計頼

思召候旨、

一右之外御警衛向等之儀ニ付、思召之廉モ有之候

由、

右之趣相洩シ申候、今一段不委敷取摘候聞ヘロニ御座候上、後レナカラニ御座候得共、御断旁入御内聽申候、且御所内ニテモ兎角御存込一様ナラズ、儀奏久我家（御）

建通）ニハ是迄御為方ヲ被存候テ、被申立置候儀モ有之候処、前段之御返答振ニテハ御存意ニ相振レ候旨ニテ、御役御免之御出願被致候トノ風説御座候由、右之段申上候、以上、

三月十二日

七八 全上第二

（頭注）寢輪甲第 号參看、近衛家日記參看

此間極密申上置候御返答振一条等之儀、相洩シ具候モノ承込候次第ハ、堂上方之内ニテ書面内見之上、記憶之趣ヲ相洩シ具候儀ヲ申上置候儀ニ御座候処、右書面之内御頼ト御座候二字、

御所内ニテ御承引無之御方ニ有之、彼是御混雜ニ相成、

兎角 御返答振御未定之由ニ相聞候旨、猶又相洩シ申

候間、此段申上置候、以上、

三月十五日

七九 全上第三

過刻御沙汰御座候一条、御趣意差含其筋エ罷越、探索仕候処、左ニ申上候、

一明十八日御參 内之儀ハ、未廣橋殿御退出無之、難相

分候得共、是迄之振合ハ多分御参 内被仰出候ハ、廣橋殿御宅ニテ、所司代始夫々ハ御通達向御取計之儀ニ付、明十八日御参 内ハ無之哉ニ被察候、明十八日御参 内ト申儀ハ、定テ昨日頃廣橋殿御附衆ニ、於

禁中御祥月之日限御問合有之故、十八日ニテモ可有御座哉ト被仰上候儀ニテモ可有之哉、何分ニモ只今迄ハ御参 内之御沙汰無之、若哉弥十八日御参 内ト申儀相分り候ハ、早速可申越様手筈仕置申候、

〔殿長〕一東坊城殿御退役御跡ハ、一向ニ御噂モ無之由ニ候ヘ共、御老中(堀田)御発駕後之御評定ニ可相成哉、關東表ニ御人体御相談被為在候上ニ無之テハ、跡御役被仰付候儀無之由、且又不取留風聞ニハ、久家殿〔我〕(建通)押テ御出勤之儀御沙汰御座候付、昨日ヨリ御出勤有之由、御同人ハ御順之儀ニ候ヘハ、御跡可被仰付御心組ニテ御出勤被成候事ニモ可有之哉ニ相聞申候、

一勅答御案之儀ハ最前モ申上候通、一兩日已前ヨリ格別御取締ニ相成候付、一向ニ御洩無之、東坊城殿御退役後別テ御嚴重ニテ、頓ト御噂モ無之程之儀ニ御座候、乍併先日申上置候

勅答御文言之内、御加除有之候由ハ承り候ヘトモ、御

案未拜見不仕、若哉御下ケニモ相成候ハ、勘弁仕、写早速可差越旨、尤勅答後ニテモ同様差越可申旨、内々申居候儀ニ御座候、右之通聞取之俛、此段奉申上候、以上、

三月十七日

八〇 全上第四

〔領事〕
〔殿長〕
〔御参〕拜見仕候、弥御安全珍重奉存候、然ハ過日御咄申入候

一紙ハ、手ニ入候ニ付、極内拜見致候、相違之処掛紙テモ可仕被仰下候処、此間以来モ御咄申入候通、粗々私一見之俛申入候得共、御別紙サハ漸御廻ニテ、篤ト拜見候位之事ニ有之候、尤〔不明〕□□堂上列参ノ後相替り候儀ハ、未聊モ不存儀ニ有之候間、此儀ハ何トモ只今〔不明〕□□御返答申入兼候、乍去先ツ預り申置、手元ヘ廻シ候ハ、校合可仕候、

〔彦左衛門、禁裏尉〕一老中参内之儀、又々昨夜モ大久保大隅守殿用人入来、催促有之、則其人ヘ申入候処、今少々ノ処打合不相付候事故、今日之処モ延引ニ相成候得共、明廿日ニハ必参 内被仰出候事ニ可有之候間、今十九日午刻前後未

刻迄ニハ本多殿方〔忠良、京都所司代〕へ通達ニモ可相成、尤差掛候事故、

事ニヨリ尹殿ニモ無之便宜ノ方ヨリ可被申入欵モ難被計ト申返答ニ有之候、乍去明日之処モ又々延引モ難計候得共、十カ九ツ迄明日被仰出儀ト被申入候、且又参内ノ儀ハ、何レ兩度ニ可相成候由ニ有之候、右之次第故、今日被仰出候節私共ヨリ尹殿ニテ可申入迄ニ、將軍家へ於御前直ニ可申入モ難計候へトモ、開付次第可申入候、

一堂上方列参聞繰候処、追々相分候へトモ、今少々相分兼候処モ有之候間、重立候方、中山大納言殿・正親町三條中納言殿・大原三位殿・豊岡三位殿辺ノ様聞へ申候、尚又相分候ハ、可申入候、以上、

三月十九日

(別紙)

今度堀田殿へ附添、上京ノ川路殿其外へ御料理ニテモ可被下哉之事、右ハ何レニモ無之、從關東被進御品ニ附被申候、原矢十郎殿・立田彌助殿等ニ御料理拜領物等有之候、余ハ無之候事、

八一 公上第五

乍恐口上

当十一日昼七ツ時分ヨリ暮時迄之内 上様(主上)ヨリ御堂上方御召有之候由、追々ニ公卿方八拾四卿(八十八卿ナリ)程御参内、右御人数一時ニ九條殿エ被押詰、同日夜五ツ時分不残御引取ニ相成、何カ至急之様子ニテ、御沓不被召

禁中へ御上り、草履之俣御越ノ方モ有之、既ニ九條殿御玄関ニ右草履残り有之候由、然ルニ御趣意疋ト不分候得共、鷹司大閣殿金三百兩計、東坊城殿エ三四ケ度ニ同五百兩計(此他品物類許多ノ賄賂ヲ送リタリトノ説アリシト、東久世伯親話)、御老中堀田備中守様ヨリ御賄賂御受、禁中御評儀之次第御内通被遊候趣ニ付、諸卿方御立腹、被仰合九條殿へ被押詰候哉ニ風聞、

一上様ヨリ異国一条ニ付、

鷹司大閣殿ヲ三四ケ度計御召被遊候得共、御所勞之旨御断被成候付、当月十一日比、上様ヨリ以来何事ニ不寄差構申間敷候旨(虚説ナラン)、大閣殿エ被仰渡候由風聞、

一九條殿重人一条ニ付、御暖振惡敷候由ニテ、先月廿五日比 九條殿エ久我殿御参内御面上、九條殿ヲ被言籠御帰殿、直様御引籠被成候由、且又 九條殿御在勤

中久我殿御儀御所へ御参内無御座候旨風聞 (虚説)

一 鷹司大閤殿御儀、関白職御勤中

禁裏御囲米三拾万カ、三万石カ賤ト不分、關東表へ被

仰候処、御承引有之、然ルニ御当職 九條殿ヨリ禁裏

ニハ御囲米ハ不用ニ付、難渋之御堂上方エ配当為致度

旨被仰出候処、鷹司大閤殿ヨリ此方御役中致置候儀、

当職之自任ニ難相成候由、御答被為在候処、 九條殿

儀当職ヨリ取計候儀御用ヒ無之候ハ、当職御辞退可

致候旨被仰出候由 (宸翰甲第 号ニ稍之ニ類似ノ御文アリ)

一 禁中様ハ巫人何レニモ相果シ可申、勝利ハ其時之運命

ニ任セ候儀付、朕儀モ出陳^(陣)可致候様被仰候由風聞 (虚

説)

右之趣不取留空説而已ニ候得トモ、相聞エ候迄、此段

風聞奉申上候、以上、

三月十七日